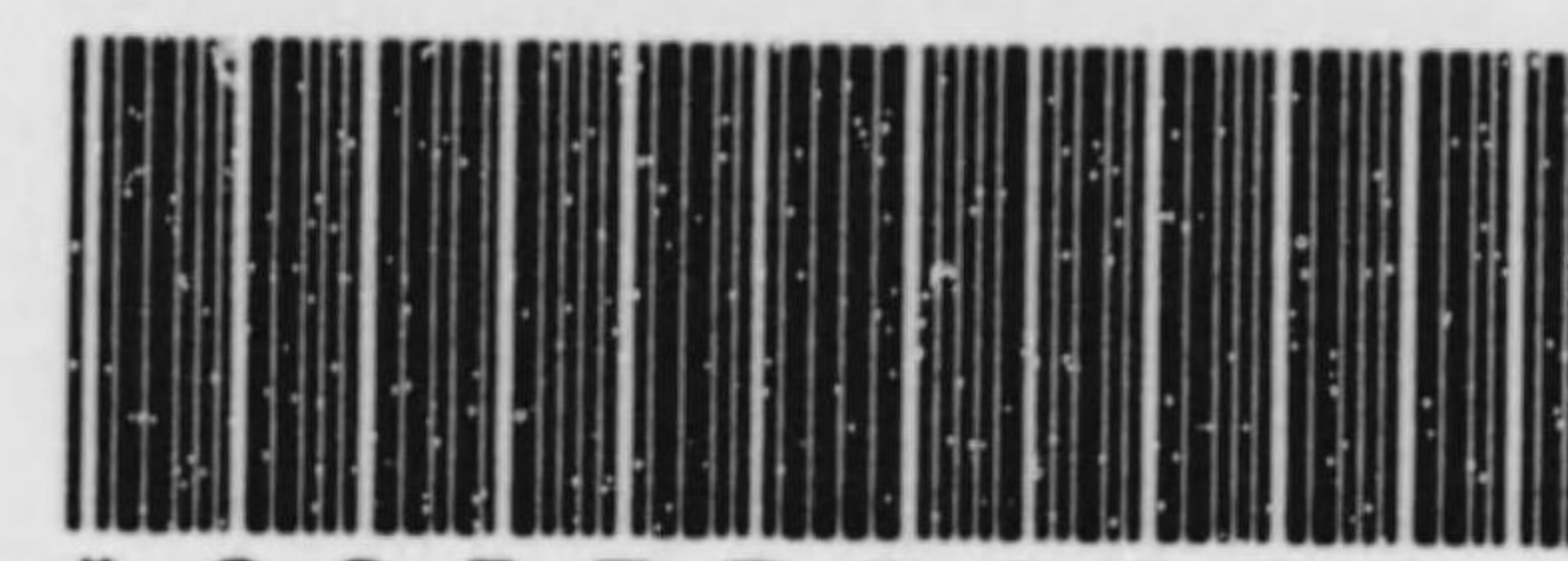


1



* 0057732000 *

0057732-000

318-5451

古今世界大海戦史

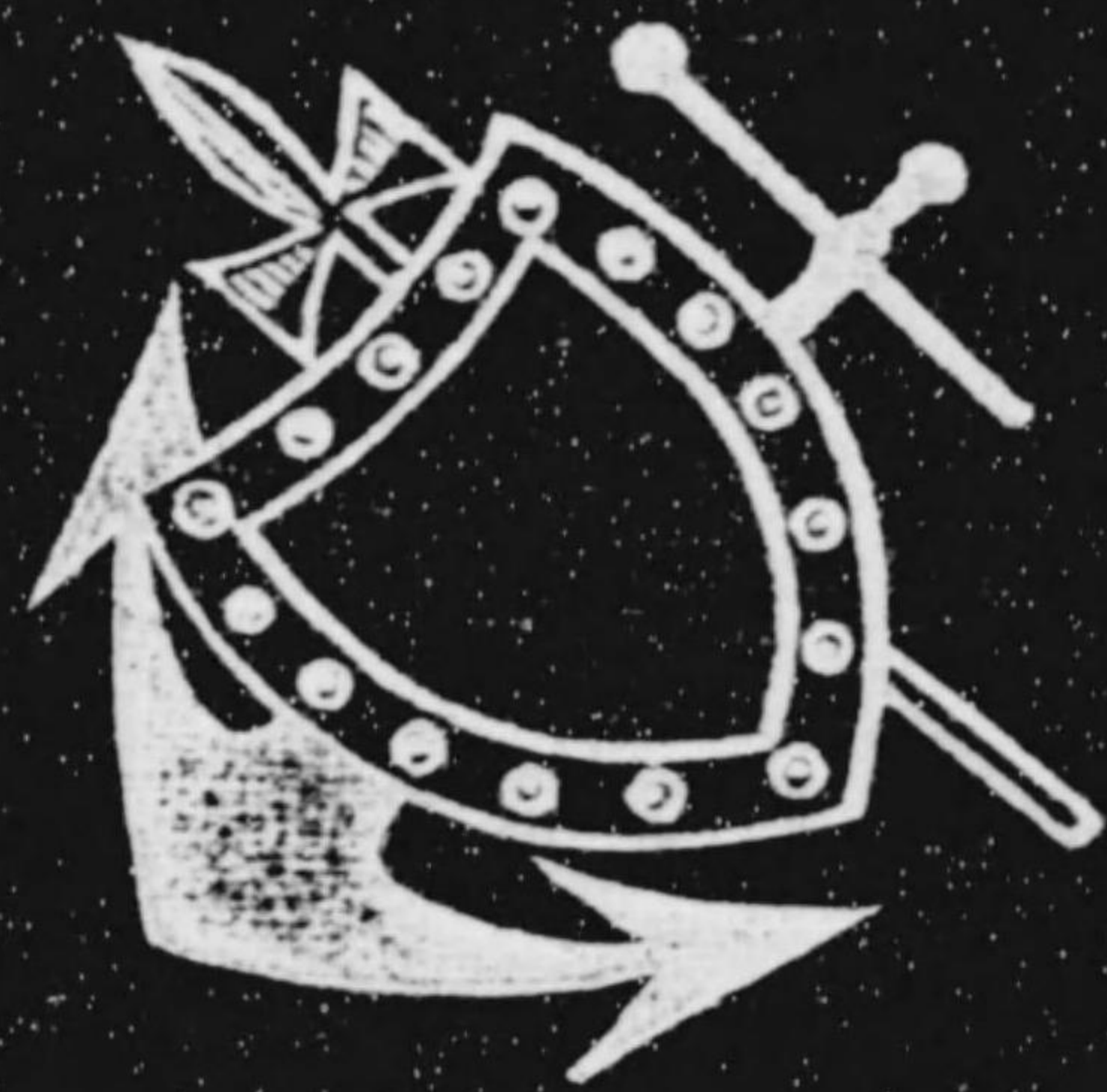
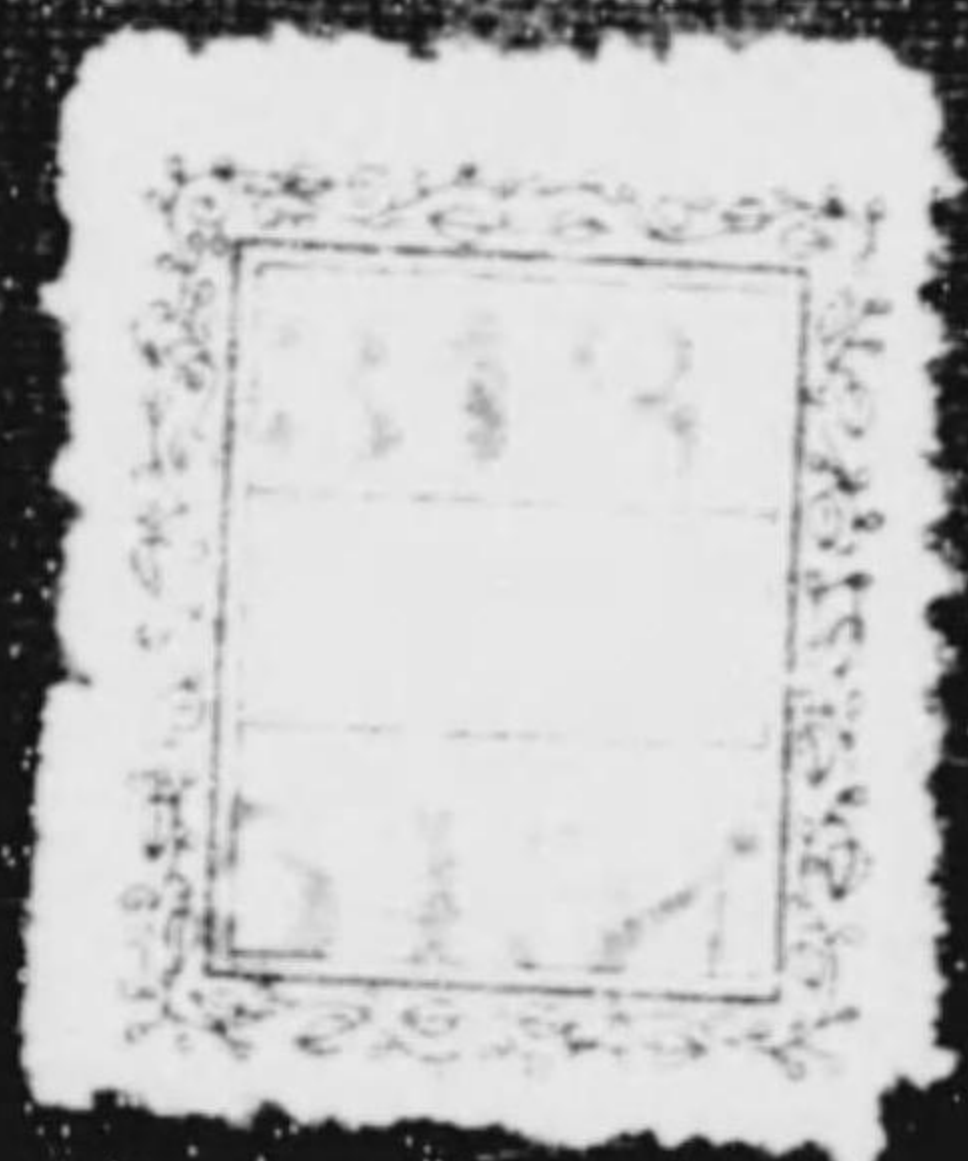
春藤与市郎・著

大同館

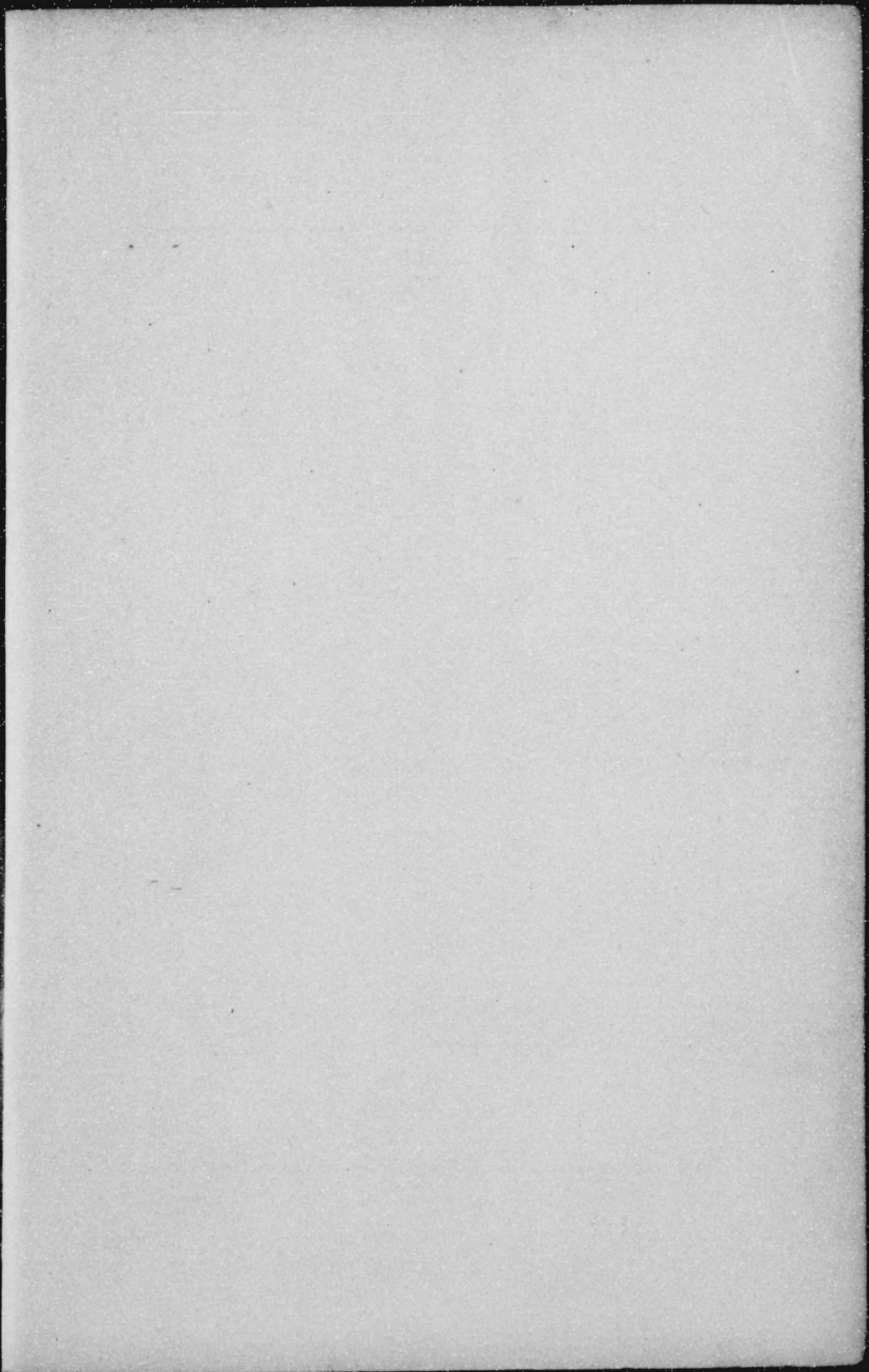
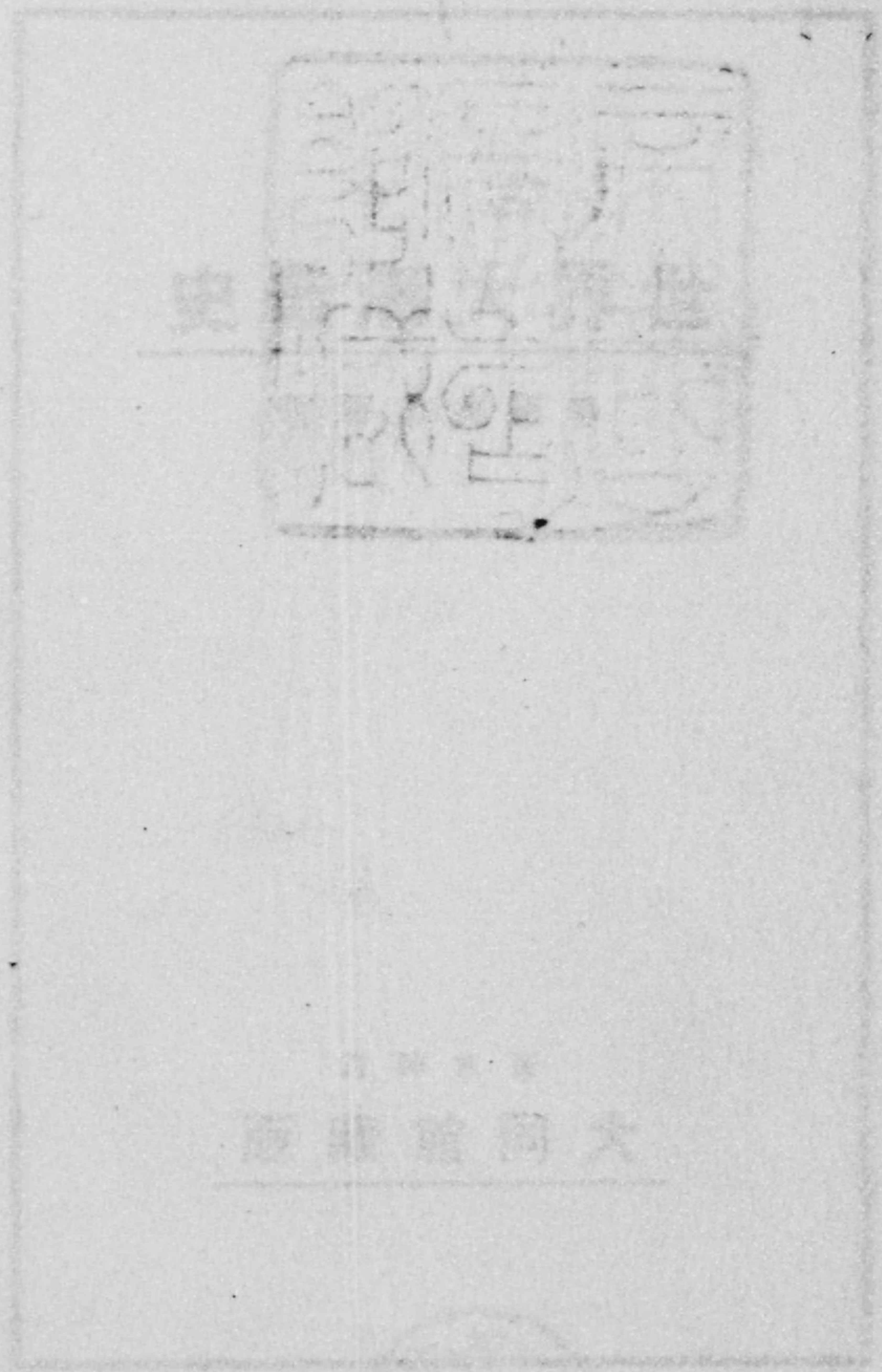
昭11

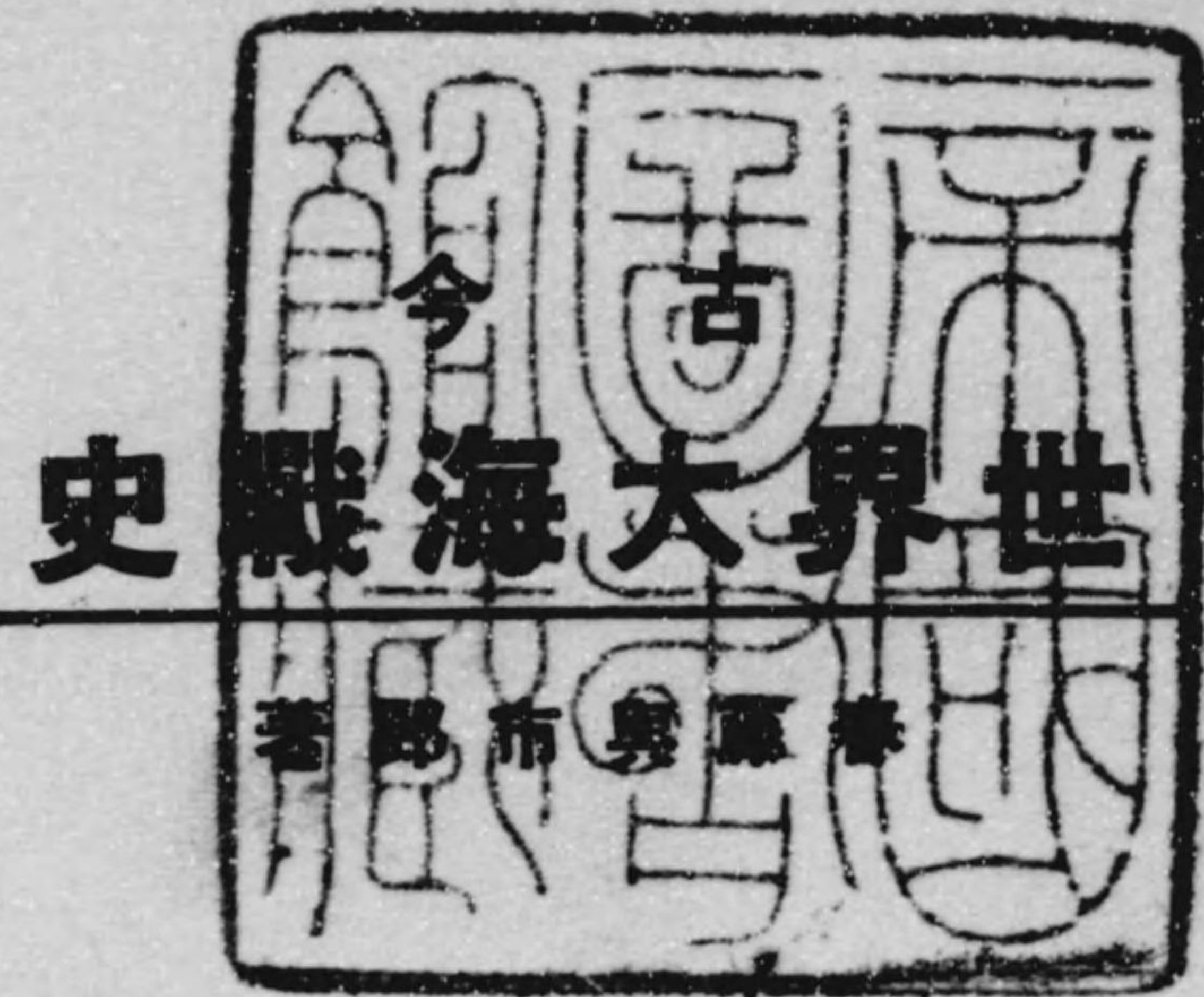
AJG

この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第67条の規定に基づき、平成12年3月
けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの



295





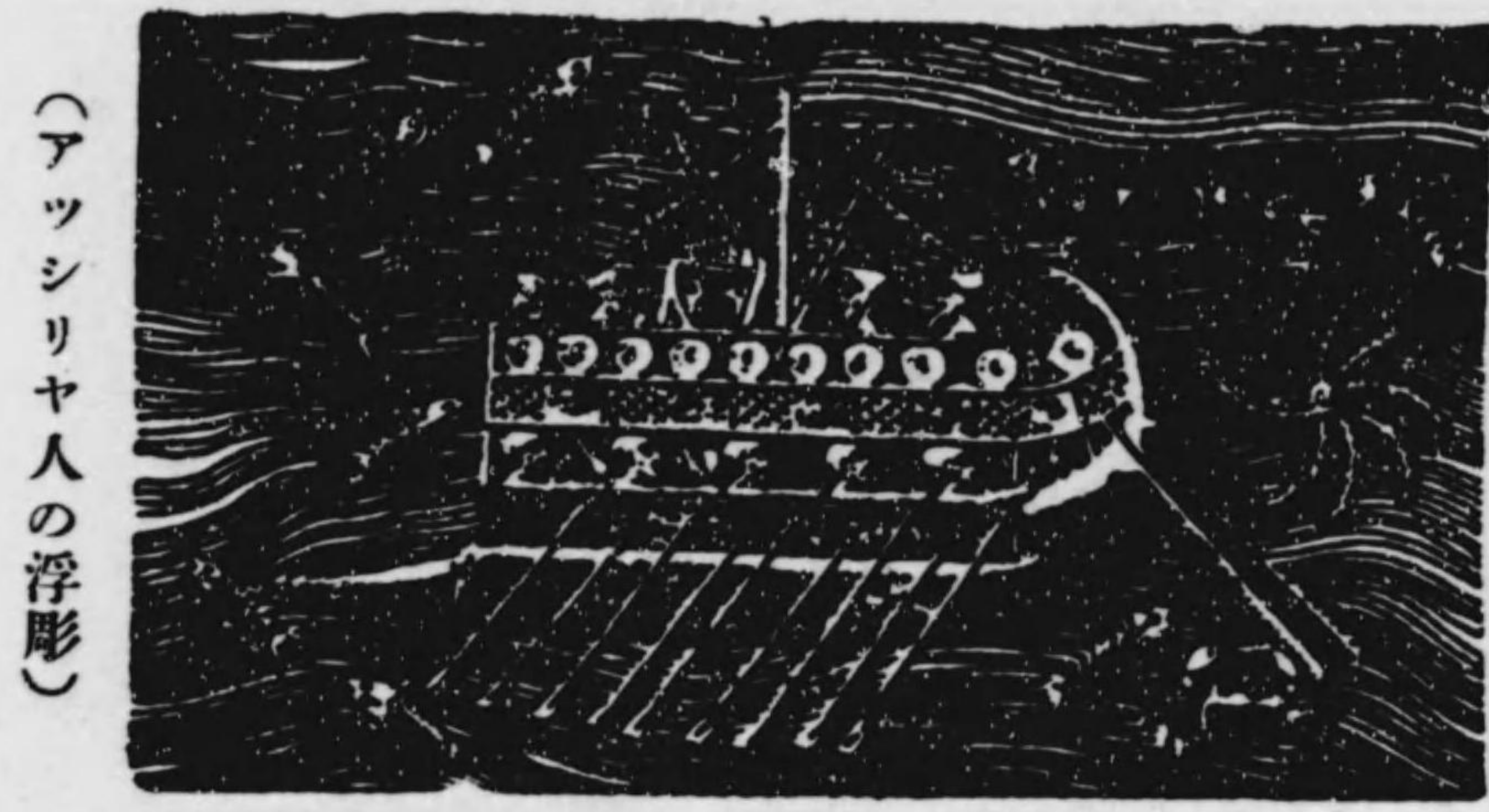
世大海洋史

著者 藤田鳴鶴

東京 神田

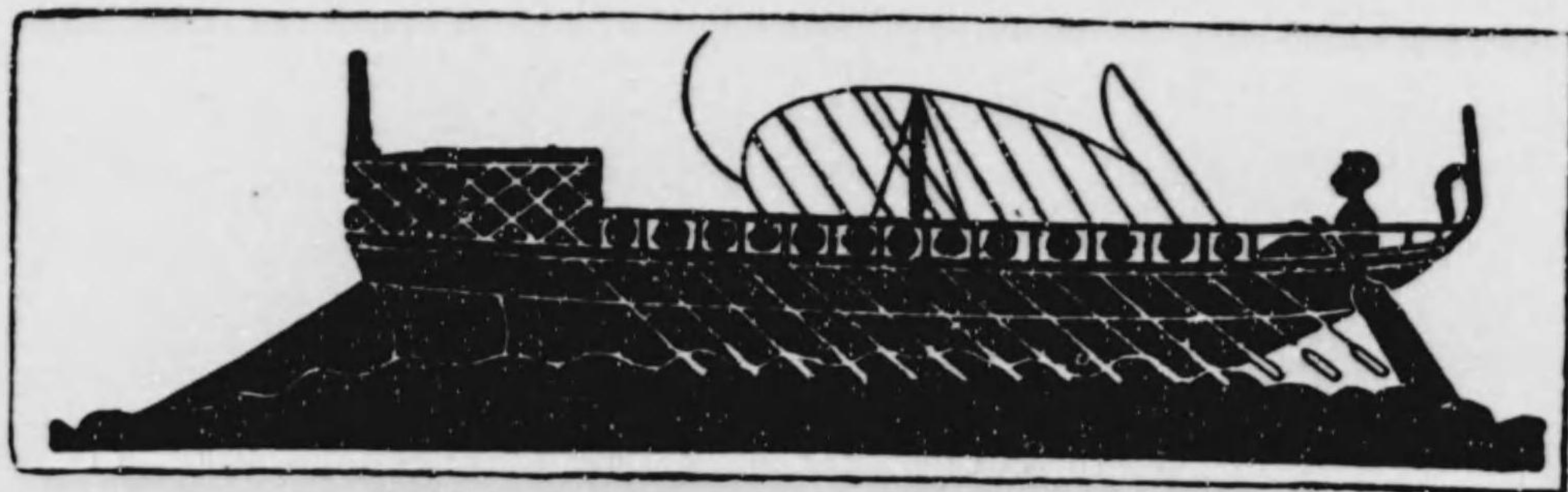
大田館藏版





(アッシリヤ人の浮彫)

フェニキヤ人の軍艦



(ギリシヤ人の模様)

ギリシヤの軍艦

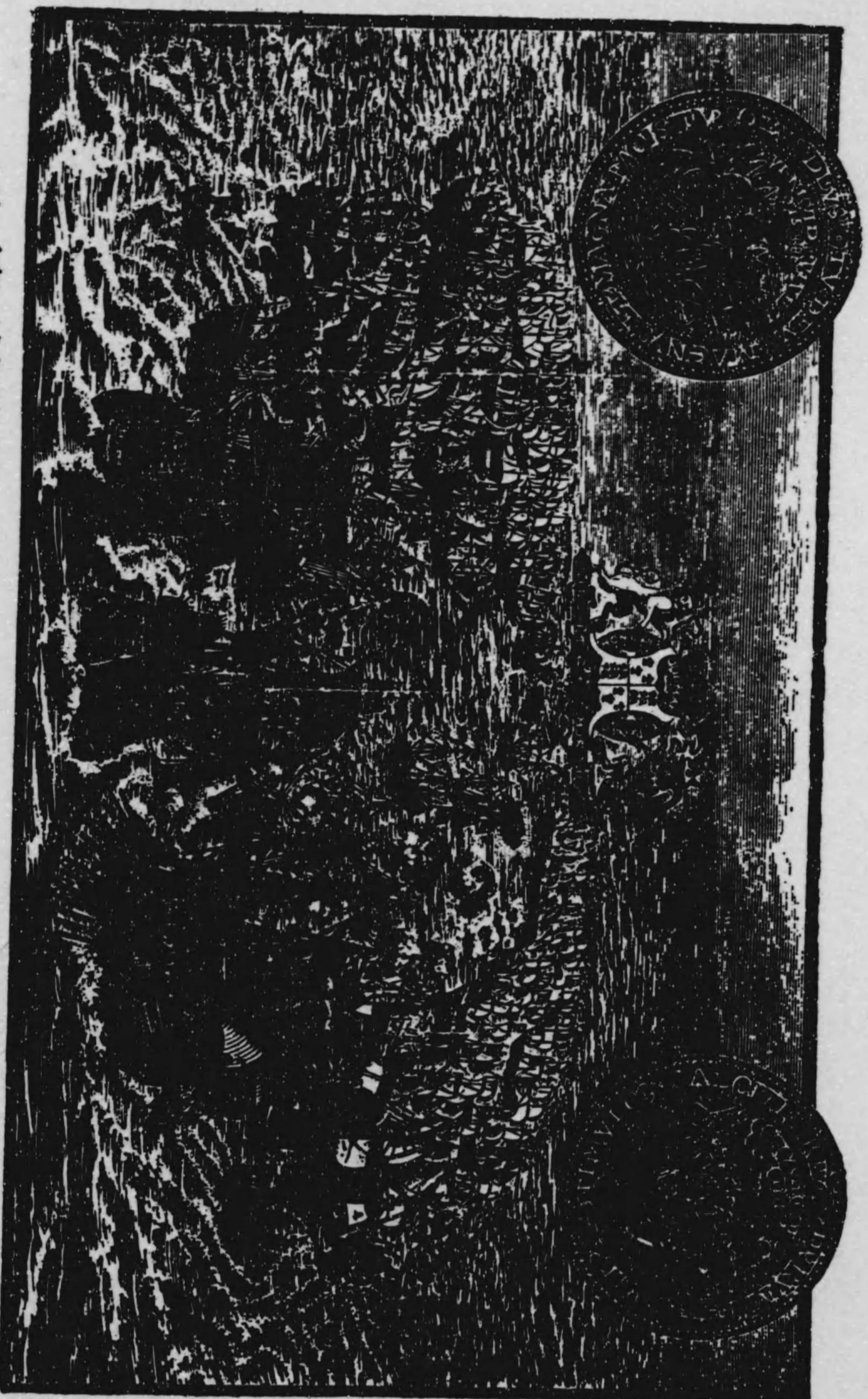


(ローマ人の版畫)

ローマの軍艦

イ
艦
隊
ス
ギ

イ
艦
隊
ス
ギ

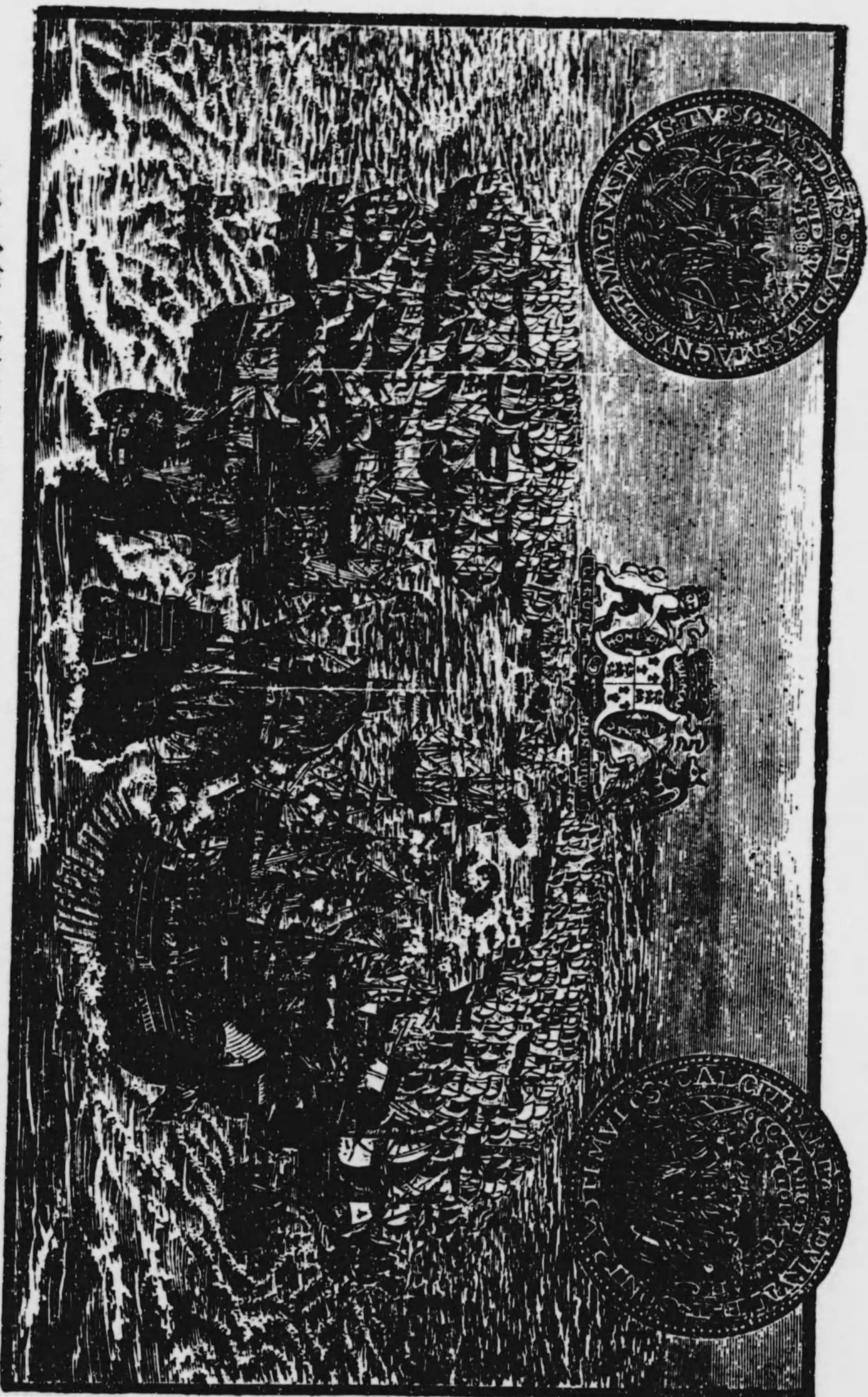


(イギリスの版畫 西洋全史より)

ルダヌ念紀の滅塵隊艦敵無に並突衝大のと隊艦スリギイと隊艦敵無るけ於に沖島トロイワ

艦リイ
隊スキ

隊ヤバイ
艦ニス



(イギリスの版畫 西洋全史より)

ルダメ念紀の滅塵隊艦敵無に並突衝大のと隊艦スリギイと隊艦敵無るけ於に沖島トロイワ

南軍の
メリマック號

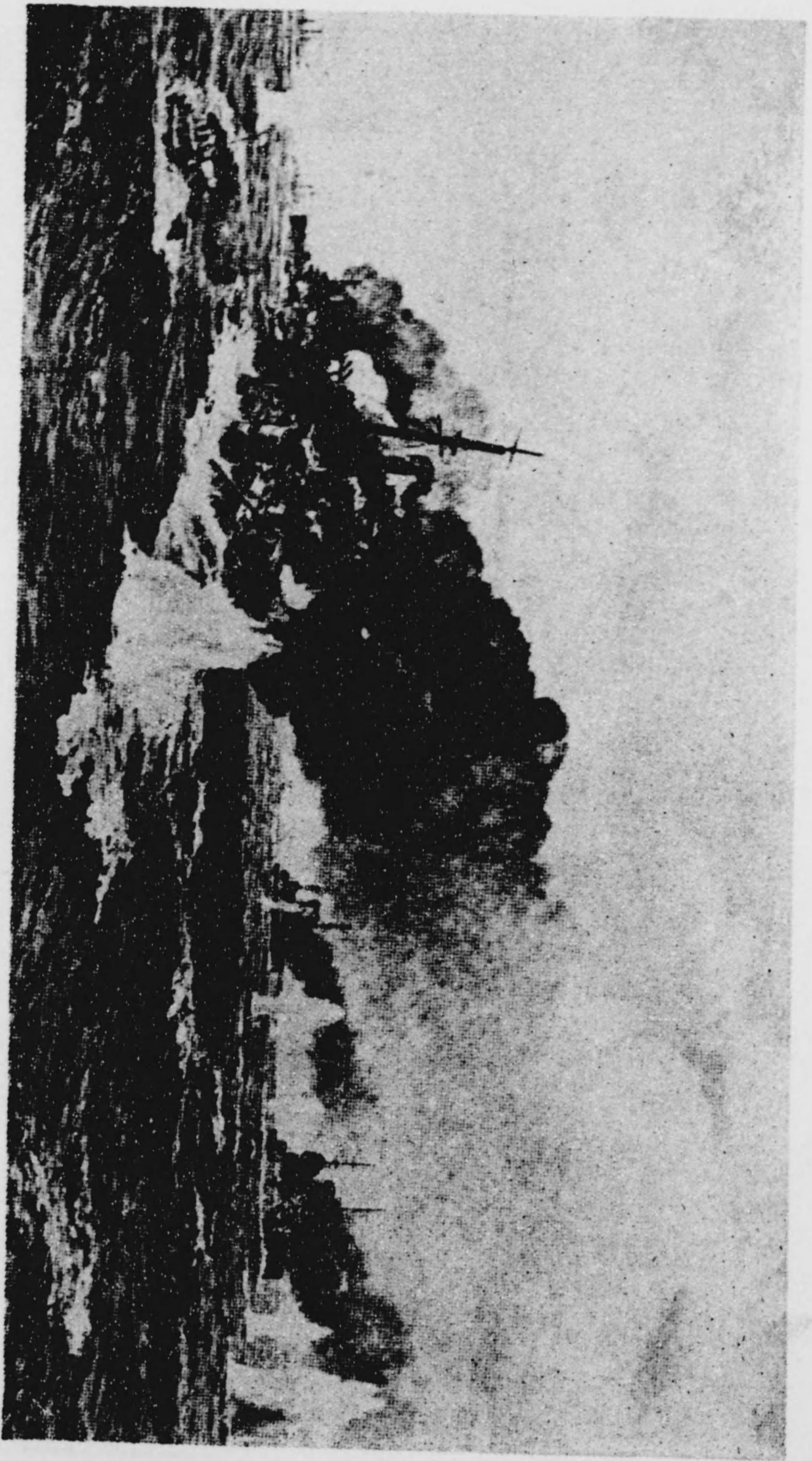
北軍の
モニトル號



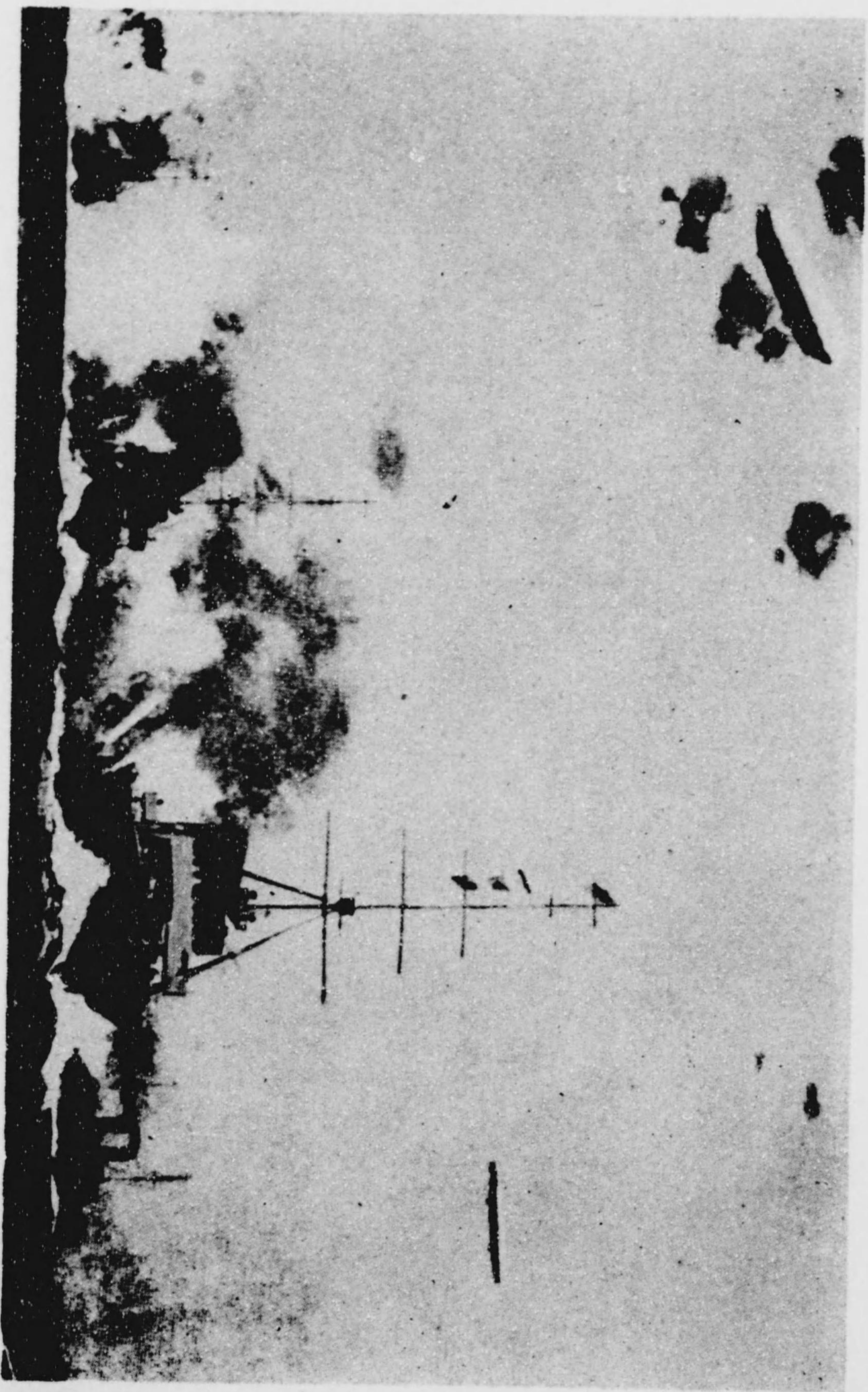
甲鐵艦の魁

ハンプトンロードの海戦（一八六二年）

北米合衆國南北戰役に於ける海戦



艦隊をすくわれし港撃面正 (左ヲツ向) (日七廿月五年八十三治明) 戦海大海本日 (参勇の笠三艦旗) (右ヲツ向)



最 初 の 立 體 的 戰 闘

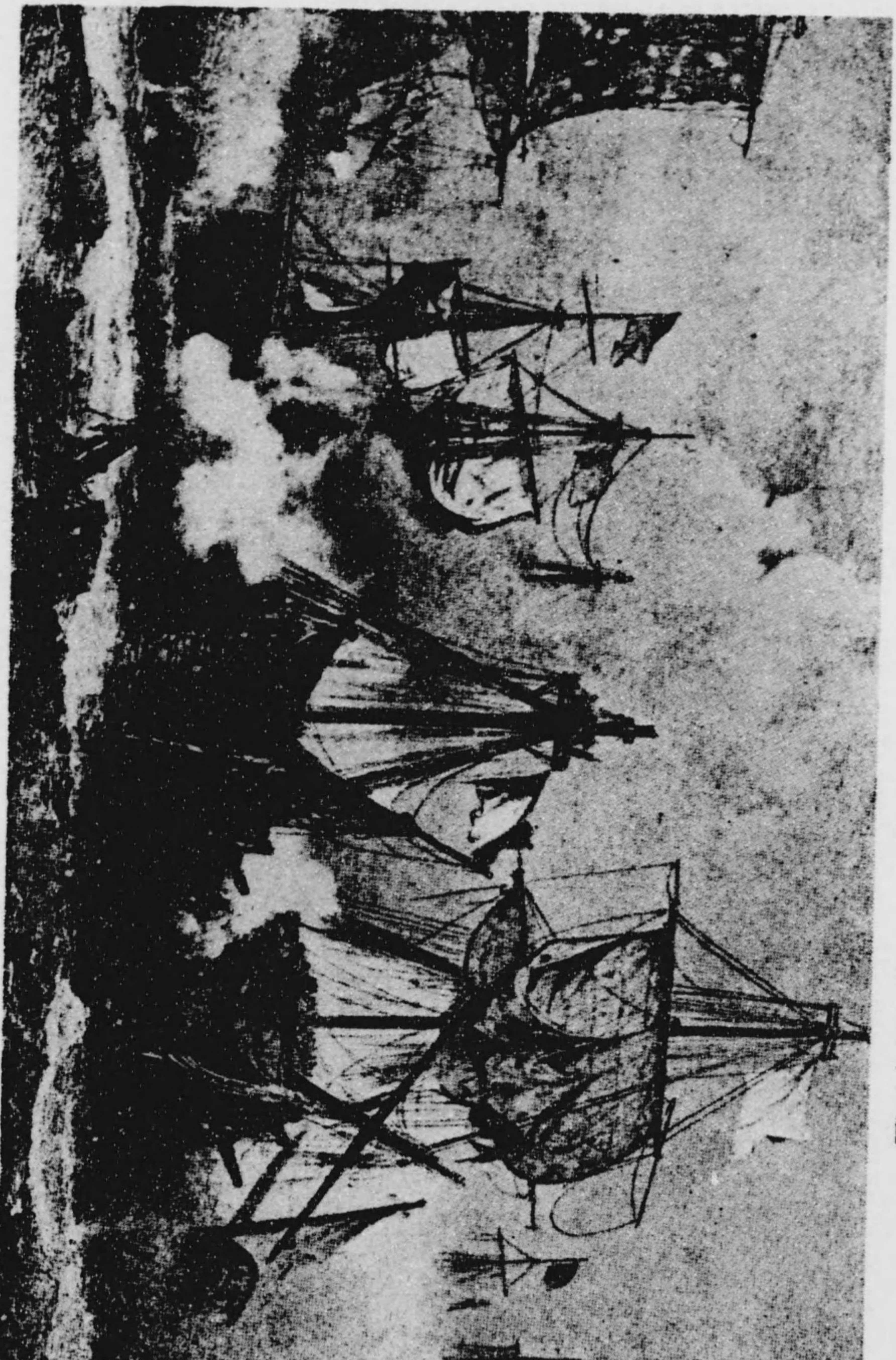
一九一四年十二月二十五日タックスハルフェン沖の海戦(世界大海戦)

一 ユジン 佛艦

ルーマテ 英艦

ナンアタンサ 西艦

ーリトクイザ 英艦



ト ラ フ ガ ル 沖 の 海 戦

318
545イ

703-111

序

家に出口の必要ある如く、國にも出入の門戸を要する、入口なき家は家としての用をなさざる如く、門戸なき國家は内に蟄伏して遂には死滅し終るであらう、國の門戸は勿論港灣である、海洋である、海に接せざる國、海に出口を有せざる國家は、古來曾つて發展した例がない、眞に海は國家の發展に缺くべからざる要素である。是れ過般のヴェルサイユ條約に於て、ポーランド國のためにダンチヒ自由市を設け、海への自由なる出口を規定した所以、又はアドリヤ海頭のフィウメ港が、ユーゴスラビヤの門戸たる關係上、イタリヤとの間に大なる係争問題を起した所以である、或は嘗つてロシヤのペートル大帝が、自國の隆昌を圖る唯一の方策として、海への出口を獲得せんと欲し、トルコと争ひ、スエーデンと戦ひ、且つ都をも内地のモスコイより、バルト海頭のペテルブルグに遷した所以であつた。

世界の海洋を征服したイギリスは、其隆盛古今に絶し、海を閉じた鎖國の日本は危ぶく窒息せんとしたのであつた、海を利用した國家は興り、民族は榮え、否らざる國は衰へ、民族は亡ぶ、實に海は國家民族の生存にも缺くべからざる要素である。

言ふまでもなく我國は四面環海、餘り海に接することの饒きためか、却つて古來海に注意することの割合に尠なき状態である、陸に寸地を争ひながら、廣大なる海洋を棄てて顧みない有様である、内に人口歳に増加して、土地には限りがある、海を利用すること、海上に發展すること、是れ我國唯一生存の方であり、大和民族發展の途であらねばならない、鞏々たる太平洋の波濤は、數千年來この覺醒を、我國民に促しつのであるのではあるまいか。

古來世界の列國が海を利用し、海洋を支配せんと欲して、爰に制海權の争奪起り、海上の決戦となり、互に國力を賭して海に戦ひし其實狀を理解することは、海國民にとつて甚だ緊要なることである、海權の消長は國家の消長と相關し、海權の得失は國

家の休戚と相伴なふものであることを、史上の事實に於て考察することは、實に必要なることである。

菲才なる余の一小著、勿論斯くの如き大目的を充たし得るとは想はない、たゞ古來世界史上に於ける。重要なる海戰の、歴史的事情を大觀し、以て幾分なりとも海に對する、特に海權に對する注意を喚起するに、多少の裨益とならば實に幸である。

昭和十一年四月

著者識

春藤與市郎著

一編 鎌倉

今古世界大陸戰史

正價金貳圓五拾錢
送料十四錢

東京神田 大同館發行

今古世界大海戰史

目次

緒言	一—八
□サラミスの海戦	九—四七
(一) ペルシャ戰役	九
(二) マラトンの戰	一四
(三) クセルクセス王の大遠征	二〇
(四) アテネ市焼拂はる	二九
(五) サラミス海戦(前記)	三二
(六) サラミス海戦(戰況)	三八
目次	一

(七) サラミス海戦(後記).....四七

□ポエニ戦役.....五二―九八

(一) ローマ帝國の興起.....五二

(二) ローマとカルタゴ.....五八

(三) ポエニ戦役の發端.....六四

(四) ローマの海軍建造.....六九

(五) ミレ一の海戦.....七三

(六) エクノムスの海戦.....七五

(七) ローマ軍のカルタゴ遠征.....八〇

(八) ローマの逆境.....八二

(九) エガテスの海戦(カルタゴの屈服).....九一

(一〇) ポエニ戦役の終局.....九五

□アクチウムの海戦.....九九―一一八

(一) ローマの内訌.....九九

(二) オクタヴィヤヌスとアントニウス.....一〇三

(三) アクチウムの會戦.....一〇七

(四) アントニウスの敗北.....一一二

(五) オクタヴィヤヌスの天下平定.....一一七

□壇の浦の海戦.....一一九―一三五

(一) 傾く平氏の運命.....一一九

(二) 源平壇の浦の對陣.....一二一

(三) 源平最後の會戦.....一二四

目次

(四) 平氏全滅……………一二九

(五) 我國海事の消長……………一三三

□ 厓山の戦……………一三六—一五五

(一) 宋と元……………一三六

(二) 宋の敗亡……………一四〇

(三) 厓山海上の決戦……………一四四

(四) 宋の全滅……………一五〇

□ スロイスの海戦……………一五六—一七二

(一) 中世海事の不振……………一五六

(二) 海國たるイギリス……………一六一

(三) 英佛百年戦役の起り……………一六五

(四) スロイスの海戦……………一六七

□ レバントの海戦……………一七三—一八八

(一) オスマン・トルコの勃興……………一七三

(二) キリスト教軍の對抗……………一七八

(三) レバントの海戦戦況……………一八一

(四) レバント海戦の影響……………一八七

□ グラーブリーヌの海戦(無敵艦隊の破滅)……………一八九—二三六

(一) 隆盛を極めたイスパニヤ……………一八九

(二) フィリップ二世の大望……………一九一

(三) オランダの獨立運動……………一九四

(四) フランスの内亂とイスパニヤ……………一九七

- (五) イギリスの新教樹立……………二〇〇
- (六) エリザベス女王とフィリップ二世……………二〇四
- (七) イギリス人の海上發展……………二〇七
- (八) 無敵艦隊派遣の準備……………二一一
- (九) 大艦隊の出帆とイギリスの防戦準備……………二一六
- (一〇) イギリス水道に於ける無敵艦隊……………二二二
- (一一) グラীবリーヌの海戦(戦況)……………二二六
- (一二) 無敵艦隊歸路の遭難……………二二九
- (一三) 無敵艦隊破滅の影響……………二三二

□蘭英海權爭奪戰……………二三七—二六八

- (一) オランダの隆盛……………二三七

- (二) イギリス海軍の擡頭(オランダの衰微)……………二四四
- (三) クロムエルの對蘭政策……………二五三
- (四) 第一回蘭英海戦……………二五六
- (五) 第一ウエストミンスター和約……………二六五

□第二回蘭英海權爭奪戰……………二六九—二八〇

- (一) 再戦の理由……………二六九
- (二) ロイエストオフトの海戦……………二七二
- (三) 蘭英の決戦(四日間繼續海戦)……………二七六
- (四) プレダの和約……………二七八

□第三回蘭英海權爭奪戰……………二八一—二九六

- (一) 開戦の顛末……………二八一

(二) 海戦の状況……………二八五

(三) 第二ウエストミンスターの和約……………二八九

(四) 蘭英海戦の考察……………二九二

□ラ・ハーグの海戦(英佛海上の衝突)

(一) 蘭英海戦後のイギリス海軍……………二九七

(二) 對フランス大同盟の成立……………三〇二

(三) 佛軍のイギリス侵入策……………三〇六

(四) ラ・ハーグの海戦……………三〇九

□第十八世紀に於ける英佛海上の競争

(一) イスバニヤ王位継承の役……………三一六

(二) オーストリヤ継承の役……………三一九

(三) 七年戦役に於ける英佛の攻争……………三二一

(四) 北米合衆國獨立役と英佛の攻争……………三二五

□トラファルガルの海戦

(一) 英雄ナポレオンの出現……………三三二

(二) ナポレオンのイギリス侵入策……………三三八

(三) ナポレオンの海峡制海策……………三四四

(四) フランス艦隊の聯合集中運動……………三四八

(五) ナポレオンの計畫齟齬……………三五四

(六) イギリス侵入策の失敗……………三五九

(七) カデス港の内外……………三六四

(八) トラファルガルの海戦(戦況)……………三六八

(九) ナポレオンの最後(英の制海権確立).....三八一

□ 黄海の海戦 三八五—四一八

(一) 甲鐵蒸氣軍艦の出現.....三八五

(二) 日清の開戦.....三九四

(三) 黄海の海戦前記(豊島の海戦).....四〇二

(四) 海洋島(黄海)の海戦(戦況).....四〇五

(五) 黄海海戦(後記).....四一四

□ 日本海海戦 四一九—四五〇

(一) 日露開戦.....四一九

(二) バルチック艦隊の極東派遣.....四二九

(三) 日本海海戦 戦前の状況.....四三四

(四) 日本海海戦 戦況大要.....四三七

(五) 日本海海戦 後記.....四四四

(六) 極東の海権我手に歸す.....四四七

□ ユトランド沖の海戦 四五一—四八〇

(一) 全世界戦雲の巷となる.....四五一

(二) ユトランド沖海戦 前記.....四五六

(三) ユトランド沖海戦の發端.....四六三

(四) 巡洋戦艦隊の會戦.....四六五

(五) 英獨主力戦艦隊の交戦.....四六九

(六) ユトランド沖海戦 後記.....四七五

——(目次終)——

古今世界大海戰史

春藤與市郎著



に使はるゝ如く、實に廣きは海洋である。
「廣きこと海の如し」と廣濶の代名詞

世界を支配すべき人類は、地球面上僅か四分の一に足らぬ陸地のみに限られず、又海洋をも統御すべき使命を有せる者である、陸地に三倍するの面積を占める海洋、之亦人類の活動及び進歩のために多大の貢獻を供するものであらねばならない。

しかし海洋の供する産物は、人類生活の資料として、到底陸上の生産に比すべき価値を有するものでない、勿論海産物は重要な國産の一たるには相違ないが、全然海の産物を享有せざるも人の生活に左程の脅威を感じないであらう、生活の資料を供給する點に於ては、狭き陸地も廣き海洋に幾倍するの價值を有するものである。

海洋存在の意義は何れにあるか、寸土をも争ふ人間の眼を以てすれば、廣濶なる海洋は殆ど無用の長物たる感なきを得ない、「余をして若し造物者たらしめば、地球面上水陸の分布を形成するにあつて、少なくとも水面を一、陸地を三の割合、即ち現状の正反對に決定したらんものを、然らば人類は土地の狭きに苦しむことなく、従つて人間の歴史には、殆ど争鬪の跡を絶ち、永久の平和は議論を要せずして實現せられしならん」と、一理甚だ尤であるが、決して全般の眞理を悉さない、海洋の廣濶たるは決して無用の長物ではない、若し夢遊者の希望通り世界の四分の三が、陸地であつたらば、或は懼る、人類は結局獸類と同様の生活に甘んぜざるを得ないことであつたら

う。

そは兎も角世界史上に現はれた、海洋の功績に就て、特に國家と海洋の關係に就て茲に一瞥せんか、國家の境界として、文明の擁護として、自由獨立の城壁として、退いて國家の防護に任ずるは勿論、進んで國家の發展に、文明の傳播に、平和博愛の普及に、海洋の功や又偉大なるものがある。

國家の防禦壁として、峻嶺相連る山脈こそ、其最も効果を有する天然の地形であるが、海洋も亦之に次ぐ、或は山脈以上の國家防護の任を竭すものである、元軍十萬を西海の藻屑となし、神州に一指をも染むる能はざらしめたのも、海ありしが爲であり、一衣帯水のドーヴァー海峡も、金城鐵壁の如く、よくイギリスを保護し、稀世の英雄ナポレオンをして「我をしてイギリス水道數時間の制海權を握らしめば、余は世界を征服せん」と歎ぜしめたのである。

然しながら海の防禦力は、人智の進歩、科學の發達によつて、次第に減ずる様である、

人力已に空中を支配し、其效力愈々増進せんか、海洋は全く防禦の能の失ふに至るであらう。

海洋の主たる要は、退いて護るためではない、進んで世界と交通するにある、「舟子一枚、下は地獄」とは海を怖れた怯人の言であつて、海洋は天然の最も便利な世界の交通路である。

「江戸日本橋より唐オランダまで、境なしの水路なり」とは林子平の卓見であるが、海路の迂廻も、山路の峻より遙かに樂である、鐵道の便も海運の低廉に及ばない、海の達せざる所が最も僻陬の地である。

「人類は航海と、隣人間の争闘によつて發展進歩する運命を有つてゐる」とは有名な史家ランケの言であるが、誠に人類は航海によつて互に物資の交換を行ひ、知識の發達を促がし、文明を傳播して、社會の發展を遂げてゐるのである。

交通、商業、植民、之れ航海の目的であり、由つて以て國家の發展を來たす原力であ

るが、安全に、自由に、航海の目的を達せんと欲せば、茲に國家勢力を以て海上を支配することを要するのである、單に船舶の堅牢、航路の設備のみでは足りない、國家勢力の背景を要するのである、國家の權力を以て海上の安全を保證することを要するのである。

第十五世紀の末、時のローマ法王は、世界の海洋を二分して、當時世界政策遂行の二大國たる、イスパニヤに其西部を、世界の一半たる其東部をポルトガルへと、分割領有せしめたこともある、即ち海洋領有を實行せんとしたのである。次で興つた北海のオランダは、イスパニヤ、ポルトガルの勢力を犯し、その領海論に對抗して、盛に海洋自由論を唱へ、到る所の海上に横行して、二國の領海を危うした。

領海論と海洋自由論とは、古來國際法學上の大議論ではあるが、議論はさておき、たとへ公海は自由なりとするも、陰然國家勢力の及ばざる所、自國々旗の翻らざる海洋には、決して眞の自由を享有することを得ないのである。

「海を支配するものは又貿易を支配す、世界の寶と、従つて世界そのものが彼等に屬す」とは航海國民たる、英のサー・ウオーター・ローリーの語であるが、言過ぎたる様なれ共、眞に史上の事實である。

海の歴史は國家の防護よりも、より以上、其擴張にある、アジャ大陸西端の一小土に據つたフェニキヤ人は、海を支配して其隆盛を致し、其植民地たるアフリカ北岸のカルタゴは、ローマに海權を奪はれて、滅亡した、海に據つたアテネはギリシヤの霸權を握り、其富と其文明、古今に絶する發展を致した、地中海の霸權を握つた中世の小市ヴェニスは、其富力を以てよく諸大國に對抗した、近世オランダの小邦も、航海によつて世界に濶歩し、航海王たる英國が、世界五分の一の持主たることは言ふまでもない、海に發展せざる支那、印度の状態は如何、海を怖れた日本は永く東海の隱居國であつた。

海の歴史は防護と擴張とである、しかし防護は一部であつて、擴張は大部分である、

國家の防護と擴張のために、海洋を支配せんと欲して爰に國と國との交渉起り、或は提携し、又は衝突を來たす。

海を支配すること、即ち制海權を握ることは、國家の維持發展のために緊切なる必要事である、暗黙の内にも此理を悟了した人類は、古來海權占有のために莫大なる努力を惜まず、爲めに幾多の戦鬪をも敢てしたのであつた、實に海權の爭奪には、國家の全力を盡したものであつて、其勝敗は直ちに國家の休戚興亡に關したものの少なくないのである、故によく海權の消長に通じ、其推移を察し、以て今日に處するの覺悟を懷くことは、國家を念とする者の一日も忽にすべきことではあるまい。

古來世界史上に於て、一戰以て國家の運命を決し、以て歴史の進展を確定したるもの、主として海戦に多く、其然る所以は制海權の得失、消長が直ちに國家の運命に關する所深甚たるものあるに外ならない、従つて是等主要なる大海戦の史實を研究し、國家の興亡と制海權の相關する所を推究することは、興味の大なるものと共に、

吾人國民の精神に切實なる覺悟を懐かしむる機縁たるべきものあるを疑はないのである。

古今世界大海戦史

サラミスの海戦

(一) ペルシヤ戦役

今から二千五百年程前、我國では、神武天皇様より少し後の頃で、大分古い話であるが、アジヤ大陸の西方にペルシヤと言ふ大帝國が興つた、歴史あつて以來始めての大きな國で、東は世界の屋根といはれるバミール高原からインドの北部まで、西はアフリカの東部ピラミッドに名高いエジプトからヨーロッパの東方トラキヤ地方まで征

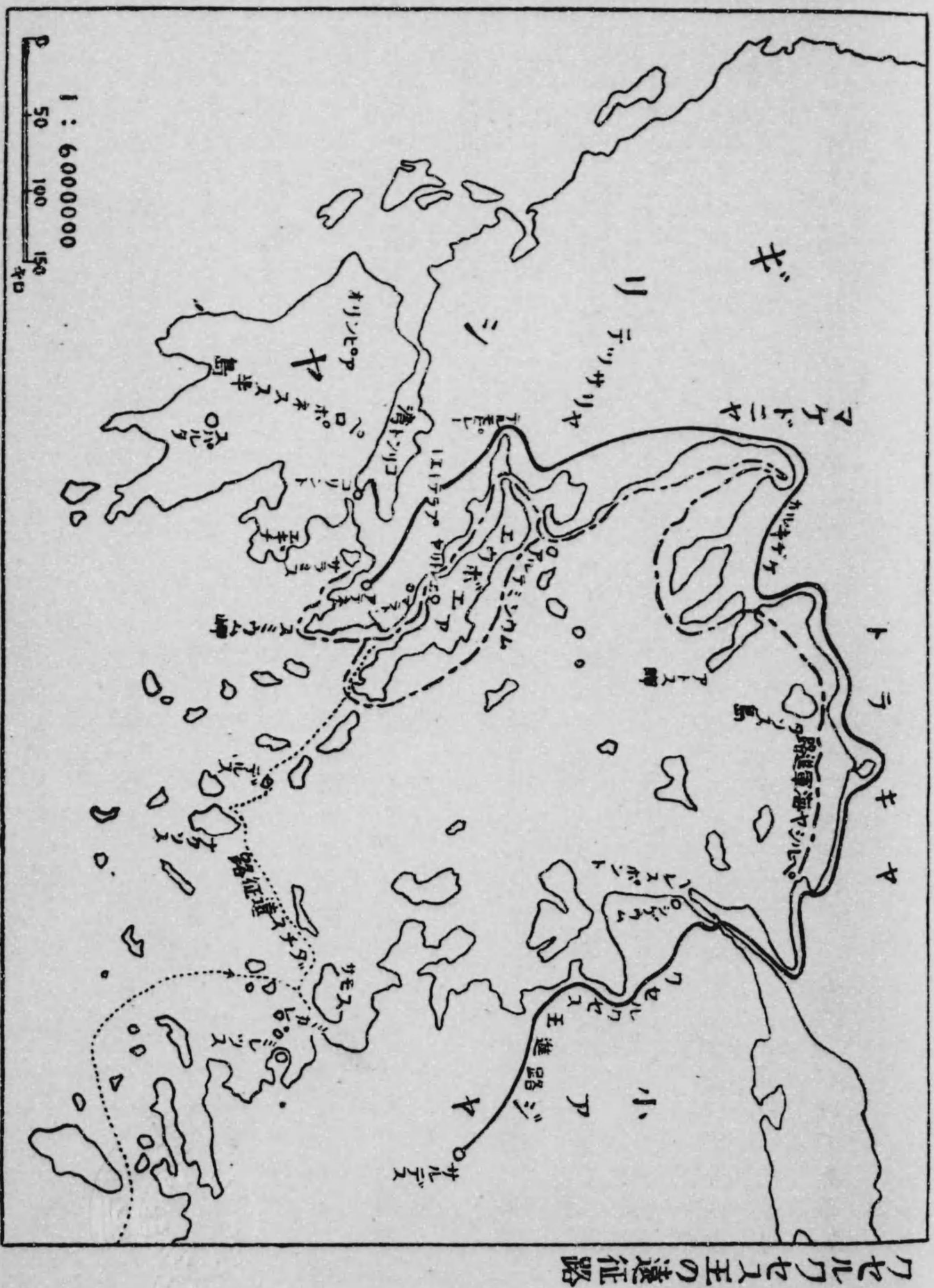
服して、アジア、ヨーロッパ、アフリカの三大陸に跨る未曾有の廣大な國であつた、この大きなペルシヤ國を興した最初の王はキルスと言つたが、其の三代目にダリウスといふ最も傑れた偉い王が現はれた、西洋では特に偉い王様には大の字を附けて呼ぶ例であるからダリウス大王と呼ばれる。

その頃ヨーロッパの東方にギリシヤと言ふ國があつた、實はギリシヤと呼ぶ國はないのでアテネとかスパルタとか、その他多數の小さな國々を集めて一般にギリシヤと言つて居るのであるが、全體合せてやつと我が北海道位しかない小さい土地であつた、大きなペルシヤ帝國に比べて豆粒にも足りない様な小さなものであつたが、その人民即ちギリシヤ人は實に偉い國民で、自由獨立の精神が非常に強かつたのである、この未曾有の大國ペルシヤ、その大王ダリウスが、この小さなギリシヤを征伐した戦争が歴史に於てペルシヤ戦役と呼ばれるのである。ペルシヤとギリシヤの取組は恰も常陸山の様な大力士か、生れたばかりの赤子と角力を取る様なものである、我國史にも之

れに似た事はあつた、歐亞に跨る歴史上無類の大帝國を造つた蒙古が、東海の孤島に過ぎない我國に大軍を送つて之を征服せんとした元寇の事件と甚だよく似てゐる、しかし元寇の際は幸にも我國は鎌倉幕府の勢力によつて全國よく統一され、且つ武力、士氣ともに甚だ旺盛なる時であつて、しかも果斷なる相模の太郎時宗が政權を握り、神佑と相應じて以て蒙古十萬の敵軍を西海の藻屑となし得たのであつた、ところがペルシヤ戦役頃のギリシヤの様子は之れと大分ちがつてをり、此の小さなギリシヤ半島の中に數多の小國が分立して居つて、互に戦争を事とし、まさに戰國群雄割據の如き様子であつた、ギリシヤ全國が力を一にしてペルシヤに當ることは到底出来なかつた程お互に仲が悪るかつた、ペルシヤの大軍がギリシヤの近くに迫るや、ギリシヤ北部の小さな國々は早くもあきらめて、ペルシヤ國に水と土とを献じて服従してしまつた、それ所ではない、アジア大陸の西端小アジア沿岸に在つたギリシヤ人の植民地などは勢の致す所とはいへ、軍艦を出してペルシヤ軍を助け、同胞に向つて弓を引い

た者等も尠い數ではなかつたのである、互に争つてゐる、小さなギリシヤが大國ペルシヤを敵として戦つたこのペルシヤ戦役は實にギリシヤの危機であつて、其の運命は正に累卵の如しであつた。

此のペルシヤ戦役はどういふわけで起つたか、その原因には色々な事情があるが、西洋紀元前五〇〇年（日本では四代目、懿徳天皇の十一年に當る）小アジア沿岸に在るギリシヤ人の植民地ミレツス市がペルシヤに謀反した、且つギリシヤ本國のアテネとエレクトリヤが軍艦を送つて之れを援助した、しかしペルシヤの軍政が中々よく整つて居つたから忽ちペルシヤ軍のためミレツス市は粉碎され、援助にやつて來たアテネの軍艦も、ラーデ附近の海戦でペルシヤ海軍のために破られてしまつた、ミレツスの叛亂はかやうに直ぐ平定したが、治まらないのはダリウス大王の心であつた、身の程も知らず大帝國ペルシヤに對し無謀にも弓を引いた小國ギリシヤを非常に悪んで必ずギリシヤを馬蹄に蹂躪せんと欲した、且つペルシヤの威信にもかゝはるわけであるから



フセロセス王の遠征路

棄ててはおけない、尙ほこの機會にギリシヤ全部を併呑せんと欲して大遠征軍を派遣
することになつたのである。

當時ギリシヤ諸國の中でアテネが最も海上に活動して居り、元來地中海の海上王であ
つた東方のフェニキヤ人と將に衝突を始めんとする頃であつて、其のフェニキヤは世界
最初の海國民でありこの頃はペルシヤの屬國であつたから、此のペルシヤ戦役は東は
フェニキヤ、西はアテネの二大海國民が地中海の海上王たることを争つた戦である
とも言ふことが出来るのである。

歴史の父と呼ばれるギリシヤ人へロドツスの誌すところによると、ミレツスが叛き、
アテネが之れを援助したとの報告がペルシヤの都スサに達するや、ダリウス大王は自
ら弓を執り箭をつがへ天に向て放ち、且つ曰く

「オー神よ、アテネ人に復讐することを許されよ」と神に誓つてギリシヤ人に復仇せ
んと欲した、尙ほ其後侍臣に命じ毎日食事毎に必ず

「王よアテネ人を忘れ給ふな」と三度繰返し言はしめたとのことであるが、大王のアテネを悪むことは實に甚だしかつたようである、未曾有の大遠征が企てられたのも故あるかなと頷かれる。

(二) マラトンの戦

間もなくギリシヤ遠征軍の準備成り、ダリウス大王の女婿マルドニウス將軍が海陸の大軍を率いて小アジアの集合點シゲウムを出發したのは紀元前四九二年であつて之れが第一回の遠征である、マルドニウスの軍は海陸相並で西進し、歐亞の境であるヘレスポンド海峡（今はダルダネルスと呼ぶ）を渡つて愈々ヨーロッパの地に踏入り益々西に進んでギリシヤの北方にまで達したその時、ペルシヤの海軍はアトス岬の沖で俄に暴風に出會ひ軍艦二百隻乗組員二萬人を失ひ殆ど全滅した、且つ陸軍もトラキヤ地方の強暴な土人に襲撃されて非常の困難を嘗め、それに海軍を失つたことであるから

進軍出來ず、殘念であつたがマルドニウスは中途で引返へした、かくて第一回の遠征軍は全く失敗に終つた。

折角の遠征軍が一戦もしない中に失敗してしまつたのであるが、之れ位で諦める様なダリウス王ではない、直ちに再征の準備に着手し前に優る大軍を編成して第二回の遠征軍が出發したのは二年後の紀元前四九〇年であつた、今度はマルドニウス將軍の失敗に鑑み、老將軍ダチス及び大王の甥アルタフェルネスの二人を大將とし、アテネの舊僭主で市民から放逐されてペルシヤに逃込んだヒツピヤスと言ふアテネ人を參謀とした、僭主とは國の政治を恣にした者のことであるが、兎に角ヒツピヤスはアテネ人で一時はアテネの政治を執つた者でありながら敵國に仕へ、敵軍に自國征伐の秘計を授けるとは何たる賣國奴、人非人であらうか、元來愛郷心の甚だ強いギリシヤ人中に屢々か様な悪い人物を出したのであるが、是れ實に黨争の結果であつて、敵國の力を借りて敵黨を倒さんと企てた爲めである。

黨争を事とする者は終には自己の黨あるを知つて國を忘れ、愛國の精神さへも失ふに至ることがある、恐るべきことではないか。

第二回の遠征軍は陸軍歩兵十萬、騎兵一萬より成り、海軍は戦艦六〇〇隻、陸軍を載せた運送船を護衛しつゝ、小アジアの南岸を出發した、今回はヒツピヤスの建議に従ひ陸海軍一しよに直ちに海路からアテネを攻める方策を執つて進撃した、行く／＼多島海に横たはる島々を攻めて之れを荒掠し、エウボエヤ島に達して先にミレツスの叛を助けたエレクトリヤを圍んで全市を屠り、次で目指アテネに迫らんとして對岸マラトン灣に陸兵を上陸せしめた、マラトンはアテネ市を東北に去る僅に六里餘、兵陵と海岸との間に多少の平野を存し陸軍特にベルシヤ騎兵の活動には都合よき土地であつた。時にアテネの方では「ベルシヤ軍來る」の報に大狼狽、直ちに使者を急派し各國に援助を求めた、特に陸軍に於ては天下無敵の名あるスバルタはアテネの最も恃むところ、是非共その援助を俟たなければならぬ、故に一刻も速く急を告げたいのである

が飛行機もなければ、電信もなかつたアテネ人は唯々日頃鍛えた健脚に頼るより他にない、幸にしてフィヂピヂスと言ふランナーがあつた、日頃の練習を國家に奉ずるは此時とばかり忽ち使命を受けて一散に馳け出すやスバルタ市まで約百四十哩、息をもつがずに馳け通し、僅かに三十六時間で突破した、マラソン競技の名を後世に傳へたのも此爲であらう、(マラトンは英語では Marathon と呼ぶ) しかしスバルタの援軍は來なかつた、スバルタ人は同胞アテネを敵の手に委することを何とも思はなかつた、ただ自分さい無事なればよいといふ様な極めて利己的の偏狹な精神を有つて居つたのである。

危急に迫つたアテネ人は當てにならぬ助けを待つては居られなかつた、僅に九千の兵に、西隣ブラテーエー市の援兵一千を合せて一萬人、名將ミルチャデス之れを率ひて敵軍の來るのを待たず、攻勢をとつて直ちに進撃し、十倍に餘るベルシヤの大軍をマラトンに攻めたのであつた。

時は今から約二千四百年前、紀元前四九〇年の九月十二日、こゝに東西大衝突の第一回戦が闘はれたのである、世界歴史に於て東西の衝突、即ち東洋を代表する勢力と、西洋のチャンピオンとの衝突は甚だ著しい事柄であつて、東は統一と壓制とを、西は分離と自由とを代表するものとも言ひ得べく、此のペルシャ、ギリシャとの衝突を始めとして其後屢々繰返さるゝ世界史上の大事實であつて、今日東洋の代表たる我々日本國民は深く此の事實に注意することを要するのである、かの有名なるアレクサンドル大王の東征、或はモスコ人のヨーロッパ大侵略等何れも東西衝突の一端である。偕てミルチャデスは味方の小勢を以てマラトンの廣野にペルシャの大軍と戦ふことは策の得たるものでないと、巧みに敵軍を誘ひて背後のペンテリクス山脈に穿つウラニヤ谷の狭路に引入れ大軍の行動自由ならぬに乗じて敵の兩翼から包圍的に激しく攻撃を加へたから、折角頼みにしたペルシャの精銳な騎兵は全く働けず、兩翼先づ破られて中軍爲す術もなくどんく船に逃げ込んだので遂にペルシャ軍の總敗北となり、

ミルチャデスはマラトンに勇名を轟かした、此のマラトンの戦は我が一の谷の合戦によく似たところがある、東は生田の門、西は鴨越と兩翼から源氏の軍に攻められて倉皇海に逃げ出した平氏の軍は正にペルシャ軍の二の舞であつたらう。

ミルチャデスは急使を派して此の大勝をアテネに報告せしめた、惜しいことには其使者の名が不明であるが、一刻も速くと餘りに急いだ爲め、勝敗如何と極度の不安に、一齊に東の空を望んで居つた多數のアテネ市民に圍まれ、喘ぎながら漸く

「勝利は我等に」此使者は善く其使命を果した、彼れはこの一言を發して忽ち絶息したのであつた。

マラトンに敗北したペルシャ軍は全部船に乘し直ちにアテネ市を突くべくスニウム岬を廻つて、アテネ市の外港ピレウスに迫つた、然るに想ひもよらずマラトンの強敵ミルチャデスの軍が既に此地に来て敵軍ごさんなればかりに待ちかまへて居つた、ペルシャ軍之れを見て大に怖れ早々歸國してしまつた、それで第二回の遠征軍も全くペ

ルシヤの失敗に終つたのである。

(三) クセルクセス王の大遠征

かく二回共遠征軍は失敗に終りベルシヤは不名譽と莫大の損失を蒙つたのであるが、ダリウス大王は尙之れに懲りず、愈々最後の決心を以て古今未曾有の大軍を編成し、ベルシヤの全力を盡くして今度こそはギリシヤ全部を馬蹄に蹂躪せんものと、三度大遠征の準備に取り掛つた、ベルシヤが國力を賭してギリシヤ遠征を企てたことは随分無謀の様であるが、しかし無理もないわけもあつたのである、ベルシヤが失敗したままで手を引いたならば、ベルシヤに服屬してゐる多數の屬領は兼々獨立の機會を窺つてゐるのであるから、ベルシヤが負けたとなれば彼等は忽ち聯合して謀反を圖るにさまつてゐる、そうなればゆゑしい大事であつてベルシヤは滅亡の悲運を招くに至るかも知れないのである、故に自國の存立上からもこの大遠征を試みるに決したわけであ

つて餘儀ない次第であつた、實際第二回の遠征軍が失敗したとの報が各地に傳るや、早くもエジプト始めバビロニア等の諸地方が叛旗を翻へしたのであつた、ダリウス大王は先づ是等の叛徒を鎮定するに數年を費やさねばならなかつたのである、元寇の時の事情がこの場合によく似てゐる、文永の役に失敗した元は更らに十數萬の大軍を編成して、弘安四年再び我國に襲來したが、鎌倉武士の豪勇と、神風の天佑により十萬の元軍忽ち筑紫の海の藻屑となり、神ながらの國は一步も外敵に汚されなかつたのであるが、元の大汗忽必烈はこの失敗に日本侵略を決して斷念はしなかつたので、更らに大舉三征を企て、居つたのである、幸か不幸か安南方面の軍事に多忙を極め、はかばかしく準備の成らぬ中に忽必烈は病死し、孫の成宗が即位したが到底日本遠征を實行する力なくうやむやの中に消滅したのであつた。

ダリウス大王は國內叛亂の平定に忙しく、大遠征の準備が成らぬ中に、マラトンの役後六年、アテネ人に對する無限の恨を懷いて不歸の客となつた、しかし幸にして雄材

ある其子クセルクセス、王位を嗣ぎよく父王の遺志を繼承して、先づ叛徒の鎮定に功を奏し、次で十分の準備を整へて、爰に第三回目の大遠征を決行することゝなつた。其間ギリシヤの方ではどうして居つたか、特にギリシヤを代表するアテネは何として居つたか、二回とも遠征に失敗したペルシヤが三度更らに大軍を以てギリシヤに襲來すべきことを豫期したのはアテネであつた、故に着々として彼等はそれに當るの準備に怠らなかつた、小國アテネがギリシヤ全部にかゝはる運命を脊負つて、大國ペルシヤの全力に當らんと覺悟した其の意氣、その潑刺たる元氣こそ之れアテネが世界の歴史に大なる榮譽を荷ふ原因である、畢竟國の興亡は斯様な意氣を有するか否やによつて決せられるものであらう、さて此際アテネに二人の國士が現はれた、ともにマラトンの役に従軍した勇士であるが、一人のアリスチデスはマラトンの勝利に鑑み、愈々陸軍を擴張して以てアテネを護らんと主張し、他の一人テミストクレス（彼れは當時アテネ執政官の一人であり、政治家としても戦術家、はた軍人としても非凡の手腕を

有し、且つ熱烈なる愛國心を懷いてをり稀れに見る人傑であつた）彼れテミストクレスはペルシヤの大軍を防ぎ以てアテネを全ふすると共に、愈々アテネの發展を圖るために是非共海軍を擴張することの最も得策であるを看破した、誠に卓見を言ふべく當時ギリシヤ列邦中陸軍の雄に誇つて居つたスパルタに倣ひ同様に陸軍を以て立たんとする如きはアテネのために採るべき策ではなかつた、ましてペルシヤの大軍を陸上で防ぐだけの陸軍は到底アテネでは出來るはずがないのであつた、果たしてテミストクレスの海軍擴張案は國民の賛成する所となり、アテネは全力を盡して間もなく二百隻の新艦と、四萬人の乗組員とを整へた、且つ海軍の根據地としてアテネの外港たるピレウスの築港を完成した、こゝに於てギリシヤ諸國中海軍力にはアテネに及ぶものなきに至り、將來アテネがギリシヤの海上權を握る基礎はかくテミストクレスの力によつて築られたのであつた。先見の明あるアテネは斯く防禦の計に努力したが、アテネと相並んでギリシヤの雄國

であるスバルタの如きは危険の目前に迫るまで苟安を貪つて居つた仕末で、其他の小邦は勿論のこと何等の準備をもしなかつたのである、或は軍備をする力さへもない弱い國もあつた、歸するところテミストクレスは單にアテネを救つたのみではない、ギリシヤ全部を救護した恩人である。

ペルシヤのクセルクセス王は着々と大遠征の準備を整へて愈々紀元前四八〇年、支那では大聖人孔子が卒去せられた前年である、ペルシヤの陸海軍に悉く小アジアに集し、海陸協同、クセルクセス王親ら軍を率ひて一舉にギリシヤを屠らんとこの勢を示した、其軍勢がどの位のものであつたかは正確なる記録が存しないのであるが、歴史家ヘロドツスの記事によると、ペルシヤの陸軍は兵數四二〇萬、海軍は戰艦のみで二〇七隻とのことである、しかし陸軍四二〇萬人とは餘りに過大であつて、支那流ならば兵を提ぐ百萬、實は十萬位しかないのを誇張するのであるが、誇張ならば兎も角、實數四二〇萬とは一寸うなづき兼ねる大數である、一萬人の軍隊が行進する長さは約

一哩に亘るとのことであるから、四二〇萬は長さ四二〇哩に連るわけであつて、ペルシヤ軍の先鋒がアテネ附近に到着せし頃、後部隊は漸く小アジアの集合地サルデスを出發した位のものである、四二〇哩といへば宇都宮市から東京を通つて大阪までの距離である、どうも餘りの大數で事實とは信ぜられない、ギリシヤ人の眼から見ればそれこそ非常の大軍と想はれたことであらうが、恐らくは百萬に足らず、數十萬位のものであつたらふか、クセルクセス王はヘレスポンド海峡を渡るために長さ一哩半ある舟橋を二筋架して陸軍を渡すことにした、所が暴風のために折角出来た舟橋が破壊されてしまつた、クセルクセス王大に怒り、毀れる様な舟橋を造つた大工は不都合な奴だ、直ちに死刑に處すべし、舟橋を毀したヘレスポンドの海も甚だ不都合な鞭三百の罰を加へよ」と命令したとの話もあるが、兎に角此の海峡は舟橋を再造して軍隊を渡した、暴風の危険があるから一刻の休みもなく晝夜兼行で渡らした、それに七日七夜を要したとのことであるから、一時間に幾人通過し得るかの數がわかれば全

數が大體計算出来るので、それから考へても數十萬との數が眞實らしいのである。次に海軍は各屬國に分賦して軍艦を出させたのである、元來ペルシヤ人は海事には極めて無經驗のもので、ペルシヤの海軍とはいへ、實は悉く服屬國から強制して出させた軍艦である、フェニキヤが主力で三百隻、エジプトが二百隻、地中海東部のキプルス島が百五十隻、其他合して一二〇七隻との數は殆ど正確である様だ。

陸軍七八十萬、軍艦千二百隻其他人夫、運送船等は數ふるにいとまなし、ペルシヤ王クセルグセス親ら統帥してギリシヤに進撃した、其勢、ギリシヤ全國は忽ち粉微塵に粉碎されるかと思れるばかりであつた。

第一回遠征軍がカルキヂケ半島のアトス岬に於て其海軍が難破し、爲めに失敗した經驗に鑑み、今回は同半島の一部に運河を掘つて軍艦を通過せしめた、如何に此の遠征軍が萬全の準備に力を盡したかを知るべきである。

ギリシヤの運命は刻々危急に迫つて來た、北部テッサリヤ地方の小邦は早くも水と土とをペルシヤ王に捧げて僅かに滅亡を免がれんとしつゝあつた、此際中部以南のギリシヤ諸邦は如何にしつゝあつたか、彼等も勿論その危険を十分に感じた、今更の様にペルシヤの勢力に駭いた、よつて各邦の代表者は中央のコリント市に會合して防戦策に就て協議したが、どこまでも協同一致の精神を缺いてゐるギリシヤ人には此の場合に於ても十分に協同することが出来なかつた、が兎に角陸軍はテルモピレ一の峽路に一隊の軍を出して防守すること、海軍もそれと相並んでエウボエヤ島の北端を守ることに決定し各々その軍を派遣した、陸軍はスバルタ王レオニダス、各國の兵を合して僅かに七千、其中精銳恃むに足るものは三百のスバルタ兵あるのみ、雲霞の如きペルシヤの大軍を迎へるに此の小勢を以てしたギリシヤ人の態度は、大膽と言ふか、無謀と言ふべきか、實に驚くべきである、茲に有名なテルモピレ一の戦は開かれ、ギリシヤ軍は目に餘る敵の大軍をこの海邊の峽路に邀撃して三日間よく防戦した、然るに敵軍中に此の地の間道を知つたギリシヤ人エフィアルテスなる者あり、山中を迂廻して

ギリシャ軍の背後に、ペルシャ軍を導いたから、今や腹背敵を受けたギリシャ軍、全く窮地に陥つた、レオニダス王は味方の軍に各自随意に退散すべきことを命じたので大部分は急遽戦場を逃げ出したが、三百のスパルタ兵は一人も動かさず、其意氣に感じたテスピエー兵七百人亦留まり合せて一千人こゝに決死の覺悟して、レオニダス王の最後の訓令、

「出来るだけ生命を高く賣れ」との命を奉じ前後に群がるペルシャ軍中に突撃し、阿修羅王の如くに荒れ廻つたが、如何に天下無敵のスパルタ兵も、衆寡敵すべくもあらず悉く名譽の戦死を遂げたのである。

湊川の戦に僅か手勢七百餘騎を以て、足利尊氏、直義の大軍を前後に引受け、賊軍をなやますこと數次、剩す所の味方僅かに七十三騎、身も亦數ヶ所の傷を蒙り再び立つべくもあらず、弟正季と共に、「七度生れて君國を護らん」と誓ひし正成の最後、彼れは國のため、是れは君のため、何れか芳名を萬世に輝かして懦夫を立たしめざらん。

レオニダス王の勇戦千古に英名を残し、

「旅人よ、ラケデモン（スパルタの地名）に到つて告げよ、我等は命を守りて此所に死せり」

とのギリシャ詩人の一句は碑面に刻まれて、永久に武士の典型としてスパルタ人の名を輝かしてゐる。

(四) アテネ市焼拂はる

テルモピレの險を破つたペルシャ軍は破竹の勢を以て南下し、忽ちアテネに迫つた、多年ペルシャ王の夢寐にも忘れなかつたアテネに對する復讐の機會は遂に達したのである、かく焦眉の急難に陥つたアテネ人は尙ほ其の採るべき方法に就て迷ふたが、忽ち神託あり、「木の城に據れ」と、木の城とは何か、神殿の周圍に木棚を造れ、否な森林に逃げ込めとの神意か、時にテミストクレスは曰く、「木の城とは軍艦なり」

成程それに違いなしと、アテネ市民は急遽、老幼を補け、市を棄て住みなれし家をあとに我れもくと南方に逃げ出した、早くもペルシヤ軍はアテネ市に入り、忽ち市街に火は放たれ、その焔々たる炎を眺ながら國家將に亡滅せんとする光景を後にして、對岸サラミス島に逃げ込んだアテネ人の心の中こそ悲憤慷慨、定めし斷腸の念、推察に餘りありである、老幼婦女は皆サラミス島に逃れ、壯者は悉く軍艦に乗じた。

ギリシヤの聯合艦隊はアテネの二百隻を主力として合計三六五隻、スバルタのエウリピヤデスが總司令官であつたが、スバルタの軍艦は僅かに十六隻に過ぎず、スバルタの同盟たるペロポネス半島諸邦のを合して漸く八十九隻であるから指揮の實權に於てはアテネの將テミストクレスの握る所となつた、のみならずエウリピヤデスは智略もなく、決断もない到底總司令官たるの人物ではなかつたから、幸にしてテミストクレスの方略が大體用ひらるゝことを得たのであつた、聯合艦隊は陸軍と策應すべく、ナルモビレ一の前方オレウス水道に集合し敵艦隊を此所に激撃せんと待ちかまへて居

つた、其中にナルモビレ一の敗報が傳はつたから、此所に留まることは敵軍に包圍される危険があるので、直ちに退却してサラミス灣内に集合した。

時にペルシヤ艦隊は軍艦千二百隻、陸軍より少し遅れてギリシヤ東岸を次第に南下し、ギリシヤ艦隊を追ふてサラミスに迫つて來たのであるが、途中暴風に出遭つて二回、ために數百隻の軍艦を失ふた、知らぬ海上に來て海軍の最も恐るゝものは實に暴風である、案内知つたる土地の者ならば避難の方法もあらうが、不案内の他國人は空しく海の餌食となる仕末、鷹島に難破した元軍十萬もこの例である、ペルシヤ海軍がサラミスに敗北したのも一半はたしかに暴風のためであつた、しかしペルシヤ艦隊は猶ほ六百數十隻を有し、ギリシヤ艦隊よりも遙かに優勢であつた。

ペルシヤの陸軍はすではアテネ市を焼拂つて多年の怨に報い、進んでサラミス島の對岸に陣を布いて、方に集つて來た海軍と策應し、一舉にギリシヤの聯合軍を粉碎せんとの氣勢を示した、陸も海も見渡す限りペルシヤ軍を以て埋るばかり、ギリシヤの運

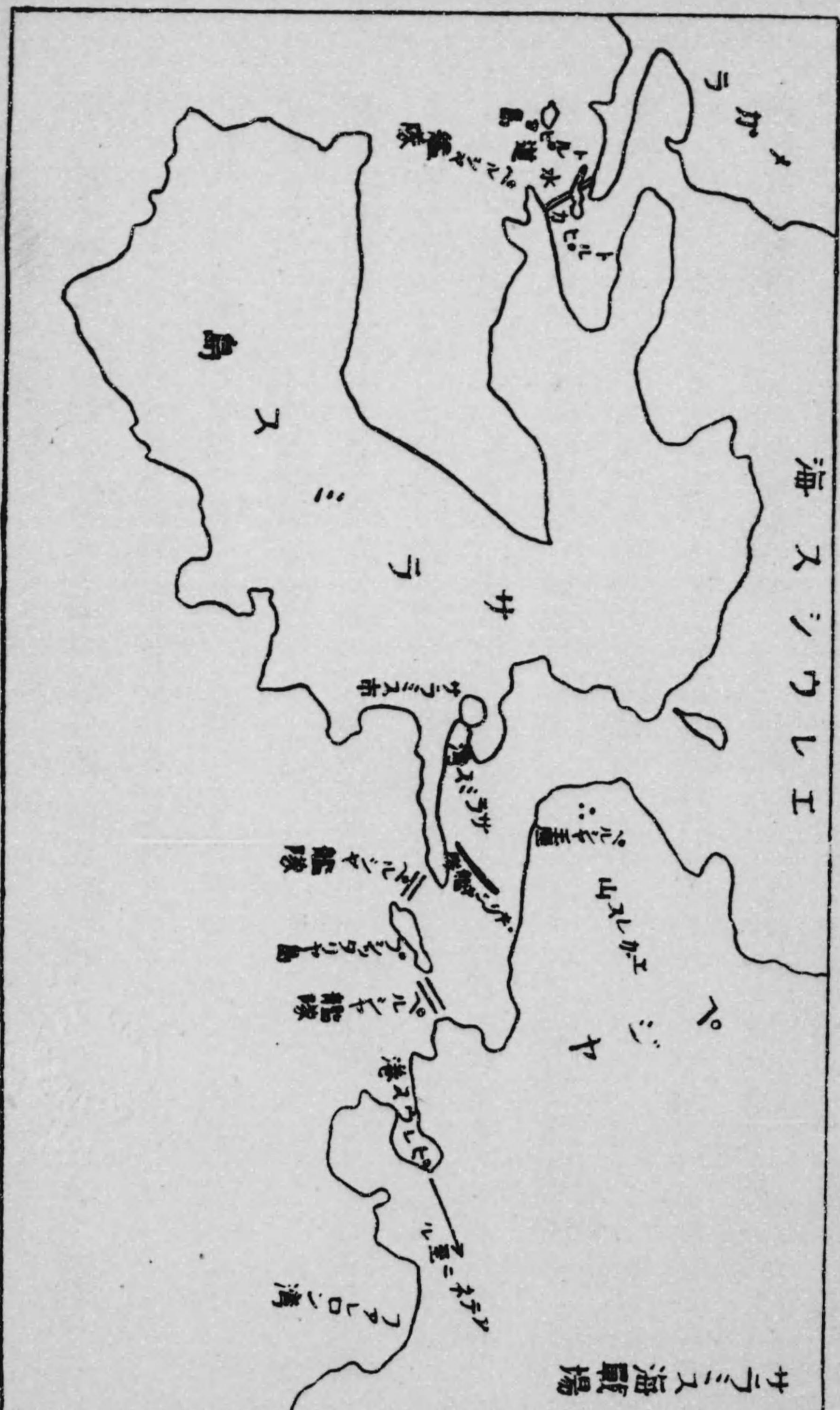
命は方に風前の燭とも言ふべき危機に臨んだのである。

(五) サラミスの海戦 前記

天地を驚動するサラミス灣の大海戦は今や愈々ここに幕を開かんとするのであるが、而し事は左程簡單に決定しなかつた。

アテネ海軍の司令官テミстокレスは必ず此所サラミス灣内に大海戦を決行し、以てアテネの興廢を一舉に決せんと覺悟した。

然しペルシャの大勢力を眼前に眺めたアテネ以外の各艦隊は甚だしく怖れ、又海戦による勝利の自信もなく、直ちにコリント地峽方面へ退却せんことを主張する者あるに至つた、特に司令長官エウリピヤデスは本國スバルタを守るためには、コリントの峽路に敵軍を防ぐことが最も有利なることを考へて、之れ亦極力退却を主張した、アテネを見殺しにするわけであるが、やむを得ないと考へたのであらう、同盟國に對する



義務の如きは、彼等偏狭なる自利主義の人々には極めて乏しかつたのである。

アテネの艦隊は如何でか其議に従ふことを得ん、テミストクレスは極力之れに反対した、此所を棄て去るならば、サラミス島に逃れた數萬のアテネ市民は、全部敵の手に生命を奪はれ、且つアテネ市恢復の望は恐らくは達し得ないことになるのである、死を決して此所にペルシャ艦隊と雌雄を争ふことが、アテネとしては死活の分るゝ所であつた、故にテミストクレスはあらゆる手段を盡して、聯合艦隊がサラミスに決戦することの覺悟を懐くに至らしめんと、努力したのである。

サラミス灣内の狹隘なる水面で、敵の大艦隊が軍艦の操縦に不便を感ずる場所で決戦することは、味方に甚だ有利であること。

又南方ペロポネス半島を護る目的から考へても、退却は決して得策でないことを力説し、且つアテネの主張を無視して若し同盟艦隊がサラミスより退却するならば、アテネ艦隊は不止得分離してサラミスに留まり、獨力敢然あくまでもペルシャ艦隊と決

戦を試むべし、然らば同盟艦隊は分散して又敵と戦ふの力を失ひ、司令長官は甚だしき不名譽を蒙るに至るべしと威嚇した、論旨明晰愛國の至誠に燃ゆるテミストクレスの提言には各艦長等も大に動されたのであつた、尙テミストクレスは同盟艦隊の決心を堅くせんと欲して、反間の計を用ひ、密かに使者をペルシヤ王の計に遣して、

「テミストクレスは私に大王に心を寄せてゐる故にギリシヤ海軍の計畫をお知らせするが、彼等は此所を捨て、コリントに退却せんと相談してゐる、よつてペルシヤ艦隊を派して直ちに退路を塞がれることが最も得策であらう」

と言はしめたとのことであるが、ペルシヤ王は大に喜んで、直ちに一艦隊を割きてサラミス島を廻り、島の西側トルピカ水道を塞がしめた、之れでギリシヤ艦隊はサラミス灣内に封鎖せられて、全く袋の鼠となつたわけである、テミストクレスがペルシヤ王に内通したとのことは眞偽不明であるが、彼れの献策がなくても、ペルシヤは常に包圍戦の策略を用ゐるものであるから、ギリシヤ艦隊の退路を塞いだことは當然の作

戦であつたらう。

テミストクレスの反間の計は二重の大なる利益を納めたのである、一はペルシヤ艦隊は二百隻より成るエヂプト艦隊を派遣してトルピカ水道を塞がしめた、よつてペルシヤ本艦隊は大に勢力を減じ、結局サラミス灣に戦つたペルシヤの軍艦は四百五十隻位であつた様だ、之れに對するギリシヤ同盟艦隊は三百數十隻で、餘り大した差ではない、かくペルシヤ艦隊は分散の不利に陥つたわけである。

次にテミストクレスの目的通りギリシヤ同盟艦隊は、愈々サラミス灣内に決戦することを覺悟するに至つたのである。

已に此時ペルシヤ艦隊は堂々とサラミス水道の入口に薄り、其通路を全く塞いで、ギリシヤ艦隊を威壓するばかりであつた。

此威様に怖れたギリシヤ艦隊、又もや退却説が持上つた、丁度其時、先に陸軍擴張を主張して、アテネを追放せられたアリスチデス、彼れもテミストクレスと同じく、至

誠憂國の士である、今や祖國の危急を知り、密かにベルシヤ軍の眼をかすめて、サラミスに歸つて來た、テミストクレス彼れを見て大に喜び、

「よく歸つて來て呉れた、敵軍の模様はどうだ」アリスチデスは

「今ベルシヤの軍艦二百隻ばかり、トルピカ水道の口を塞いでをるのを見た」

「ヤーさうか實は味方の艦隊が逃げ出さうとしてゐるから、乃公が反間の計を放つたのだ、成功、早速ながら君、今丁度司令官會議があるから、君の見て來た事を皆に話して呉れんか」

アリスチデスの熱心なる勸説、功を奏して、司令長官エウリピヤデス始め、各司令官艦長等悉く、愈々サラミスに決戦することの覺悟を定めた、軍議一決、窮鼠却つて猫を咬む、ギリシヤ海軍決死の奮戦、サラミス灣内驚天動地の大海戦は、明朝を以て開かるゝこと、確定した。

テミストクレスの苦衷空しからず、祖國の運命も此の一舉に決せんとす、我れに必勝の策あり、敵の優勢も恐るゝに足らず、彼れの顔には會心の笑を湛へたことであらう。

此時ベルシヤ軍の方でも同様軍議が行はれ、クセルクセス王親しく旗艦に臨み、各艦隊の司令官を集めて意見を問ふた、多數は勿論、サラミス灣に開戦し、味方の優勢を以て、ギリシヤ艦隊を灣内に壓迫せば、必勝疑ひなく、敵艦隊を全滅し得べしとの答へであつて、所がひとり小アジアにあるハリカルナス國の女王アルテミヤのみ之れに反對した。

「妾が考ふる所では、既にアテネ市は焼拂つて遠征の目的は半を達し、ギリシヤの大部分も已に征服して、残る所は南部ペロポネス半島のみ、何も急いで海上に決戦するの要はない筈である、暫くサラミス島を包圍して、陸軍の一部を以てコリント地峽を扼せしめば、敵は戦はずして屈服し、日ならずしてギリシヤ全部は大王に服従するに相違ない」と持久説を唱へた。

時には女子が男子に優る名策を案出するものとみえて、この女王の意見は實に立派なものであつた、若しペルシヤ王が此の説に従つたならば、ギリシヤは全く屈服し、従つて世界歴史はどんなに變つたことであつたらうか、勿論サラミスの海戦は歴史に残る筈がない。

しかしクセルクセス王はペルシヤ海軍の優勢を信ずる餘り、この忠言に耳を傾けず、多数の意見に従ひ、明日開戦すべきことに決定した、軍艦の数が多からとて決して眞の優勢ではない、ペルシヤ海軍の内部に大なる弱點が潜んでをたつたことを王は知らなかつたのであらう。

(六) サラミス海戦 戦況

世界歴史の運命を決する大海戦は、愈々こゝサラミス灣内に於て開かれることになつた、時は紀元前四八〇年の九月二十八日、此の海戦の結果は、敵味方ともに致命的の

影響を有することであるから、サラミス灣を挟んで、北岸にはペルシヤ軍、南岸にはアテネ人、何れも恐ろしき緊張を以て、戦況の發展に注意した。

ペルシヤ王クセルクセスは灣に臨むエガレス山上に玉座を設け、親しく戦況を視察し、花々しき戦功ある者には莫大の賞あるべし、若し卑怯の振舞あれば、嚴罰に處すべきことを、全軍に傳へしめたから、ペルシヤ海軍の勇士等、我れこそは大王の目前に、花々しき大功を立て、親しく褒めに預からんものと、勇躍せざる者はなかつた。

一方、故國は敵手に奪はれ、住みなれし都は敵の火に焼かれて、漸くサラミス島に運命を託した、アテネ市民の老幼婦女、味方の勝敗如何と、極度の懸念を以て海岸に立ち並び、戦況を凝視した、悲痛の氣海面を掩ふたのである、世界歴史上國家の運命を一戦に決した戦争は、其數少くはないが、恐らくはサラミス海戦程、双方の緊張したことはなかつたであらう、我等が相撲の勝負を賭する時、或は野球の仕合に我校の勝

敗を氣遣ふ時、いつしか手に汗を握るのであるが、しかし到底この場合に比較し得ない。

旭日まさに東天に現はれ、敵味方互に敵艦影を認め得る頃、忽ちギリシヤ艦隊には、勇ましき軍歌の聲と共に、進軍合圖の太鼓の音、鑿々と海面に響き渡つた。

ペルシヤ艦隊之れに應じ、その最も精銳であり、中堅であるフェニキヤの艦隊を先登として、名譽の位置たる艦隊の右翼を占め、キブルス、キリキヤ等の艦隊それに續き、サラミス水道の入口に向つて、大半月形の隊形を造つて、肅々と進撃した、合計四百數十隻、水道の入口は其幅僅かに十數町、灣内と雖決して廣くはない、この狭い所へ大艦隊を以て一齊に、進入したことは甚だ無謀な行動であつて、自ら活動の自由を奪つた様なものである。

ギリシヤの方では、アテネの司令官テミストクレス、此の一戦にペルシヤの中堅たるフェニキヤの艦隊を打破つて、敵の海軍をして、再び立つことの出来ない様にしなければならぬと覺悟した、敵の主力を撃破すれば、他は期せずして敗走するものである、よつて彼は自らアテネ艦隊二百隻を率ひ、殊更に名譽の位置たる右翼を、スバルタ等の艦隊に譲つて、アテネ艦隊は左翼を占め、以て直ちに敵の右翼たる、フェニキヤ艦隊に肉薄して、敵の主力を破らんと企てたのである。

フェニキヤ艦隊は勢猛く、灣内に進撃して、間もなく敵味方主力同志の矢戦は始まつた。弦の音、矢の響、関の聲、天地も聳するばかり、暫くしてアテネ艦隊は故意に少しく退いた、誘はるゝとは知らず、得たりとペルシヤ艦隊は、勢に乗じて猛進した、狭い水道内に、多數の軍艦が向ふ見づに突入したことであるから、忽ち窮屈を感じ、加へて大王の恩賞に預んものと、争つて進んだから、早くも混雜を來たし、艦列はすでに紊れ、互に接近し合つて權を折るの失態を演じた。

古代の軍艦は皆權を以て漕いだものであつた、帆船は速力遅く、行動自由ならなかつ

サラミス海戦圖



たからであらう、漕手をして或は三段列、又は五段列に並ばしめ、數十挺の長い櫂を舟の兩舷に出して、一齊に漕がしめたのである、故に軍艦が舷側に接近すれば、互に櫂を折つて、遂に行動の自由を失ふ様になるのである、丁度現今の海戦で、砲弾が機関室に命中して、軍艦の進退を奪はれた様なものである、時には自ら進んで敵艦の舷側に迫り、敵の櫂を折つて、之れを捕獲することも行はれた。

ペルシヤ艦隊の中堅たるフェニキヤの艦隊は、「ギリシヤ艦隊早や怖れて逃げ出すぞ、一隻も遁がさず打ち沈めよ」と我れ勝ちに隊形くづして追ひかけた、うまうマテミストクレスの計に掛かるとは知らず。

アテネ艦隊は後退すると共に、次第に左翼を延長して、ペルシヤ艦隊の先頭を押しながら、敵艦隊の兩翼を包圍するの隊形を造つた、輕卒に列を亂して突入した、ペルシヤ艦隊、之れはと氣の附いた時は己に遅かつた、忽ち三方から包圍せられて、こゝどとばかりに、勇氣日頃に百倍せるアテネの戦士に、烈しく攻撃せられて、益々列を亂し、間もなく全く混亂に陥つたのである。

軍艦の操縦に於ては、フェニキヤ人は必ずしも、アテネ人に劣る者ではないが、齊々たる隊形運動を報ることに、アテネ人に叶はなかつた様である、アテネ艦隊は常に隊形を整へ、勢力を集中して、フェニキヤ艦隊を個々に攻撃したから、多年海上の王として威を振つた、フェニキヤ海軍も、次第に打ち破られた、アテネ艦隊は愈々勢に乗じて、敵艦に肉薄し、我が舷側を以て敵艦の櫂を折り、或は衝角を巧みに利用し、敵艦の舷側を突撃して、一舉に之れを打ち沈め、(軍艦の舳には、極めて堅固な突撃機關が備へ附けてあつた、之れを衝角と言ふので、うまく用ひれば一撃に敵艦を破

壊すことが出来るのであつた。又は勇敢に槍をひねつて、敵艦に跳り込み、忽ち敵兵を薙ぎ倒して、之れを捕獲する等、獅子奮迅のはたらきに、ペルシヤ艦隊支えず、早やしどろもどの體。

天はアテネに幸してか、此時西風さかんに吹き起つて、アテネ艦隊風上より、追手に乗つて、愈々急撃したから、ペルシヤ艦隊は狭い灣内で、隊形亂れて行動自由ならず、遂に互に衝突して、同志相傷くるの失態をも演ずるに至つた。

時にギリシヤ方の右翼たりし、スバルタ其他の艦隊も、一齊にペルシヤ艦隊の側面目掛けて攻撃し、特にアテネと相並んで、海軍の技倆に優れてをつた、エギナの艦隊が、大膽に敵艦隊の間を突き抜けて、風下に出で、今や退却し來る所の、敵艦隊の退路を塞いで、之を惱したので、ペルシヤ艦隊は全く包圍さるゝ状況に陥り、總崩となつて散々に打破られ、ほうほうの體で敗走した。

ペルシヤ方の一艦の如き、急にギリシヤ艦隊に追撃せられ、まさに危急に迫るや、丁

度退路に味方の一艦が横はつて居つたから、進退谷まつたペルシヤ軍艦、忽ち味方の軍艦を撃沈して、どんく逃げ去つた、各種の國人より成るペルシヤ海軍は、敗北となれば我れ先きにと逃げ出し、同志打も何もかまつたものではなかつたのだ。

海戦始終の様子を山上から親しく眺めて居つたクセルクセス王の心中や如何なりしならん、味方の大敗北を救援する術もなく、空しく手を束ねて眺めて居つた、ペルシヤ陸軍の士氣や、必勝の歡喜より、忽ちにして全敗の恐怖に陥つたことであらう。

それに反して對岸サラミスには、懸念と悲痛の色を以て、戦の進展を一心に凝視して居つた、アテネ人の面には、此時如何ばかりの歡喜を現はしたことであらうか、僅か數時間の中に生死全く地を替へ、勝敗の數は變じて、東は衰へ、西は隆盛に向ふの運命を決し、且つギリシヤ文明を以て代表する、世界史の進路は、爰にその順當の道を回復したのである。

ペルシヤ海軍の蒙つた損害は殆ど全滅に近かつた、撃沈された軍艦二百隻、戦死は四

萬人を數へ、クセルクセス王の弟である、司令長官アリアビグネスも亦その中にあつた、覆滅を免がれた軍艦尙ほ三百隻程はあつたが、最早戦ふべき氣力を有してゐなかつた、之れに反してギリシヤ方の損害は、極めて輕微で、軍艦四十隻を失つたのみ、水中に落入つた兵士等は、大抵泳ぎついて味方に助けられた、只だ敵の矢や、投槍に倒れた者は相當あつたが、ギリシヤ方の全勝であつたことは勿論である。

ギリシヤ艦隊は水道の外まで十分に敵艦を追撃し、ファレロン灣まで追ひ込めて、悠々と引上げた、時に日は全く暮れて、月光は海面を輝らし、終日激戦後の海上に船の破片と、累々たる屍體、凄愴の光景鬼氣迫るとや言ふべき時、ギリシヤ艦隊は凱歌を奏して勇ましくサラシス灣内に引上げた、勝利の榮冠を荷ふ勇士の面々を迎へし、老幼婦女の歡呼、相抱いて歡喜に泣きし光景、日本海大海戦、全勝の報に接して、全國一齊に、萬歳を叫んだ當時の光景より、二千四百年前のギリシヤ人歡呼の狀を、想像することが出来るであらう。

(七) サラミス海戦 後記

ペルシヤ艦隊大敗の狀を目撃した、クセルクセス王は驚駭惜く所を知らず、急速軍を纏めて退却した、殆ど成功の間際まで達しながら、サラミスの一敗に全く失望落膽して、ギリシヤ征服の目的を放棄した、ペルシヤの陸軍數十萬は未だ全勢力を保有し、海軍も敗北したとはいへ、先にトルピカ水道に廻航した、エジプト艦隊二百隻は何等の損害を蒙らず、之れに敗殘の艦隊を合せて、猶用ふべき相當の勢力を有して居つたのである、それに關はずペルシヤ王が俄に退却に決したのは何故であるか、ペルシヤ海軍なほ數百隻ありとは云へ、それは單に數があるだけであつて、最早ギリシヤ海軍に對して戦ふべき士氣を有しない、のみならず先にペルシヤに従つた小アジア沿岸ギリシヤ諸市の艦隊は、續々翻つてペルシヤに背き、ギリシヤに歸屬するものが多いのであるから、益々ペルシヤ海軍の勢力は殺がれ、到底海上で再び戦ふの勇氣を有

たない様になつた。

サラミス海戦後ペルシヤ方の海軍は甚だしくギリシヤ海軍を畏れる様になつた、翌年ギリシヤ海軍が攻勢をとつて、小アジア西岸サモス島に隠れて居つた、ペルシヤ艦隊を攻撃するや、ペルシヤ人はギリシヤ艦隊を見ただけで、海上で戦ふ勇氣を失ひ、ミカレ岬に逃げ出し、軍艦を陸上に引上げて、之れを壘とし、軍艦を城壁に代用して戦つた、軍艦で陸戦したとは類のない話だ、其時ペルシヤに屬して居つたイオニヤ人が鋒を逆にして、ペルシヤ軍を撃つたので、ペルシヤ艦隊は陸上で全滅した様な事がある。

サラミス海戦によつて今まで地中海の海を支配したフェニキヤの勢力は俄に衰へ、アテネが代つて海上の勢力を握る様になつた、海上の勢力を英語で Sea Power 海權と言ふのであるが、この海權を握ることは國家の運命に大なる關係を有してゐる、アテネは之れを得て非常なる隆盛を來たし、フェニキヤは之れを失つて間もなく滅亡した

のである。

クセルクセス王はサラミスの敗戦によつて、ペルシヤの海權が殆ど喪失したことを直覺したのである、故にギリシヤ海軍がペルシヤ軍の後方連絡を脅す危険もあり、且つヘレスポンドに架した舟橋が土人のために破壊される心配もある、又ペルシヤ陸軍とても其士氣に非常な打撃を蒙り、元來多數服屬國民から成る軍隊であるから、愛國心も勤王心もある筈がない、故に勝ち戦には分捕目あてに甚だ勇敢であるが、負け戦となると生命あつての物だね、逃走を專とするから忽ち全軍の解體を來たす恐がある。

斯様なわけでクセルクセス王は急速軍を率ひて退却した。

富士川の對陣に水鳥の羽音に驚いて、戦はづして周章敗走し、風聲鶴唳京都まで逃げ返へつた平家十萬の軍は怯懦の範とせられるが、クセルクセス王はそれ程でもなかつたが大體よく似てゐる、王は將軍マルドニウスに三十萬の軍を授けて後事を托し、海

峽の舟橋も幸に無事、大急ぎで首都スサまで歸つてしまつた。

二十年にわたるギリシャ征伐の大事業も、爰に全く敗滅し、ダリウス大王の遺志は永久に成らず、クセルクセス王も懊惱の中に間もなく命を終つたのである。

軍を率ひて留まつたマルドニウス將軍は、到底力を以てギリシャの服すべからざるを知り、之れを懐柔せんと欲し、利を以てアテネを誘つたが、勿論勝ちにのつたアテネの應ずべき筈がない、翌年ギリシャ聯合軍はアテネの西北プラテーイーに、ペルシャ軍を攻撃した、大將マルドニウスは戦死し、ペルシャ軍は全滅した、同年前記の如くペルシャ海軍も、ミカレ岬に全滅して、ペルシャ戦役は完全にギリシャの勝利に終つたのである。極めて小なるギリシャの國が、極めて大なるペルシャ國を打負かしたのである、國の大小は必ずしも戦の勝敗を決定するものではない。

其後アテネはデルス同盟を組織して、愈々海軍を擴張し、ギリシャ諸國の海軍大聯合を造つて、ペルシャに對して攻勢をとり、屢々ペルシャの沿岸を荒掠したが、しかし

此兩國の争は一方が全く滅亡し終るまでは止まず、其後斷續約二百年、遂にギリシャを代表するマケドニヤのアレクサンドル大王が、不世出の雄材を以て、僅々數年の中に、ペルシャ全土を席卷し、紀元前三三一年ペルシャ帝國の全く滅亡するに至つて終息したのである。

サラミスの海戦は世界最初の大海戦として、海權爭奪戰の魁として、東西雌雄を争ふ第一歩として、將た國士テミストクレスの大活劇として、實に興味津津たるものあるを覺ゆるのである。

ポエニ戦役

(一) ローマ帝國の興起

ギリシヤ史に於て最も重大な事件といへば、前に述べたペルシヤ戦役であり、其決勝點はサラミスの海戦であつた、サラミスの大勝利によつてギリシヤは最早東方から脅かされるの危険を免がれ、其天職たる西洋文明の基礎を樹立することが十分に出来る様になつた、サラミスの海戦は實にギリシヤ否西洋史の運命を決した大事件であつた。同様にローマ史に於て其の最も重大な事件であり、ローマの運命を決した所の戦は今茲に述べんとするポエニ戦役、即ちローマ、カルタゴ間の戦である。

國家の將に興起せんとするや、其運命を定むる所の危機が必ず一度は臨むもの、様である、若しその危機に際會して不幸挫折する様なことあらば、暴風に散らされる蕾の

如く、何等人の願する所とならず史上から消へ去ることであらうし、之れに反して其試運に見事勝つことを得た國家は、隆々として旭の昇るが如く世界史上に重要な位置を占め、榮譽を以て青史に輝くことを得るものである、且つかゝる國家興亡の分岐點に會したる際、其國民が如何なる態度を以て、それに當るかを視れば、以て其國家が興隆し得る能力を有せるか、否やを判断し得るものがある、此意味に於て我が明治維新の歴史は、國家内外の重大なる危機に際會して、我國民が如何に著しく尊王愛國の至誠を披瀝し、一死公に奉ずるの覺悟を以て邁進せしかを示すものであつて、由つて以て我國家が興隆の要素を具備せることを斷言し得るものであり、明治大正六十年間に於ける我國の異常なる内外の發展は、其實證であると言ふことが出来よう。ペルシヤ戦役がギリシヤの興亡を決する危機でありし如く、ポエニ戦役はローマ史の運命を定むる大なる試練であり、此戦役に際會してローマ人の發揮した偉大なる國民性は、吾人に幾多の教訓を提供するものである。

偕てローマと言ふ國は西洋史上甚だ重要な位置を占めるものであつて、或史家はローマは歴史上一の大なる湖水の如きものであり、ローマ以前の諸國家、諸文明一度は悉くローマに集中して融合され、次で其湖水より各方面に流出して近世の諸國家となり、又近世の文明を形成するに至つたものであると言つて居る、此事は歴史のたしかに示す所であつて、「天下の道は悉くローマに集る」とは一言以てよく世界史上に於けるローマの位置を盡したものであらう。

ローマと云ふ國は後にこそ歴史上稀に見る大帝國を成したのであるが、遡つて其建國當時を顧ると實に微々たる一小市に過ぎなかつたのである。

イタリア半島の背骨たるアペニン山中から流れ来るチベルの河口近き七つの丘上に建てられた一小市こそ、後世ローマ大帝國を造る卵子であつた、此地方の住民たるラテン人の植民地として建設され、其王ロムルスの名によつてローマと名付けられたこのことで、時は紀元前七五三年、今から約二千七百年程前のことである。

チベル河と丘陵とは交通と防禦との利便を供してローマ市は次第に發展し、それに伴ふて生じた貴族と庶民との階級闘争は兩者の互譲漸進的改革によつて、終に全く融和せられ、事にあたつて協力一致、よく奉公の赤心を發揮したローマ人は、其勢力逐次伸張して、附近の他民族を征服し、紀元前四世紀の末頃には中部イタリアの覇權を握るに至つた。

イタリアの北部今のロンバルディア地方には、當時最も兇暴であつたガリヤ人占居し、屢々ローマを脅威したが、紀元前三九〇年には大舉南下してローマ市に迫り、さすが戦闘に勇敢であつたローマ人もガリヤ人には敵し得ず、ローマ市は全く重圍に陥つて、あはやローマも蕾の中に散ることかと思はれたが、堅忍にして且つ臨機の際に豊かなるローマ人は巧にガリヤ人をして退却せしめ、ローマは幸にも九死に一生を得た様な危機もあつた。

イタリア南部には早くからギリシヤ人が盛に植民して居り、沿岸に多くの都市を營

み、殆どイタリア南半はギリシヤ人の天地であり、大ギリシヤの名を以て呼ばれてを
つた、ローマの發展が遂にギリシヤ人との衝突を惹起するに至るは當然のことであ
り、ギリシヤの代表市たる南端のタレンツムと勝敗を争ふに至つた、時に東方アドリ
ヤ海を隔て、ギリシヤの本國にエピルスと言ふ國があつた、其王ピルスは兼ねてより
アレクサンドル大王に倣ひ、大功名を立てんと志してをつたが、丁度タレンツムから
救援を求める使者が來たので大に喜び、直ちに親ら大軍を率ひて、遙々印度から送ら
れた戦象數十頭を伴ひてイタリアに渡つた、時は紀元前二八〇年、其後五年間、古代の
二大文明國民であるギリシヤ人とローマ人が爰に死力を盡くして激戦したのであつ
た、ローマ人が鼻の長い巨象を見たのは此時が始めてで、ローマの戦陣も象のために
散々な目にあつた、しかしローマ人は例によつて屈せず撓まず、遂に象軍を破る巧な
利器を工夫して、紀元前二七五年ベネンツムの一戦に、ピルス王をして最初の大野
心を棄て、失望落膽はうくの體で本國に逃げ還るに至らしめた、ピルス王がアレク

サンドル大王に比すべき英雄でなかつたことは、ローマ人により試験せられたわけで
あつた。

間もなくタレンツムは力つきて屈服したのでギリシヤ植民地は全部ローマに服従し、
イタリア半島はその南端までローマに統治せられることになり、爰にローマは其發展
の第一段を終つたのである。建國の始めより正に五百年、ローマの發展は甚だ遅々た
るものであつた、疾風迅雷的で、線香花火の如く忽ち興つて、忽ち消去る様な國では
なかつた、後ちのサラセン帝國の如き、或は蒙古大帝國の如きは、忽ち現はれて世を
驚かし、又忽ち消へ去る流星的の興亡であつて、ローマのそれとは正反對であるを
心して觀察することを要する、ローマの興國史には千載の後と雖吾人に學ぶべき多く
の活教訓を示す、その堅忍不拔の精神は古今に絶し、堅實なる漸進的の改革は國政を
執る者の範たるべく、善く異民族を抱擁せしローマ人の大度は、大國民たらんとする
者の必ず倣ふことを要する點である、偉大なる國民性を有せしローマ人は、終に偉大

なるローマ帝國を建設し得たのであつた。

(二) ローマとカルタゴ

長靴と間違へられるイタリア半島の指先に當り、帶水のメッシナ海峡を隔て、不正三角形のシシリ島が横はつて居る、丁度靴先で蹴飛ばされんとするボールの様な位置にあるが、ボールとしては甚だ形がまづいたためか、幸にして未だに蹴飛ばされずして、よく半島に密接してゐる、此島にも早くからギリシヤ人が植民地を建設して居つて、シラクサ、メッシナ等は其有名なる市である、イタリア半島を統一したローマの勢力が次で伸張すべき目標は、この富饒なるシシリ島であることは免かれ得ない大勢であらう。

シシリ島の西端アフリカ海、今のチュニス海峡を僅か五十里ばかり隔て、アフリカの北端にカルタゴと言ふ國があつた、フェニキヤ人の植民地であつて、ローマの建

國よりも二百年ばかり前に建設された商港カルタゴが次第に發展したものである、早くより西部地中海の商權を握り、進んで大西洋沿岸にも航海して、大に隆盛を來たした國である、フェニキヤ本國が衰微し、終に紀元前三三二年アレクサンドル大王東征の途に全く滅亡の厄に會ひ、従つて地中海東部の海上勢力がギリシヤ人の占有に歸するや、フェニキヤ人は全勢力を地中海西部に集中し、イタリア以西の海面は當時全く彼等の獨占する所となつた、其中心地が此のカルタゴ市である、ローマ人は未だ海上に其力を伸すの餘裕を有せず、ギリシヤ人もシシリ以西までは其勢力及ばず、故にカルタゴ人は此方面に於て海上の獨占權を握り、其勢力侮るべからず、特に其富力と海軍とは當時の世界に並ぶものなき状態であつた、且つ對岸シシリ島にも早くから其勢力を伸し、ギリシヤ人を壓迫して島の西半部を占領し、次でシシリ全島を己が手に納めんと常にその機會を窺つて居つたのである。

即ちシシリ島は次第に南下するローマの勢力と、それに拮抗せんとするカルタゴの

勢とが衝突する分争點となつたのであつて、此所に在るギリシヤ植民地は丁度此大衝突に好餌を供して、開戦の動機を與へるの地位に置かれたわけであつた。

ポエニ戦役とは斯様な形勢から始まつたローマとカルタゴとの戦であつて、シシリー島の争奪に端を發し、次で地中海の海上権争奪戦となり、双方死力を盡して古今未曾有の大激戦を演じ、紀元前二六四年より同一四六年、カルタゴの全滅に終るまで、通じて一二〇年に亙る死活戦となつたのである。

ポエニ戦役は通常之れを三回に分つ、第一回は紀元前二六四年より同一四一年まで二十餘年間、第二回は紀元前二一八年より同一二〇一年に至る十八年間、最後の第三回は最も短かく、紀元前一四九年より同一四六年まで三年間、實戦年數合計四十餘年、歴史上稀なる長期の戦争である、明治の元年に始まつて大正の元年に終つたと同じ年數である、中世に於ける英佛百年戦役は、其名の示す如く長期に於ては有名であるが、而し實戦年數はポエニ戦役に及ばないのである。

ポエニとはローマ人の呼んだ名であつて、カルタゴがフェニキヤ人であるため、フェニケと呼びし言葉が訛つたものであらう。

尙ポエニ戦役は東西二大文明衝突の意味をも有せるものと考へることが出来る、ローマは言ふまでもなくアリヤ人種の國であり、ギリシヤ文明即ち西洋文明を代表する、カルタゴはセム人種のフェニキヤ人であり、位置こそローマの南方に當るが、其文明は東方を代表するものであつた、かのペルシヤ、ギリシヤの戦が東西の衝突であつた如く、ポエニ戦役も亦東西大衝突の一節をなすものである。

世界史上東西の衝突と言ふことは、種々なる形勢によつて實に屢々繰返された大事實である、單に古代或は中世のみではない、近世に於ても亦同様であつて、ロシアのシベリヤ侵略も、或は英國のインド征服も、是れ矢張り東西衝突の一端と見るべきである、いな決して過去の事のみではあるまい、將來と雖恐らくは尙繰返さるゝ事情を有することであらう、東方を代表し、其特種なる位置を有せる我が日本國民は、深く此

點に留意することを要する。

ローマが未だイタリア半島を全く統一せず、其勢力海上に伸張しなかつた、紀元前三世紀の初頃には、ローマとカルタゴは未だ決して敵國ではなかつた、かのエビルスのピルス王がイタリアに侵入した時には、カルタゴも相當恐怖を懷き、一時ローマとカルタゴの間に同盟の約も結ばれた仕末である、而し双方共に信義を守らず、同盟の約は何等の效もなさなかつた様であつた、次でローマはピルス王を破り、其勢力愈進展して、直接カルタゴの勢力圏に迫るに至つて、兩國は公然戰場に相見るの運命に出會つた、彼のピルス王が事成らずしてイタリアを去らんとする時、

「余は決闘場を彼等に殘す、カルタゴとローマは正に此所に相抗するなるべし」と言つたとのことであるが、必ずしも之れピルス王の負惜みの言ではない、多少達識ある者は、此兩國の戦闘が早晚開かるべきは視易いことであつたらう。

ポエニ戦役開始の當初は、ローマ、カルタゴ兩國の勢力約伯仲し、勝敗の數は到底豫

斷を許さなかつた、ローマの陸軍は勇敢にして愛國心に富み、傭兵より成るカルタゴ軍に比してはるかに優つて居つた、しかしローマは全く海軍を有せず、カルタゴは無敵の精銳なる大海軍を備へて居つた、ローマは陸に勝り、カルタゴは海に優勢を保つた、ローマの財政は甚だ貧弱であつたが、カルタゴは富力天下に冠たりであつた、其代りローマ國民は上下協力よく一致團結し、且つ堅忍不拔の精神を有して居り、カルタゴは之れに反して國家内部に多くの弱點を有し、堅實なる精神を缺いで居つた、かく一長一短を有する此兩國の勝負や如何に。

ポエニ戦役前後三回、其各が特種の意義を有し、第一回はシシリー島の爭奪に始まつて、後には主として海上に雌雄を争ひ、従つて殆ど海戦を以て終始したのであつた、然るに第二回ポエニ役は、カルタゴの英雄ハンニバルが、ローマに復讐を企てし戦であつて、且つ終始陸戦のみであつた、而して第三回役は單に強大なるローマが衰微せしタルタゴを屠つた事件に過ぎないのである、故に本書に於ては第一回の海戦のみを

記述し、其勝負の理を明らかにせんと欲するも、第二回以下の戦記は之れを陸戦史に譲る、尙第一回ポエニ戦役は海戦を主としたものであるが、ヘルシヤ戦役に於けるサラミス海戦の如く、一大海戦によつて忽ち終局の勝敗を決した様な大海戦は行はれなかつた、前後二十年に涉つて主要なる海戦の行はるゝこと數回、互に一勝一敗あり、持久的の努力を以て終局の勝利を納めんと、死力を盡しての奮闘振は、一戦忽ち勝敗を決せし快戦よりも、一層の活教訓を吾人に供するものである。

(三) ポエニ戦役の發端

僅かな動機は遂にローマ、カルタゴ兩國をして必死の戦を開始せしめることになつた、イタリヤ半島の西南カンパニヤ地方の土人より成る、マメルチニと呼ぶ傭兵的の軍隊があつた、不法にもシシリヤ島の東北端にあるメツシナ市を攻奪し、尙四近を荒掠した、故にシラクサ市の僭主ヒエロ大に怒り、親ら軍を率ひて此暴徒を討伐せんと



ポエニ戦役

した、マメルチニ軍は勿論烏合の衆、到底シラクサの軍隊に敵し得べくもない、直ちに救援を他に求めんと、一方ローマに救を請ふと同時に、他方カルタゴにも助を求めた、どちらか援軍を送つて呉れるだらう、どちらでもよし速く軍隊を

出して貰はんと、かく同時に兩國に援軍を求めたことは、甚だ不謹慎な行動であつて、之れがポエニ戦役を開始せしめる動機となつたのである。

カルタゴ政府は此の求援に接して大に喜んだ、既にシシリ島西部は自國の領であり、シシリ東部に勢力を有する、ギリシャ人のシラクサ市とは兼ねて親善の關係がある。

此機會にイタリヤ半島に對する要地メツシナを占領すれば、全島殆どカルタゴの支配下に歸するわけであるから、好機逸すべからずと、直ちに將軍ハンノーに一隊の軍を授けて、メツシナに急行せしめ、難なく城中に入ることを得て、仕合せよしと喜んだ。

一方ローマの元老院では、若し此際軍をシシリに派遣せば、カルタゴとの衝突が避け得られない羽目におちいることを考へて、多少躊躇したが、血氣旺盛な民會は、直ちに軍隊を送つて、此機會を逸せず、シシリにローマの勢力を樹立すべしと主張し

た、進取的なる民會の説は可決せられて、直ちに多數の軍隊がシシリに向つて出動したが、カルタゴに一步を先んぜられた、之れローマが未だ海軍を有たなかつた爲である。

ローマ軍の將カイウス・クラウヂウス、兵を率ひてメツシナに到着すれば、既にカルタゴ兵は城中に在り、定めし彼れは殘念と叫んだことであらう、併しクラウヂウスは寶の山に入りながら、手を空ふして引返す者ではなかつた、遂に計畫を廻して、カルタゴの將ハンノーを城外に誘ひ出し、之れを罟として、カルタゴ兵を脅かし、まんまと開城せしめて、メツシナ城を占領してしまつた。愈々兩國開戦の火蓋は放たれた、此報に接したカルタゴは、何條其儘に捨て置くべき、ローマ、カルタゴの交戦は避け難き運命となつたのである。

併しカルタゴ政府は元來ローマとの開戦を欲したのではなかつた、商業本位のカルタゴは、戦争が莫大な損害を齎すことを十分に承知してゐる、故に成可は戦を避けて平

和の内に利益を納めんことを欲した、ローマの如く國威發揚のためには、如何なる難儀をも辭せざるの覺悟を有してゐなかつた、カルタゴの將ハンノーが、ローマ軍の將クラウヂウスに、平和的解決を要求した時、彼れクラウヂウスは、

「最早やローマ、カルタゴ間には、我等が手を洗ひ得るだけの海さへも、存せしむることを得ない」と

一言の下に撥付たとのことであるが、ローマの一卑將たる彼れに此の意氣があつた、之れ亦ローマ全國民の意氣であつたに相違ない、國民に斯の如き強勢なる意氣があつたればこそ、一小市ローマが終に世界的大帝國を建設し得たのである。

平和を望んだカルタゴは、元より戦争の準備をしてゐなかつた、然し海軍だけは平素より十分に備へて居つたが、カルタゴの元老院は、甚だ不活潑であり、開戦はしたが、急には軍隊を送らなかつた。

其間にローマでは續々、軍隊をシシリーに送つて、進んでシラクサ市を攻め、僭主ヒ

エロを降服せしめて、之れをローマの同盟に加へた、シシリー南岸に在つた、カルタゴの根據地であるアグリゲンツム市も、間もなくローマ軍の占領する所となり、破竹の勢でローマ軍は、開戦後幾何もなく、殆どシシリー全部をローマの勢力下に置いた。僅かに島の西端をカルタゴに残すのみである。

(四) ローマの海軍建造

陸戦に於てのカルタゴは到底ローマの敵でなかつた、然し海上にあつては其正反對で、ローマは殆ど海軍を有せず、僅かにローマの同盟であるギリシャ諸市が多少の軍艦を提供した位のものである、Socii Havales なる海軍同盟が存在して居つたが、勿論恃むに足るものではない、海軍を具へなかつたローマは、イタリアの全海岸を敵に開放して居つた仕末である、優勢なる海軍を有し、海上の權力を握つたカルタゴは、屢々軍艦を出してイタリア沿岸に出沒せしめ、或はローマの軍隊輸送を妨げて大に不

安を感じしめた。

ローマは建國以來今回の戦争までは、左程海軍の必要を感じなかつたが、今や敵國カルタゴを征服するために、敵が海國であり、海を隔てた國であるため、是非共海軍を建造しなければならぬ場合に立到つたのである。

ローマは俄に軍艦の建造を始めた、「泥棒をつかまへて繩をなふ」と言ふが、ローマの海軍建設は丁度その通りだ、しかし古代の戦争は一般に極めて緩慢であつたから餘り差支がなかつた、ローマ人は晝夜兼行どんく山から材木を伐り出し、大急ぎで軍艦を造つた、ローマ人は其造り様を知らなかつたが、幸に其時ラチウムの海岸に難破した五段櫂の敵艦一隻を得て、之れを手本として僅に二ヶ月の内に大軍艦百隻を造つたとのことである。

又ローマ人は軍艦の漕法を知らないので、陸上に臺を据えて、漕法を練習した、斯様な俄造りの海軍では到底完全なることは出来る筈がない、軍艦だけは俄かに造ること

も出来様が、海軍の訓練は決して一夜漬では役に立たない、如何にローマ人が勇敢で、愛國心が強かつたとはいへ、多年海事に熟練を積んだカルタゴ海軍を敵手にすることは難の又難たるものであつた。

然しさすがはローマ人である、自分の短所を自覺して、如何にせば敵の長所を敗り得るかの工夫を廻らすに敵であつた、敵の勝れし能力を知りながら、漫然運に任せて戦を挑む如きは暴虎憑河の勇である、決して智者の執るべき途ではない。

軍艦の操縦に於てはローマ人は到底カルタゴ人に敵し得ないが、陸上で劍戟の間に勝負を決することは之れローマ人の長所である。

ローマは此の長所を海軍に應用せんとした、コルヴァーと名附けた特殊の装置が案出せられ、軍艦の後甲板に滑車仕掛の大きな廻轉梯子を備へ附け、成可く敵の艦腹に接近をはかり、俄に迫つて忽ち梯子を渡し掛け、どんく敵艦内に乗込む計をなしたのである、各艦に出来るだけ多くの戦士を乗せ、敵艦に闖入して之れを捕獲するの策で

ある。

先にギリシャのピルス王が戦象を利用して、大にローマ軍を苦めた時、さすが勇敢なローマ軍も、巨大な象軍の列横隊が長鼻を振つて突進し来るには、少からず閉口したが、間もなく珍らしき戦具を發明して之れに當つた、ローマ軍の先鋒には、極めて長い棹を附けた篝火を持たせて、盛に横を燃し、一列横隊を造つてどん／＼象軍目掛けて突進し、いきなり象の鼻に其火炎を押附けた、熱帯の氣候に慣れてゐる象も、鼻から熱火を吸込んでたまらない、忽ち閉口し翻つて味方のギリシャ軍の方へ逃戻つたので、ピルス王は敵を苦めんと企て、却つて味方が蹂躪される様な状態に陥り、とう／＼敗北したとの話が傳へられてゐるが、事實は兎に解ローマ人は能く工夫を凝す國民である、決して猪突を能とするものではなかつた、ローマ海軍の發明した此のコルヴィーは間もなく實戦に用ひられて、其效を現すことが著大であつた。

(五) ミレートの海戦

ポエニ戦役開始後四年目の紀元前二六〇年、ローマ海軍は始めて大勝利を得た。

ローマの執政官ヱリウスは新造の軍艦百隻を率ひて、百五十隻より成る優勢なカルタゴ海軍と、メツシナの少し西方に在るミレート岬で會戦した、カルタゴ海軍は、元より海に慣れぬローマの海軍を頭から侮つて掛つた、一舉に之れを全滅せんものと、列を亂して競ひ掛つたが、ローマの方では待ち設けた所、敵艦の近づくや忽ちコルヴィーを渡し掛けて、突入し當るを幸に斬り倒した、弘安の役我勇將河野通有等が小船に乗じて大膽にも元の大艦を夜襲し、帆柱を倒して敵艦に躍込み、敵將の首を取つて大に功名を現はしたが、東西よく似た興味ある話である。これにはカルタゴ海軍大に驚いた、不意をくつたカルタゴ軍は、策の施し様もなく、間もなくカルタゴ方は八十隻ばかり捕獲されて、殆ど全滅の姿となり、這々の體で遁げ去つた、カルタゴの大將は

僅かに身を以て脱し、附近に上陸したが、かねて怨を有つて居つた味方の傭兵に殺されてしまつた。

此の勝報が如何にローマ人を喜ばしたかは、想像に餘りあることだ、コンスルヅイリウスはあらゆる名譽を以て報ひられ、捕獲敵艦を以て造つた戦勝記念柱が巍然としてローマ市に聳えた。

ミレノ岬の勝利によりローマは、最早やカルタゴ海軍のために、イタリア沿岸を脅かされるの危険より免るゝことを得、且つカルタゴ海軍の左程恐るべきものでないことを知つて、進んで海上に攻勢を執る様になつた。

總て物事は最初が大事である、開戦当初の一勝が、遂に全局の勝利を決する基礎となることは、史上多々ある例である、ミレノ海戦に於けるローマの勝利は、ポエニ戦役終局の勝利を決定するものであつた。

ローマは愈々進撃策を採つたが、しかし其戦略は餘り當を得てゐなかつた、一方シリイにも軍を増して、猶島の西部を保有してゐるカルタゴ陸軍を破らんとし、同時にコルシカ、サルヂニヤの諸島にも出兵して、之れを略取せんと欲した、かく勢を分た結果は、ミレノ大勝の利益を十分に納めることを得ず、シリイに於て數回、カルタゴ軍のために、反つて苦しめられるの悲境に陥つた。

(六) エクノムスの海戦

ローマの元老院では漸く其作戦計略の誤れるを悟り、大に決心して一舉にカルタゴの本國を衝き、敵を全く屈服するの策を執ることとした、開戦後七年目の紀元前二五七年に、ローマは大遠征軍を組織した、軍艦三五〇隻、水夫十萬、兵員四萬人より成つた大軍である、イタリア沿岸に總ての準備を整へ、執政官マンリウス・ヴァルソ、アチリウス・レグルスの二將是れを引率して、威風堂々と南を指して出發した。

ローマ遠征軍の計畫を探知したカルタゴは、大に驚いて之れが防戦に腐心し、軍艦三

百五十隻を集め、名將ハミルカルとハンノを正副の司令官に任じ、シシリーの根拠地リリベウムを出發して、ローマ軍を海上に打破らしめんとした。

カルタゴ艦隊が根拠地リリベウムを出發するにあつて、大將ハミルカルは大に部下を激勵し、

「若し今度の戦に敗北する様なこととなつたら、我等は我が國土を敵手に委ねて、防戦しなければならぬ悲境に陥るべし」

と、言つたとのことであるが、決死の覺悟を以て、此一戦に國家の興廢を定めんと決心したことが窺はれる。

原來開戦の當初は前記の如く、ローマは全く海軍力を有せず、海上權力はカルタゴの領有する所であつた、此時にあつて何故にカルタゴが直ちにローマの本據に軍隊を送つて、一舉敵を屈するの策に出でなかつたか、海上權を握つたカルタゴが防衛的戦略をとり、海軍を有しなかつたローマが、俄に海軍を造つて、進んでカルタゴ本國を

攻めるの策を取つたとは、事は全く正反對の形勢を呈したのだ、よつて知るローマ人の如何に進取的であり、カルタゴ政府の如何に退嬰的であつたかを、進取が成功の本であり、退嬰が失敗を齎すことは世の通則である。

ローマ艦隊はメツシナに立寄り勢を揃へて出發、シシリー島に沿ひ、島の南岸エクノムス岬に達した時、此所にリリベウムを出發して東航したカルタゴ艦隊と出會つた、有名なエクノムスの海戦は斯様な事情の下に始まつたのである、双方合して七百隻に達する堂々たる大艦隊が、海岸近き所とは言へ廣い海上で雌雄を決したことは、歴史あつて以來之れが始めてある、狭い灣内で戦つたサラミス海戦とは大に戦の様相を異にする。

ローマ艦隊は後方に運送船を掩護して、大楔狀陣を造り、楔の尖端を以て敵陣を突き破り、兩翼を以て之れを包圍せんとすの陣構へであつたかと想はれる、それに對してカルタゴは、全軍を四隊に分ち、大半月形的横隊を造つて、ローマ艦隊を左右より包圍

せんとの戦術をとつたもの、様である。

然るに敵味方いよく接近して、將に開戦せんとするや、カルタゴの本隊は少しく退却して、追ひ来るローマ艦隊を三方より包圍せんと企てたが、ハンノーの率ひるカルタゴの右翼隊は少しく進み過ぎて、ローマ軍の後部を衝き、其運送船に迫つたから、ローマの後部艦隊は驚いて、運送船を掩護しながら海岸の方へ退却した、ハンノーはどこまでもと勢に乗じて追撃し、ローマの一艦隊と運送船隊とを海岸の方へ壓迫した、爲にカルタゴ艦隊は始めの計畫を忘れ、離れくになつて、戦は三ヶ所に別々に行はれることになつた、双方ともに包圍の戦術が駄目になつてしまつた、ローマの本隊は例のコルヴェーを巧みに利用して敵艦に肉薄し、勇敢に攻撃を加へた、カルタゴの方では之れを防ぐの工夫を凝さなかつたから、次第に負かされて、遂に本當の退却になつてしまつた。

ローマの一戦隊は之れを追撃し、他の一隊は大急ぎで引返し、丁度海岸に押付けられ、苦戦に陥つて居つた、味方の後部隊を救援し、カルタゴ艦隊を狭撃して散々に攻めたので、ハンノーの精銳な艦隊も、寡は衆に敵せず、とうとう敗北して逃げ出した、かくてカルタゴ艦隊は總敗北になつてしまつた、之れハンノーの艦隊が全局の作戦計畫を打忘れて、ローマ艦隊の主力に打撃を加へんとせず、運送船を目掛けて追撃し、遂に孤立してしまつたことが失敗の原であらう、之れに反してローマ各戦隊が能く聯絡を取り、機敏に臨機の行動を執つたことが勝利を獲た理由である。

此戦に於てカルタゴは軍艦三〇隻を沈められ、六四隻を捕獲されて多大の損害を蒙つた、ローマの方は二四隻を失つただけである。僅々數年の練習によつてローマ海軍が、海上の強敵カルタゴ艦隊を、堂々たる海戦に於て、斯く見事に打破るまでに、進歩したことは歎賞に値する。

此勝利によつてローマは殆どアフリカ海の、海上權を占有するに至つたのである、第一ポエニ戦役數次の海戦中に於て、エクノムスの海戦は其主要なる位置を占めるもの

が軍隊召喚の命を發したのは、コンスル選舉の爲と、ローマ軍隊は夏の戦の後には一度歸國する習慣があるからとのことである、兵は抽速を尙ぶ、ローマが此機會を逸したことは甚だ遺憾とせざるを得ない。

敵地に踏留まつた執政官レグルスは、二萬の兵を指揮して徐々にカルタゴ市目掛けて迫つてゐつた。

ローマ軍の侵入に大いに驚いたカルタゴでは、直ちに各地から軍隊を召喚し、且つスバルタの名將クサンチップスに來援を求め、多數の戦象を用意して、ローマ軍をカルタゴ市外のチュニスに邀へ撃ち、大に激戦して油斷したローマ軍を散々に打破つた、カルタゴの精銳な騎兵と、象の巨足に踏破ぶられてローマ軍は大敗し、大將レグルスも捕へられ、免がれてクルベアに立籠つた者僅かに數千人。

此敗報に接したローマ政府は大に駭き、二百隻の軍艦を急派して、からうじて生存者を救出すことを得た、ローマ軍のこの敗北は、エクノムス海戦の勝利に、氣驕つてカ

ルタゴを侮り、多少油断した結果に相違ない。斯く一勝一敗、ポエニ戦役は何時果つべきか、目當ても附かない有様であつた。

(八) ローマの逆境

チエニスに於けるローマ軍の敗北は、戦運ローマに非なるの魁であつた、今後各種の不運がローマ軍に續々として現はれるのである。

幸にしてクルペアに残兵を救出したローマ海軍は直ちに歸路に就いたが、先に勝利を得たエクノムス岬の東方で、俄に暴風に出遭ひ、大損害を蒙つた、幸に免かれ得た軍艦僅かに八十隻のみ、かくてローマの遠征軍は、海陸ともに全滅の不幸に陥つた次第である。

重なる失敗にローマも大に弱つた、人の眞價は不幸災厄中に發揮せられる如く、大國民たるローマ人の偉大も、かゝる災厄に遭遇して能く發現せられた、國民的精神とし

てローマ人程、不撓不屈の氣象をよく發揮した者は、歴史上稀に見る所である。

困難の中にあつてローマは翌年更らに二二〇隻の新艦を造り、殘艦を合せて三百隻を以て再び攻勢をとり、シシリイ北岸に在るパノルムスを襲撃し、海陸より包圍して難なく之れを降した、カルタゴは其根據地の一を失ひ、今はシシリイ西端のリリベウムを残すのみとなつた、時に紀元前二五三年。

パノルムスの勝利に元氣を恢復したローマは、間もなく又もや一大不幸に遭遇した、パノルムスより歸路に就いたローマ艦隊、再び暴風に出合つて其百五十隻を失つたのである、かくローマ艦隊が度々暴風に大損害を蒙つたのは、未だ海軍に熟しなかつた結果である、特に司令長官に名將を得なかつた爲である、ローマは政治上の理由から屢々海軍の司令長官を更へたが、之れ海軍を陸軍と同一視した過誤である、海軍には特種の熟練を要することに氣が附かなかつたのであらう。

引續き二度まで大損害を蒙り、尙開戦後己に十年餘、經濟上にも多大の打撃を受けて

殆ど力も盡き、海軍の再造は甚だ困難であつた、然し国力の疲弊はカルタゴとても同様であつた、商業を主とするカルタゴは戦争のために蒙る経済上の打撃は、寧ろローマよりも大であつた、よつて元より持久力を缺くカルタゴ政府は、バノルムスの敗北により急に媾和を欲し、チュニスの戦に虜としたローマの將レグルスを放還して、和睦の爲めに盡力せしめた。

傳説によれば、レグルスを放還するに當つてカルタゴ政府は、彼れに、

「ローマ、カルタゴ媾和のために十分盡力すべきこと、

媾和成立すれば彼れを放免すべし、

若し和睦成立せざる時は再びカルタゴに來つて捕虜となるべし」と

堅く誓はしめた。

彼れレグルス放たれてローマに歸り、元老院の會議に臨んで、約により媾和のことを計るかと思の他、

カルタゴが今や甚だしい疲弊に苦しんで居る實狀を詳細に陳述し、最早永くは堪え得ざること疑ひなく、故に媾和はローマの得策にあらず、尙大に攻勢をとつて全くカルタゴを屈服せしむべし」と盛に戦争繼續を主張した、元老院はレグルスの言を然りとし、其意見に従ふことに決した。

レグルス大に喜び「約によつて余は再びカルタゴに行くべし」と家人にも面會せず出發せんとした、人々大に驚いて、幸に敵手を脱し得たるに何んぞ再び進んで敵の手に捕虜となることを要すべきやと、頻に止めたが、彼れレグルス「ローマ人は決して信義を破るべきでない和成らざる以上は約に従つて敵國に行くことが、之れ余が國家に奉ずる義務である」と決然として直ちにカルタゴに到り、敵人のため死刑に處せられたとのことである。

事實の眞偽は判然しないが、當時ローマ人の意氣は正に斯くの如きものがあつたであらう、恰も我が武士道の精華を見る如き感がある、人は信義を以て立つべく、國家も

信義を守つてこそ眞に興起するのである。

ローマ、カルタゴ双方共に疲弊を極めて、爲めに交戦一時中止の姿であつたが、間もなくローマは再び勇氣を奮ひ、シシリーに於けるカルタゴの根據地、島の西端に在るリリベウムの攻撃に着手した。

リリベウムは要害極めて堅固であり、良港を控へてカルタゴ本國からの救援が自由であつたから、陸上包圍のみでは、ローマ軍如何に勇戦しても、到底陥落すべくも見えなかつた、爰にローマは三度海軍の必要を感じ、多大の努力を拂つて又三百隻を新造し、直ちにリリベウムに廻航して港口を封鎖した、日露戦役に際し、我が海軍が旅順港口の封鎖を企て、勇敢なる閉塞隊の行爲は、廣瀬中佐の武名と共に世に名高き物語りであるが、既に二千年前ローマ海軍によつて敵港閉塞の例は開かれて居つた、ローマ海軍は港口に巨石を投じて、カルタゴ軍艦の出入を妨げんとしたが、十分の効果はなかつた様である、港口封鎖は甚だ難事業であつて、到底素人には分らないことであらう。

カルタゴ海軍は相更らずローマの封鎖を破つて、屢々軍資を輸送し、城中のカルタゴ兵は能く防戦した、ローマも次第に軍を増して、遂に十萬の大軍を以て長圍の計をなした。

リリベウムの爭奪は實にシシリーに於ける兩國の勢力を決する重大なる意義を有つてゐたから、双方ともに死力を盡して戦つた、ために攻圍五年の長さ、ローマは終に其目的を達し得ず、カルタゴは最後までよく防戦し、城將ハミルコは大に勇名を擧げた。

此のリリベウム攻圍中に、ローマ海軍は亦もや重なる失敗と不幸に出會つた。

紀元前二四九年ローマはリリベウムに援軍を送らんと、二萬の兵を運送船に乗せ、軍艦二一〇隻を以て之れを護衛し、執政官クラウヂウス全軍を指揮して、シシリー北岸を西進し、リリベウムを去る十里ばかりのドレバヌム沖に差掛つた時、カルタゴ艦隊

がドレバヌム海岸に碇泊することを知つたので、不意に之れを襲撃せんと欲し、却つてカルタゴの司令官アドヘルバルのため逆襲され、ローマ艦隊は海岸の淺瀬に壓迫されて、活動の自由を失ひ、散々に負かされた、逃れ得た軍艦僅かに三十隻のみ。此の敗報がローマ人を驚かしつゝある時、再び重なる悲報にローマ人は顛倒せんばかりに哀しんだ。

同じく援軍を送る目的を以て執政官の一人ユニウスの率ひた一二〇隻の艦隊、八百隻の運送船は、シシリ南岸を迂回して、エクノムス岬に達せし時、カルタゴの將カルタロの率ひる一艦隊に出會ひ、忽ち襲撃されたので、ローマの艦隊は運送船護衛の必要上、速くも海岸に沿ふて逃れたから、幸に損害はなかつたが、數年前と同じ場所のカマリナ岬に達した時、アフリカ方面から俄に吹下すシロツコ風の襲ふ所となつて、ローマ艦船は殆ど全滅的の難破を蒙つた。

ローマが窮餘の努力を以て造り上げた艦隊は、ドレバヌムの敗戦と、カマリナの難船によつて全く水の泡と消えたのである、流石の剛毅なローマ人も此失敗と不幸には茫然自失せざるを得なかつた、最早や軍艦建造の資力も盡き、戦を続けるの勇氣さへも失はれんとした、紀元前二四九年はローマにとつて殆ど破滅に等しい厄年であつた。

一方カルタゴでは數回の勝利に、多少元氣を恢復し、特に此際名將ハミルカル、カルタゴ人呼んでバルカス即ち雷電將軍、後ちの世界的偉傑ハンニバルの父である、大人物が現はれて、カルタゴ海軍を指揮し、頻りにシシリ沿岸のローマ同盟市を脅かし、次でイタリヤの沿岸にも出沒してローマ人を驚かし、又は傭兵を訓練し、規律を厳にしてローマ陸軍に當るに足る新軍を造り、或はリリベウムの附近なるエレタ山上に軍を配置して、ローマ包圍軍の行動を監視し、以てリリベウムを救はんものと企てた。ハミルカルの活動は甚だ大膽で、最も機略に富み、ローマにとつて由々しき強敵であつた、先にはカルタゴが大に窮して和を欲した仕末であつたが、今はローマが全く力

盡きんとする窮狀に陥つた、開戦後己に二十年に近く、幾多の人命と多大の財を失ひ、國家の力は將に消盡せんとし、しかも前途勝利の見込はなく、敗北の不幸を見るよりは寧ろ耻辱を忍んでも、今に於て講和を求める方が賢明なる方針であるとも考へられたであらう。

然しローマ人のねばり強さは普通ではなかつた、不撓不屈の精神は眞に文字通りであつた、如何なる失敗も、幾多の不幸もローマ人の意志を挫折せしむることは出来なかつた。

主家尼子氏の再興を企て、百難屈せず「憂きことの數ある程ぞ恵なる、限りある身力のためさん」と最後まで志を改めなかつた山中鹿之助の精神は、或はローマ人と相似たるものであつたらう。

幸にしてカルタゴ政府の活動は相變らず不活潑であつた、名將ハミルカルあるも其の驥足を伸ばすを得ざらしめた、且つローマを侮つて再び海上に力を伸ばし得ないものと思つて居つた、故にカルタゴ海軍は時々イタリヤ海岸に出没して、多少の掠奪を行ふ位のもので、シシリーに對して此機會にローマ軍を壓倒するの策に出でなかつた、若しカルタゴがドレバヌムの勝利を巧みに利用して、十分に海上権の確立を計つたならば、地中海は永くカルタゴの海であり、ローマは世界的帝國を建設するを得なかつたであらう。

其後數年間ローマ軍は矢張り、リリベウムの包圍を繼續した、而しカルタゴ海軍に妨げられて、十分に援兵や軍資を送ることが出来なかつたから、戦況は停滯して何時陥落するとも見えなかつた。

逆境に沈淪すること數年、よく之れに堪えたローマは再び花咲く春に會するの機を得たのである。

(九) エガテスの海戦 (カルタゴの屈服)

六年間の休戦状態は再びローマ人に奮起するの力を興へた、海上権を占有するの他に勝利を得るの見込なきことを愈々痛切に感じたローマは、最後の努力を以て又々海軍復興に盡力した、とは云へ政府の財政は最早涸渇し、漸く悪貨幣を造つて一時を糊塗して居る仕末であるから、軍艦建造の資力はあるべくもない、そこで人民に命令し、特に富豪商人に強制して、各自に軍艦を造つて献上せしめた、かくて兎に角二〇四隻の軍艦は出来上つた、時に紀元前二四二年、其年の末ローマの執政官ルタチウス・カッルス、此のローマ人の血と脂の結晶である新艦隊を率ひて、シシリーに出陣、カルタゴ人の不意を襲ふてドレバヌムを攻略した。

其翌年ハミルカルの率ひたカルタゴ艦隊は、リリベウムに軍資を送るため、其前方のエガテス群島まで来た時、之れを知つたローマ艦隊は大膽に攻撃を開始して、所謂エガテス島の海戦となつた。

時に風力相當に強かつたが、ローマ海軍も數回の失敗に餘程訓練せられて、軍艦の操縦もカルタゴに遜色なきまでに上達した、風の静まるのを待つて居れば、敵が入港してしまふから、どうしても餘裕を興へることが出来ない、二百隻のローマ艦隊は單横陣を造つて、勇敢にカルタゴ艦隊目掛けて突撃した。

カルタゴ海軍に在つては第一ポエニ戦役中、何等其進歩の認むべきものがない、然るにローマ海軍に於ては、この二十年間に不斷の改善と訓練とを加へて居つたから、エガテス島の海戦には最早決して吳下の舊阿蒙ではなかつた、カルタゴはそれに氣附かづ、相不變ローマの海軍を侮つて居つたから、今此の風浪を犯しての大膽な攻撃に出會ひ、おどくも大敗を蒙つた、名將ハミルカルも油断のために、勝利の榮冠をローマのカッルスに興へたわけであつた、カルタゴ軍艦五十隻は沈没、七十隻は兵士一萬人と共に捕獲され、百二十隻を失つたのである。

しかしカルタゴの蒙つた損害は、先にローマがドレバヌムに受けた打撃よりも僅少であつた、にかゝはらずカルタゴ政府は此敗戦を以て、最早戦を繼續するの勇氣を失つ

た。

力が全く盡きたのではない、戦を續くる氣力を喪失したのである、カルタゴの政府はローマの様に健實ではなかつた、實權を握る閥族は國家を憂ふるよりは、寧ろ自分の利害に急であつた、戦争が遂に自己に利益を齎さざるばかりでなく、反つて損失を蒙るに至ることを悟つた彼等は、一度び屈服することが、國家の將來に恢復し難い致命傷であることを惟はず、唯目前の利害のみを考へて、和を求むるに急いだのである、且つ財政は困難を告げ、商業は十分に行はれず、傭兵は給料の不拂を怒つて反亂を企てるの怖れあり、カルタゴが和を求むるに急であつたのは無理もない事情でもある、よつてエガタスの一敗を機會に遂に和をローマに求めたのであつた。

ハミルカルは媾和に反對したが、政府の命により不本意ながら、全權を委任されてローマのカツルスと談判を開始した。

ローマの提出した條件は甚だ過酷であつたが、ハミルカルの折衝宜しきを得、且つロ

ーマも随分疲弊して居る場合でもあり、双方妥協して條約は成立した。

カルタゴはシシリ島を全く放棄すること、多額の償金(三千二百タレント、我が八百萬圓位か)を十ヶ年賦でローマに支拂ふこと。

二十四年間に亘つた第一ポエニ戦役は斯くカルタゴの敗北を以て終りを告げた。

地中海のクインであつたカルタゴの海上權は茲に大打撃を蒙り、ローマの勢力が海上に伸張するに至つた、海に敗れたカルタゴは、其勢力次第に衰微し、終には國家の存立をも失ふに至り、海に勝つたローマは之れに反して次第に隆盛を加へ、終に世界的大帝國を建設するに至つた、實に海權の消長は國家の消長である、古代のローマ史、近世のイギリス史、ともに其明瞭なる實例を示す。

(10) ポエニ戦役の終局

第一ポエニ戦役はローマの勝利を以て終局したが、之れしかしローマ、カルタゴ兩國

勢力の衝突を全く解決したわけではない、共に疲れて一時休戦した位のものである、力を養ひ、刃を磨き、以て再び雌雄を争ふの日は決して遠くはなかつた、ペルシヤとギリシヤの衝突がペルシヤの全滅を以て終了した如く、ポエニ戦役も何れか一方が地上に跡を断つに至るまでは止まないものである。

さて第一ポエニ戦後ローマの發展は誠に破竹の勢であつた、間もなくコルシカ、サルヂニヤの兩島を占領し、多年ローマの國敵であつたガリヤ人を打破つて、北イタリアを平げ、東方にはイリリヤの海賊國を征服し、進んでギリシヤ各邦、シリヤまで其勢力を伸張した、海權を握るまでのローマの發展は牛の歩みの如くに遅々であつたが、之れを占有せし後は駿馬も及ばざる如くに急速であつた。

第一ポエニ戦役の終つた紀元前二四一年を去る二十數年、紀元前二一八年に再びポエニ戦役は開かれた、第一ポエニ役の勇將ハミルカル・バルカス、カルタゴの屈辱に憤慨し、政府の力を借らず、獨力ローマに復讐せんことを企て、イスパニヤを占領して

之れを策源地とし、拮据經營兵を練り、軍資を蓄へ、其機を覗つて居つたが、不幸準備中に死し、其子ハンニバル父の遺志をつぎ、遂に進んでローマに開戦するに至つたのである。

彼れハンニバルは世界史上稀に見る英傑、獨力ローマと戦ふこと十八年、殆どイタリア半島を蹂躪し、一時ローマをして滅亡に瀕せしめたが、天運かなはず、紀元前二〇二年にザマの一戦、ローマのスキピオに勝利の榮冠を得られて、第二ポエニ戦役亦ローマの勝利に終つた、此役即ちハンニバル役が、ポエニ戦役中最も異彩を放ち、大偉人に對する大國民の奮闘、血跳り、肉沸き手に汗を握らしめるの觀ある大會戦であるが、事は全然陸戦に限られてゐるから、之れは陸戦史に譲る、但し英傑ハンニバルをして終に其志を遂げ得ざらしめた根本の原因は、彼れハンニバルが海軍を有しなかつたことである、若しハンニバルがチレニヤ海の家權を握つて居つたならば如何であつたらうか、恐らく世界の歴史は吾人の想像を絶するの結果を來たしたことであらう、

成功の英雄に對し世人の賞讃は絶大であるが、吾人は失敗の英雄なる彼れハンニバルに對し一掬の涙なきを得ないのである。

第一ポエニ役に一度破れしカルタゴは、ハンニバルの偉材を以てしても、ローマに打撃を與へることを得ず、却つて一層の沈衰に陥つた。其後五十餘年間猶カルタゴは商業の利を以て餘喘を保つたが、紀元前一四九年至三度びポエニ戦役は開かれて、此度は僅かに三年、カルタゴ全市民七十萬、必死の奮闘も其功なく、紀元前一四六年、ローマの將小スキピオをして、カルタゴ壊滅の功名を成さしめ、數百年間地中海に榮えしフェニキヤ人の代表國カルタゴは、永久に其名を地に委ねて、爰にポエニ戦役は全く終りを告げたのである。

アクチウムの海戦

(一) ローマの内訌

「外敵滅びて内紛生ず」とは支那人の言葉であるが、實際歴史上の眞理であつて、外に恐るべき敵の存在する間は、國民上下一致して、其敵を仆すために、全力を盡すも、一朝勝利の榮譽を荷ひ、國家發展の光榮に輝く時、爰に此言が實現するの機會に達するのである、かのギリシヤが、最も懼るべき外敵、ペルシヤと戦を交ること數十年、其間アテネ、スパルタ等の諸國よく一致して、ペルシヤと戦つたが、最早外敵の虞れなきに至るや、間もなくギリシヤ諸國間に、大内紛を起し、三十年に亘る、所謂ペロポネスス戦役となり、次でコリント戦役起り、内紛又内紛、アテネ、スパルタ、テーベ等の諸國かたみに覇權を争ひ、結局何れも衰微して、遂に北方の強國マケドニヤのために併吞せられ、滅亡の非運を見るに至つた、鵝蚌の争は終に漁夫の利となつたの

である。

偕てポエニ戦役三回に亘り、百数十年を費して、海上の強敵カルタゴを倒し得たローマは、同時に西にはイスパニヤを征服し、東はギリシヤを従へ、シリヤを破つて、東西千二百里に及ぶ地中海は、今や全くローマの湖水となり、當時の文明世界を悉く併呑した、ローマ大帝國は、こゝに怖るべき外敵を有せざるに至つたのである、東方には古代ペルシヤに代つて興つたバルチャあり、北方には新たにゲルマニ蠻族の勃興して、次第に蠢動を始めたといへ、是等はローマの勢威に比して、殆ど同日に談ずべき敵ではなかつた、外敵滅びて内紛生ずるの通則は、茲に發生するの時期に達したのである。

紀元前一四六年、ローマの強敵たりしカルタゴ市が、十七晝夜に亘る火炎に包まれて、全く灰燼となつてから、未だ十年ならず、ローマ國內には、閥族黨と貧民黨の、社會的階級闘争發生し、之を未然に改革せんと企てた、グラックス兄弟は、公然閥族黨の

殺害するところとなつて、ローマの國家社會は、正に擾亂の巷となり、紛争は日を逐ふて悪化した、加ふるに政治は腐敗し、軍規は紊れ、叛亂續出し、爲に元來極めて健全であつた、ローマの國民的共和政治は、事實上終滅して、茲に武人跋扈の時代となるに至つた、時は紀元に先つ一世紀頃。

かゝる際にマリウス、スラの兩將現はれ、共に數多の武功を以て名を擧げ、各々貧民、閥族の黨派を率ひて、ローマ市内に流血の慘を呈するに至つた。

次でケーザル、ポンペイウスの兩巨頭出で、富豪クラッスと結んで、共に第一回三頭政治を創め、ローマの政權は、彼等巨人の掌中に左右せられることになつた、しかし間もなく、古今に絶する偉人、彼れケーザルは、ポンペイウス等の反對黨を倒し、悉く内紛を鎮め、幸にしてローマ多年の擾亂は、ケーザルの手によつて將に解決せられんとした時、即ちローマの共和政治は、事實上帝政たらんとした時、不幸ケーザルは毒刃の仆す所となり、ローマは又しても紛擾の襲ふ所となつた。

時にケーザルの養子オクタヴィヤヌスあり、天稟の偉材と、養父の威名により、未だ若年なりしも、よくケーザルの遺志をつぎ、ケーザルの友人、有名なる雄辯家マルクス・アントニウスと結び、且つ老將軍レビズを加へて、爰に第二回の三頭政治を組織し、間もなくギリシヤのフィリッピに、父の讐たるブルッス、カシウスの徒と決戦し、忽にして彼等を滅ぼし、ローマの天下は再びオクタヴィヤヌス等三人の、掌握する所となつた、時に紀元前三二年、然し権力の分立は長く続くものでない、第一回三頭政治が、クラッススのバルチャに戦死するや、幾何ならずして破綻し、ケーザル、ポンペイウスの分争となり、ファルサルスの戦に、ポンペイウスの敗死するや、ローマの天下はケーザル一人の手に左右せられる様になつた、其如く第二回の三頭政治も、以てローマの天下を安定することは出来なかつた、フィリッピの戦後、三人は各分掌を定めて天下を三分した、オクタヴィヤヌスは、イタリヤ以西の全部を、アントニウスは、ギリシヤ以東を、レビズスはアフリカだけ。

間もなくレビズスは己が領分の少なさに不平を懷き、シシリ島を併領せんと欲するや、忽ちオクタヴィヤヌスの怒りにふれて、却つてアフリカ全部をも奪はれてしまつた、藪をつゝいて蛇を出したのである、勿論レビズスは三頭政治の一員たる位置をも失ひ隠退した、従つてローマの天下は、東のアントニウス、西のオクタヴィヤヌスと、二分の形勢に變じた。

(二) オクタヴィヤヌスとアントニウス

兩雄並び立たぬは古今の通則、而已ならずオクタヴィヤヌスが、ケーザルの志を嗣いで、天下一統の志あるに於てをやだ、ローマの歴史に於て、天下分目の關ヶ原たる、東西兩雄の戦は、愈々これから開かれんとするのである。

さてアントニウスは、已れの配下である、東方各地を視察しつゝ小アジアに到り、此所に當時エジプトの女王であつた、クレオパトラを召喚した、彼女は西洋史に於ける

揚貴妃である、妖魔である、ナイルの蛇である、彼女の魔力は、古今の英傑ケーザルさへも、危ぶく其生命を失はしめられんとしたことがある、危険なるかな彼れアントニウス。

クレオパトラ女王が先にブルッス、カシウスの徒に多少の援助を與へしことあるを以て、其事を責問せんと欲して、アントニウスは此毒蛇を、彼れの居りし小アジアのキリキヤに招き寄せた、クレオパトラは直ちに之に應じて、アレクサンドリヤを出帆し、キリキヤのタルススに入港した、彼女の乗船は、實に古今の美を盡したものであつた様だ、王侯の服たるチルの紫を以て帆を造り、橈は總て銀、其他の裝飾は推して知るべしである。

案の如くアントニウスはクレオパトラの餌食となつた、毒蛇に魅せられては樹上の鳥も、免がるゝに途がない、一言よくローマ數十萬の市民を、奮起せしめた彼れ大雄辯家も、蛇にかゝつては一言もなかつた様である。

アントニウスは進んで東方チグリヌ河に達し、ペルシヤに代つて國を興した、バルチヤと此所に戦つたが、脆くも敗北し、ローマの國旗をも奪はるゝの耻辱を受けて、悶悶の念やるせなく、慰安を求めて、エジプトに歸り來つた、蛇の術中に陥るべくエジプトに來たのである。

彼れはクレオパトラの願のまゝに、ローマの領土を恣に彼女に割き與へた、彼れの正妻たるオクタヴィヤヌスの姉オクタヴィヤには、正式に離婚狀が發送せられた、是れオクタヴィヤヌスに對する挑戰狀である、宣戰の布告である。

オクタヴィヤヌス大に怒り、民會をして、アントニウスはローマの公敵であることを決議せしめ、直ちに海陸の大軍を用意して、親らは陸軍を率ひて東方に進發した。時にアントニウスは、クレオパトラ女王と共に、小アジア沿岸を巡遊して居つたが、オクタヴィヤヌスの出兵を聞いて、直ちに防戦の手段をとり、東方服屬諸國の兵を集めて、ギリシヤに送つた、アントニウスの軍即ち東軍は、歩兵十萬、騎兵一萬二千、

軍艦二百數十隻、中々の大勢力であつたが、然し烏合の衆たるを免れ得なかつた、尙アントニウスは、味方の内に、已れを暗殺せんとする陰謀あるかと疑ひ、食事毎に必ず毒味せしめたとのことで、人心の和せざる以て知り得べきである。

オクタヴィヤヌスの西軍は、歩兵八萬、騎兵一萬二千、軍艦二百五十隻、數に於て少しく東軍に劣るの觀あるも、軍の内容に至つては、到底東軍の及ぶべきものでなかつた、のみならず西軍の艦隊司令官は、オクタヴィヤヌスの親友アグリッパで、彼れはローマ海軍に於ては第一の名將であつて、先にセクスツス・ポンペイウスの率ひる海賊船を、シシリー附近で屢々苦しめ、特に紀元前三六年には、シシリーの北岸のナウロクスで、セクスツスの三百隻より成る大艦隊を遂に全滅せしめたことがある、此の交戦に於て彼れは海戦上重要な幾多の改良を、ローマ海軍に加へた、ポエニ役時代の海軍とは格段の進歩を加へた様である、敵艦の突撃を防ぐために、角材を艦側に備へ附けるとか、甲板上に速射投石機を据附け、石彈を發射するとか、或は火箭を放つ

て敵艦を焼討する如き、防禦及び攻撃の手段が餘程進歩した、加ふるに軍艦の操縦も、甚だ上手になつて、輕快な行動を以て、機敏に敵の隊形を混亂せしむることも出来る様になつた、かゝる經驗と戦功とを有する良海將アグリッパが、オクタヴィヤヌスの海軍を帥ひて、アントニウスに向つたのである、従つて海上に於ける東西勝敗の數は豫め知り得べきであつた。

(三) アクチウムの會戦

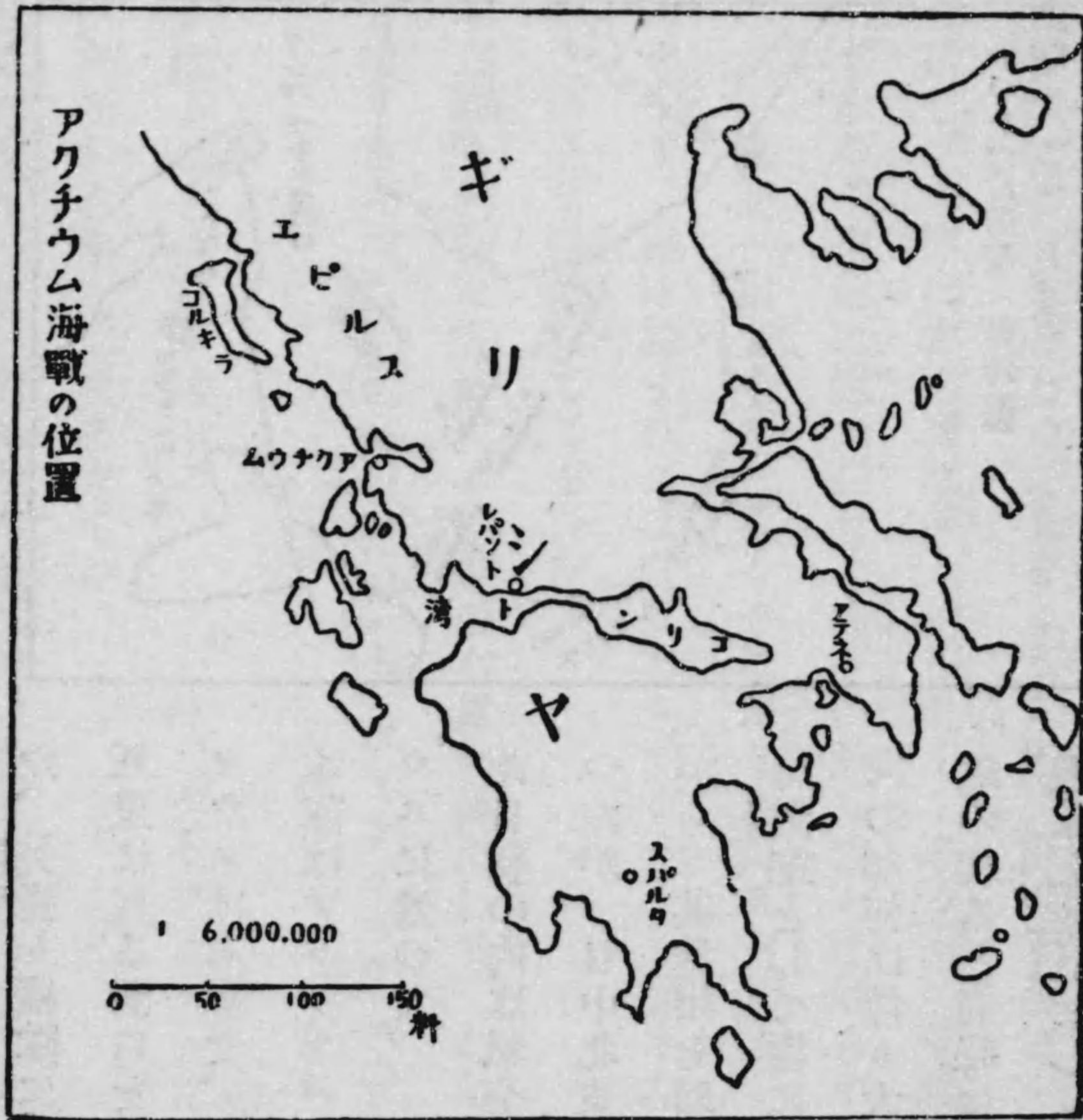
アントニウスは自己の陸軍が、敵の陸軍よりも優勢であることを知り、陸上に於て、決戦せんと欲したが、クレオパトラ女王は、敗戦の場合に逃げ出すには、海戦の方が便宜であることを考へて、大に海戦を主張した、始めから敗戦を豫想して居つたのである。

クレオパトラの希望は納れられて、アントニウスは、陸戦は單に小競合に止め、海上

で雌雄を決せんとの、戦略を執ることとした、勿論是れ誤つた戦略ではない、先づ海上の敵を破つて、本據地エジプトとの交通を安全にすることは、アントニウスとしては、最も當を得た方略である、且つ敵軍の後方聯絡を斷つことを得て、オクタヴィヤヌスの陸軍を孤立せしめ、従つてアントニウスの勝利は疑ひなく、ローマの天下は彼れの手に入るべきであつた、然しながら彼れアントニウスに、海戦によつて勝利を占め得るの、自信ありしか、否や、甚だ疑はしいものである。

茲に愈々天下分目の海戦は演ぜられることになつた、所はギリシヤ西岸アンブラキヤ灣の入口、アクチウムの沖に於て、灣口の南岸にはアントニウスの陸軍、北岸にはオクタヴィヤヌスの陸軍が對陣して居つた、時は紀元前三一年の九月二日、我國では、崇神天皇崩御の前年であつた。

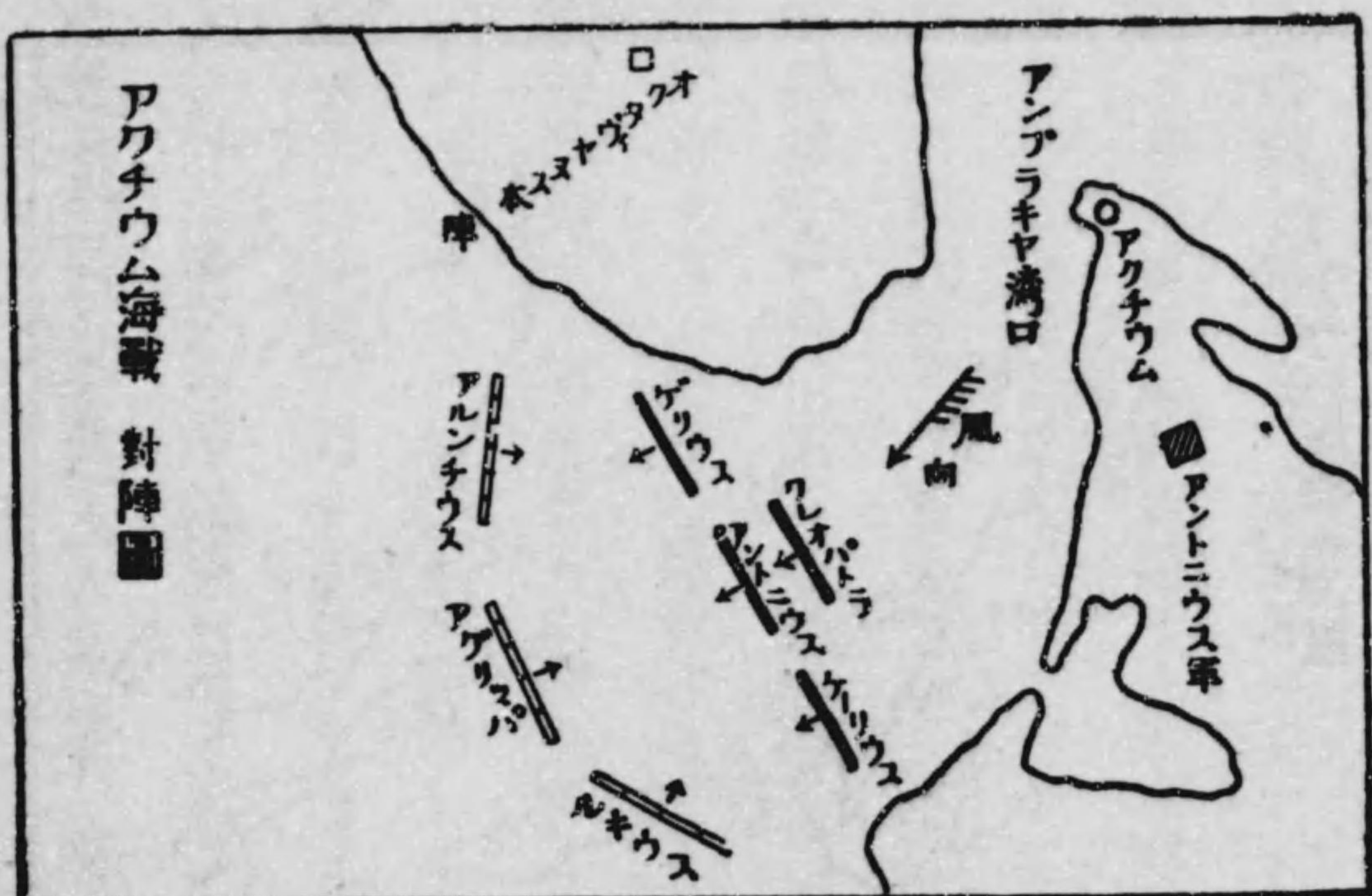
アントニウスの率ひる大艦一七〇隻、クレオパトラの指揮する、エジプトの輕快なる小艦六〇隻、合せて二三〇隻、灣の入口一杯に、前後二列に陣を布き、前列は三戦隊



アクチウムの海戦

より成り、右翼はゲリウス司令官、左翼はケイリウス之を率ひ、中央本隊はアントニウス、總司令官として兼ねて全軍を指揮し、クレオパトラは豫備隊として後列に陣した。

アグリッパの率ひる西軍は約二五〇隻、艦數は東軍と殆ど等しかつたが、大體に於て小艦が多かつ



た、矢張り横隊に陣し、左端より右端まで、約五里に亘る灣口を塞いで、三戦隊に分けた、ルキウスは右翼を、アルンチウスは左翼を、中央本隊はアグリツバ自ら之を指揮して、アントニウスに當つた。

此日朝の内は風全く凩ぎ、海上極めて静穩であつたが、日中北東風吹き始め、丁度東軍の背後から、其進出を助ける様に思はれた、しかし當時猶主として權によつて行動した艦隊には、風の如何は餘り大した影響を及ぼさなかつた。風の起ると同時に戦は始まつた、西軍は、敵の艦隊を分散せしめて、之を個々に破らんと企

て、それには廣き海上で交戦することが、得策であるから、敵艦隊を前方に誘ひ出さんと欲し、西軍の左右翼は忽ち進出して、各々敵の兩翼に薄つた、東軍の兩翼が之に應戦するや、次第に退却した、術計にかゝるとは知らず、東軍どん／＼逐ひ掛けて、前方廣い海面へ出て來た、そこで得たりと西軍右翼は、敵隊の左翼を包圍せんとする形勢を示す、敵は挟まれては叶はじと、ずん／＼愈々左方へ陣形を伸ばし、遂に敵の本隊とは全く分離してしまつた。

西軍左翼も同様な方法で、敵隊の右翼を誘出して、之を次第に北方に壓迫し、本隊より分離するに至らしめた、従つて東軍アントニウスの本隊は、全く孤立するに至つた。

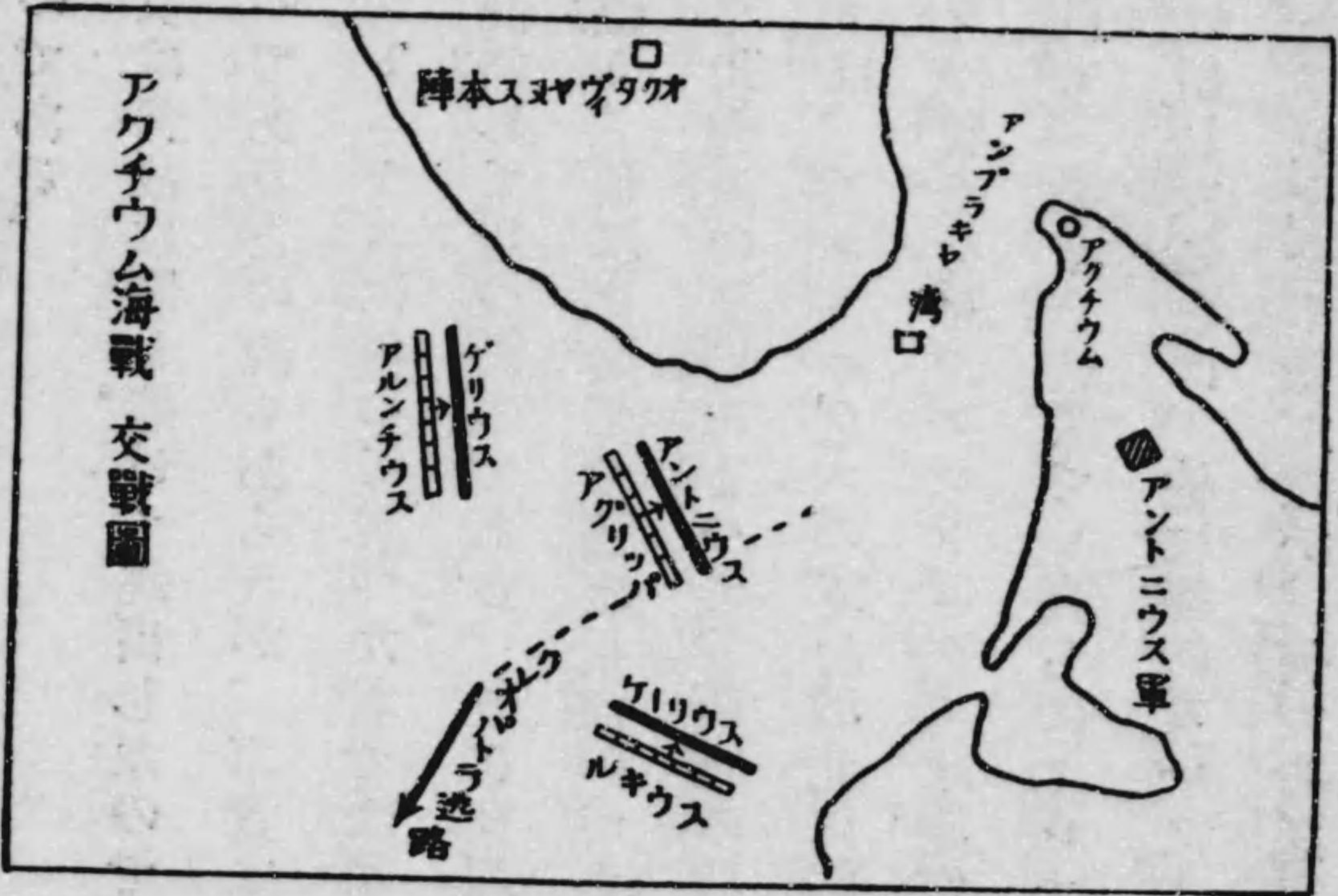
時分はよしと西軍本隊のアグリツバは、忽ちアントニウスの本隊に肉薄し、之を側面及び前面から激しく攻め立てた。

西軍は輕快な小艦を巧みに操縦して、或は敵隊の前面に現はれて、忽ち大石彈を投射

し、或は忽然背面に廻つて、敵の油断に乗じ、鐵板で造つたハルバックスと稱する釣橋を、敵艦に投げ掛け、之を引寄せ一齋に敵艦中に躍り込み、奮闘して之を捕獲した、爲めにアントニウスの艦隊は、大分混乱を來たしたが、併し猶勇敢に奮闘しつゝあつた。

(四) アントニウスの敗北

此時東軍後方に豫備隊として控へて居つた、クレオパトラ女王の率ひる六十隻のエジプト艦隊は、俄かに帆をあげて前進を始め、方に苦戦してゐる味方本隊の左側を通過し、ローマ艦隊の側面に進出した、若し此の新手の艦隊が、ローマ艦隊の側面を勇敢に攻撃し、アントニウスと共に、包圍の形勢を示したならば、アグリッパの西艦隊は非常な苦戦に陥り、或は西軍の敗北となつたかも知らなかつたのである、然るにクレオパトラは敵味方の意表外に出る行動をとつた、アントニウスは今にも、エジプト艦



アクチウムの海戦 交戦圖

隊が敵の側面を攻撃すること、豫期して居つたのに、思ひもよらずエジプト艦隊は、追手に帆を張り六十隻、一齋にどん／＼進出し、戦線を潜り抜けて脱走し、エジプトに歸つてしまつた。

關ヶ原の戦に於て、西軍の島津勢は、西軍愈々非なりと見るや、敵陣中を衝き抜け、勇敢に奮闘して、薩摩まで逃げ歸つた、遁げるのは後に限つたものであるが、敵に後を見するとの言葉のある通り、然るに前に遁げ、敵軍を割つて、脱走したことに於ては、兩者よく似てゐる、但しクレオパトラは戦はずに走つ

たのである。

彼女は何故に戦を避けて逃出したのであるか、或は女子であるから、戦を恐れて遁げたのであるとの説もあらうが、事實はさうではなかつた様だ、彼女は元來實意を以て、アントニウスに従つて居つた者ではない、自己の安全を謀るための手段として、彼れを籠絡して居つたのである、故に此場合に臨んで、最早アントニウスは駄目であると見縊り、彼れを棄てて逃出したのである。

小早川秀秋の裏切によつて、西軍の敗北となつた關ヶ原役の如く、クレオパトラの裏切りは、アントニウスの軍を敗北に歸せしめた、而已ならず何たる醜態ぞ、クレオパトラの脱走を見たアントニウスは非常に驚き、ローマの天下も、戦の勝敗も、男子の面目も、全く忘れ果て、直ちにクレオパトラの蹤を追蹠した、戦ひ最中に司令長官が逃げ出したことは、他に類のないことでもあるまいが、一女子を追掛けて、逃出したことは史上全く類がない、何たる醜名を流したことをぞ、彼れの如きは史上稀に見るの

意氣地なしである、元來彼れアントニウスは、斯様な耻漢ではなかつた様だ、クレオパトラの魅力に掛かつて此の仕末、實に怖るべきである。

司令長官を失つた東軍、忽ち大に混亂を來たしたが、併し首將を失つても彼等はローマ人である、アントニウスに對する不平はあつても、武士たるの名譽のために尙暫らく勇敢に奮戦したが、アグリッパの兼ねて用意してあつた、發射機によつて燃料を投げ込む焼討の計畫にかゝつて、到底力及ばず、方に日没ならんとする頃、東軍の艦隊は殆ど全滅に歸し、西軍の大勝となつた。

陸上に陣して居つたアントニウス方の陸軍は、味方海軍の此の敗戦を見て、爲す所を知らず、全部降服してしまつた、元來アントニウスに忠信を有せる軍隊でなかつたのであるから無理もない。

かく一日の戦闘に、海の勝利は全軍の勝利となり、ローマの天下は西軍オクタヴィヤヌスの手に落ちた。

後日オクタヴィヤヌスは、アントニウス軍の陣して居つたアクチウムの海岸に、アポロの神殿を營み、五年毎に其大祭を行ひ、古のオリンピック祭に倣つて各種の競技を舉行し、アクチヤングームと名附けて、此のアクチウム海戦の勝利を記念したとのことである。

さてもクレオパトラは無事アレクサンドリヤに逃げ還つた、續いてアントニウスが跡を追つてやつて來たので、彼女は驚き事面倒とでも思つたか、侍女をしてクレオパトラは既に自殺したと偽り告げしめた、之を聞いたアントニウス大に悲しみ、戦には負け、女王には先だれ、生きてかひなき我身かなと嘆じたことであらうか、己れも跡を追ふべしと、直ちに彼れは自殺してしまつた。

三頭政治の一員として、一時はローマの天下に勢を振つた、彼れアントニウスの末路としては、實に憫れなものであつた、アントニウス方に絶命せんとする時、偶然クレオパトラ女王の猶生存せることを聞いて、急ぎ彼女の許に連れ行かれんことを願つ

た、侍女も不憫に思ひ、彼れを助けてクレオパトラの室に運び入れたので、彼女の腕に抱かれて、息絶えたのは、せめてもの慰めであつたかも知れない。

(五) オクタヴィヤヌスの天下平定

アクチウム戦勝後、オクタヴィヤヌスは直ちに軍を率ひて東征し、アントニウスに従つた、ギリシヤ、小アジア等の各地方を降服せしめ、進んでアレクサンドリヤに達したが、アントニウスは既に自殺した後であつた。嘗つては協同して内亂鎮定に、生死を共にした知友の最後に、泣涕禁じ得ず、篤く之を吊つた。

女王クレオパトラは爰に亦もや最後の努力を試みるの必要に迫られた、彼女はあらゆる手段をつくして、オクタヴィヤヌスを魅惑せんとしたが、鐵石の如き彼れは遂に動かされなかつた、而已ならず彼女を捕へて凱旋の行列を飾る、分捕物の一たらしめん

と決定したので、さすがのクレオパトラも萬事休止し、かく耻辱を蒙らんよりはと、毒を用ひて自害した。毒蛇に胸を噛ましたとのことであるが、毒蛇がナイルの本物の毒蛇に生を断たれたのである、アレクサンドル大王以來長く隆へた、プトレマイオス家のエジプト王國も、彼女の醜き最後を以て、エジプトは全くローマの屬領になつた。オクタヴィヤヌスは續いて各地の叛徒を討平し、ローマの天下を統一して、盛大なる凱旋式を以て都に還つた、時に紀元前二九年。

彼れはアウグスツスの尊號を、元老院より享け、事實上ローマの皇帝となつた、かくて養父ケーザルの遺志は、オクタヴィヤヌスによつて實現せられ、ローマの世界は強大なる一人の權力者によつて統治せられる帝國とはなつたのである。

アクチウムの海戦は實に天下分目の決戦であつて、オクタヴィヤヌスをしてローマ大帝國の主人公たらしめた戦であつた、恰かも關ヶ原役の勝利によつて、家康が天下の權を握つたと東西相似たる事件である。

壇の浦の海戦

(西紀一一八五年)

(一) 傾く平氏の運命

「奢る者久しからず、げに春の夜の夢の如し、猛き者も終には亡びぬ、げに風の前の塵に同じ」

賤められし武人より身を起し、保元平治の風雲に乗じて、忽ち雲上の人となり、位は人臣を極め、富は六十餘州の半を占む、思ふて成らざるはなく、希ふて遂げざるはなし、げに史上類なきの榮華を極めた彼れ平の清盛も、專恣二十年、奢る者久しからずの天理は彼れとても避け得らるべきでなかつた。

治承四年源頼政が、始めて公然平氏に叛旗を翻えししより、運命は急潮の如く、日に月に平氏に背くに至つた。

伊豆の流人源頼朝は、雌伏茲に二十年、天運再び廻り來つて、源氏の頭領として白旗

高くかゝげ、諸國の兵を靡くや、かねて機の到るを待ちし源氏の兵はもとより、清盛の横暴に快からぬ平家の方人まで、集る者引きも切らず、源氏の勢忽ち東國に振ひ、富士川の對陣、水鳥の羽音にも源氏の勢現はれしにや、維盛十萬の平軍矢合もせず追ひ散らさる。

太政入道清盛、悔いも及ばず、頼朝の首を刎ぬべかりしものを、げに怒るも詮なし、將に落日ならんとする平家の運命。

「今生後生の孝養には必ずともに兵衛佐が頭を切つて、我が塚にかけよ」との罪深き遺言をのこして榮華の生涯を終つた。

木曾に育つた冠者義仲、火牛の計に忽ち維盛を走らし、直ちに都に迫るや、臆病なる平の宗盛、一戦にも及ばず都落ち、平氏榮華の夢は醒めて今や痕形もない、今日は西、明日は東と、「波に流浪の藻汐ふね、げに風の前の塵に同じき運命」とはなつた。

九郎判官義經、智謀驍勇古今に絶する名將たる彼れに攻められては、一の谷の天險も

忽ちにして破られ、屋島の浦の汐風も、彼れを防ぐに由なく、平氏の眷顧最も厚かつた熊野の別當堪増も、勢に附くは世のならひと、兵船二百餘艘を率ひて、若一王子の御正體を榊の枝に飾り附け、堂々源氏の勢に加はつた。

この新手の水軍には、海に慣れたる平軍も、忽ち屋島を逐ひ出され、又もや西國の浪に運命を託せざるを得ず、逃れくゞて筑前の國、箱崎の津まで辿り着けば、いづこも早や秋の空、九國の輩悉く源氏に心を寄せて、此所に留まるべくもない、浪と共に漕れ行くこそ哀れなれであつた。

(二) 源平壇の浦の對陣

關門海峡の出口を扼する、長門の彦島は、平氏最後の根據地となつた。

平氏の一族知盛は、平軍唯一の良將であつて、彼れの策は、陸上に於ては到底源軍に當るべき力のないことを思ひ、味方には山鹿・菊池・原田・松浦等の、多年訓練を経た水

軍を有し、敵は水戦に慣れざる東國兵なり、我の長を以て、彼れの短を撃ち、最後の運命を一舉に決するは、水戦にしくはなしと決心した、且つ畏るべき九郎義經の戦略は、常にその機敏なる行動により、背面攻撃を以て、味方の不意を衝かれることであつた、一の谷に於て、屋島に於て、何れも此戦略にかゝつて脆くも敗をとつたのである、故に今回は背面攻撃を計畫することの出来ぬ地點を選んで、其海上で雌雄を決せんものと策したのである、その選びに當つた修羅場は、關門海峡よりまさに内海に入らんとする南側、豊前田の浦の海上であつた。

關門海峡、早瀬の瀬戸は、音に聞えた潮流の難所である、東方鳴戸の海峡と相並んで、老練なる漁夫も、最も怖るゝ急潮である、漲潮には外洋に流れ出で、落潮には内海に流れ入る、其變化一日に四回、其速度一時間約八哩、普通汽船の航走する位の速さである、此の變化する急潮に加へて渦流もあり、湍瀨もある、實に危険此上なき海上であつて、現今でも水先案内なしでは、外國汽船は此所を通航し得ない。

此の難所を前に控へて海に慣れたる平家の軍船五百餘艘、ここを先途と覺悟した其模様は、正に難攻不落の堅城を、決死の勇士等が、守つたもかくやと想はれるばかりである。

一方攻手の源軍、大將九郎義經は、結局平氏を全滅するには、水軍の必要なることを早くから知つておつたが、元來平家と異つて、海面に根據を有しなかつた東軍には、急に水軍を造り得べくもなかつた、一の谷に敵を逸したのも、屋島に危険を敢てしたのも、すべて水軍を有しなかつたからである、しかし爰に至つて愈々水軍の必須に迫られ、あらゆる手段をつくして、軍船を集めた、幸にして熊野の船二百艘を手始めに、伊豫の河野氏等、各地の豪族或は海賊船を招致し、特に水路の案内知つたる、周防の船奉行船所正利が、四十艘を献じて味方に參つたことは、源軍にとつて大なる助けであつた。

次第に集合した兵船、合して七百餘艘、鳥合の衆とはいへ、各々海に熟練のつはもの、

旭と昇る源氏の勢、名將義經の指揮を奉じ、あなどるべからざる強勢であつた。多年の怨、父の仇を報ゆるは此時なり、兄頼朝の勘氣を和らぐも此勝利にあるべしと、義經の勇氣、日頃に十倍、勝つて鎌倉に凱旋するか、敗れて魚腹に葬らるゝか、運は正に此一戦にあるべしと、始めて水戦に臨む義經は、案内知らぬ戦場ではあり、新附の兵には、十分の信頼も置けず、注意の上にも注意を加へて、戦の準備に細心な努力を拂つた様である、鴨越のさか落しに、大膽そのものゝ如くに思はれる義經も、決して暴將ではなかつた、彼れには深謀もあり、遠略もあつたのである。戦の前日義經は、ひそかに田の浦の對岸、串崎の船十二艘を徵發し、親らそれに乗じて、海峡の地勢、潮流の模様を、大略視察し、明日の作戦計畫を定め、機熟せば一舉に敵の本陣を衝き、立所に勝敗を決せんものと、深く覺悟する所あつた様である。

(三) 源平最後の會戦

時は壽永の四年、三月二十四日、西洋では紀元一一八五年で、ヨーロッパは十字軍の大遠征に、まさに熱中せる時であつた。

此日平家の大將新中納言の知盛、傾く赤旗の運命を決するは此時とばかり、船の舳に立出でて大音聲。

「軍は今日を限り、各々退く心あるべからず、命を此時に失て、必ず名を後の世に留めよ、東國の奴原にわびれて見ゆな、心を一にして義經を取つて海に入れよ、今度の合戦此事にあり」

と軍兵を激勵し、九國の勢、菊池、原田の兵船三百餘艘を先頭に、時まさに正午、急潮變じて外海より内に向ひ、東流駛走するに乘じ、勢猛く、敵の軍船目掛けて突撃した、源平最後の幕はこゝに愈々開かれたのである。

知盛の計略は、潮流に従つて源氏の船を、満珠、干珠の島に壓迫し、流れの變ぜぬ中に、勝を決せんものと謀つたのである、且つ平軍の唐船には、大將分の乗れる様に見

せかけて、實は雜兵を乗込ませ、普通の兵船には、一族始め屈竟の勇士を乗せ、源軍が、唐船目掛けて、攻寄せる所を、平家の兵船三方から追つとり巻き、義經を倒さんものと企てた。

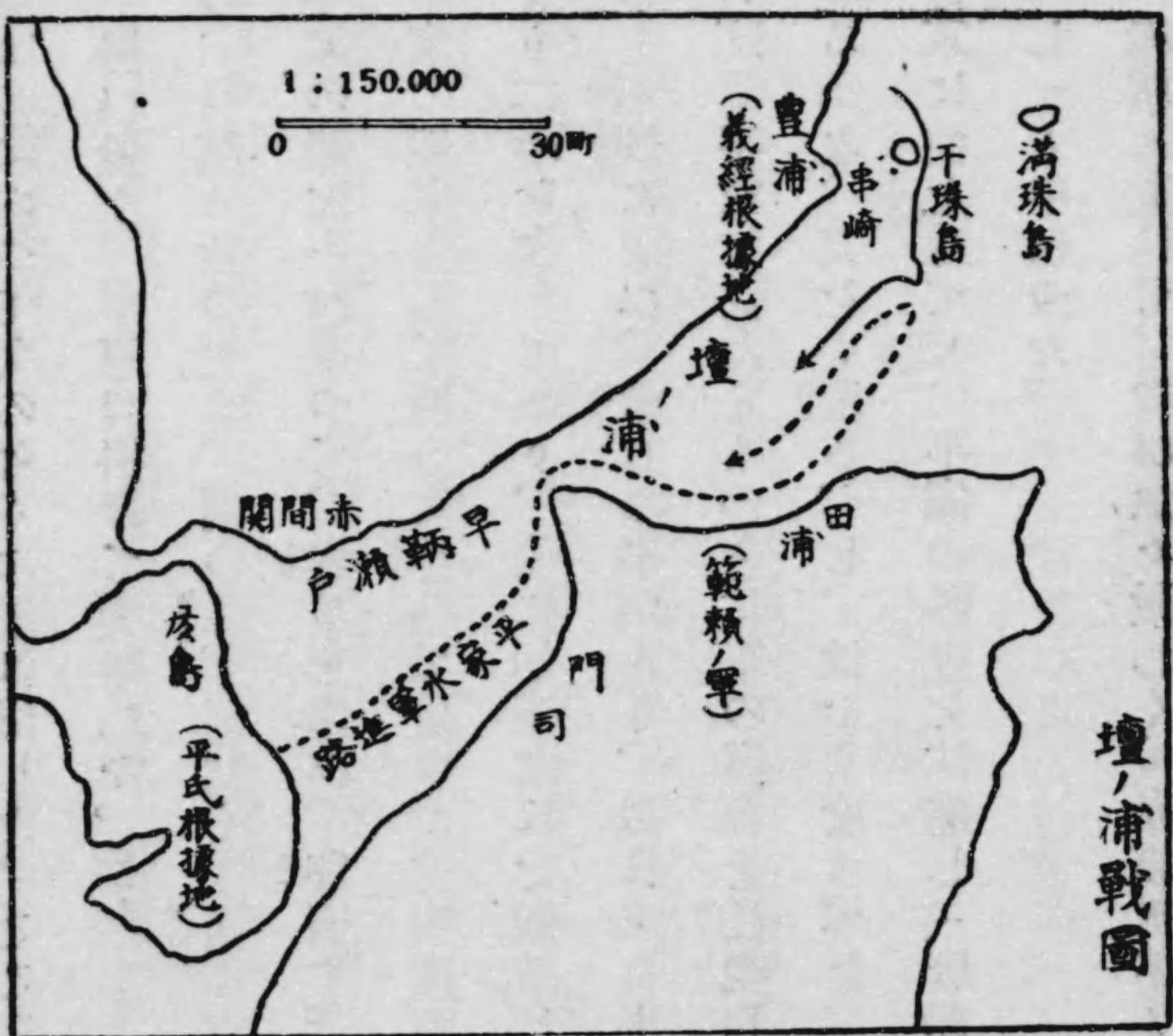
兩軍次第に近づくや、互に関を發する聲、鎗矢の響、數萬の軍兵こゝを先途と戦ふ物音、

「上は蒼天に聞え、下は龍神も、定めて驚き騒ぎ給ふらんとぞ覺えたる。」

平軍先手の菊池、原田の徒、弓の上手、大矢共をそろへて、散々に射向けたから、源氏の討たるゝ者少なからず、次第に後ろへと指し退く。

「平軍勝ちぬ」と勢に乗じ、潮に従ひ、愈々激しく攻めかゝつた。

戦の始めは平軍のために追潮であつて、源軍には不利の状況を呈したが、之れ義經の豫め覺悟しておつたことで、源軍は北東方満珠、干珠の二島附近に、徐々に退却しながら、始めは主として、敵船の船頭を倒すに力を用ひ、船の操縦を、困難ならしめる



壇の浦の海戦

の奇策をとり、退嬰的の戦争を支持しておつた、一步退けば爲めに全軍の敗退を來たすことは史上よくある例であるが、味方の英氣を挫かず、肅然敵軍を、我が術中に誘ひ寄せることは、是れ名將の能くするところ、さすがは義經である、味方の軍中些少の困亂も來たさず、其中、時の移るに従ひ、潮流の方向は、豫期の如く、更り始めた、今の午後三時頃、東軍に都合よ

く、潮は西に向つて矢の如くに流れ出した、ここぞとばかり、白旗振り立て、源氏の
總軍、勢ひ鋭く、平軍目掛けて突撃した。

差詰め、引詰め放つ矢は、雨の注ぐが如く、面に立つ平家の侍共、散々に射倒さる、
或は平家の船にとび乗つて、當るを幸ひ、薙倒す。

時に平家の殿軍として西方に控へて居つた、四國の軍船三百餘艘、大將田口成良は、
兼てより二心を藏してあり、先に知盛之れを觀破して、成良を斬らんと欲したが、宗
盛之れを不憚に思ひ、赦した事がある、彼れ成良平家強からば、源氏を射ん、源氏勝
色ならば、平家を伐たんものと、軍の模様を注視して居つた。

「誠なるかな、天をも度るべし、地をも度るべし、只不可度は、人の心と」
成良東軍に使を立て、平家の計畫を注進し、「唐船には目を掛けず、兵船目指して進
まるべし」と申送つた。

白旗、赤旗入亂れて、戦ひ愈々激しく、赤旗次第く西へ西へと、潮と共に、追ひ

落さる、源氏の軍勢、唐船には目もくれず、兵船目掛けて、まつしぐらにぞ追ひ追つ
た。

(四) 平氏 全滅

平氏の方では若し此日の戦、結局利を失つた場合には、尙西に逃れて彦島に據るか、
又は遠く西海にも走らん、との考へもあつた様である、然るに何事ぞ、此危急の際に、
西方逃路を塞いで居つた、四國勢三百餘艘、忽ち翻つて、赤旗赤じるしをかなぐりす
て、白旗押し立て、新手の勢鋭く、平軍の退路に立ちふさがつて攻め立てた。

成良の嫡子田内左衛門 此役に義經の軍に、生捕れ、恩愛の途のかなしさに、今一度
我が子を見むとや思ひけん、かく翻つて源軍に應じたとのことであるが、事實は始め
から、其下心があつたに相違ない、宗盛、知盛哀れさやつ斬るべかりつるものと、
後悔したが甲斐もない。

平家の軍勢、こは何事ぞと、驚く間もあらせず、源氏の兵共之れに力を得て、平家の船に漕寄く亂れ乗り、遠きをば射、近きをば斬る、「源平の國争ひ、唯今日を限りとぞみえし」今は平家の軍船、全く敵船に圍れ、逃れ出るすきもなく、且つ遙かに陸上を見渡せば、三河守純頼の率ひる、三萬餘騎の源軍、轡を並べて、平家の輩一人も逃さじものと、浦路を歩んで、遠矢を射る。

平家の公達、女房等こはいかにと、怖れをのけ共、詮すべもない。

時に新中納言の知盛は、

「かねて思ひ儲けしことなり、めづらしき、東男共を、御覽に入るべきものを」と打笑ひながら、手づから船中を掃除して、見苦しき物を海に投げ入れ、こゝ拭え、かして拂へと呼びまはる。

さすがは二位の尼平の時子は、今は限りと覺悟し、練衣、白袴の盛装に、神器をたばさみ、

「我身は女なりとも、敵の手には渡るまじ、君の御供に參るなり」と舷に立出づれば、按察局は時に御歳八つにならせ給ふ、安徳天皇を懷き奉り、帯にて我身にしかと、結び合せ進らせて、舷に臨まる。

「こは何所へ行くべきぞ」と仰せられけるこそ、げに悲し、二位の尼、

一目出度き西方浄土へお供申しさふらう」と

「今ぞ知る御褒すそ河の流れには

浪の下にも都ありとは」の一首を残して、忽ち海に投ぜられ、つゞいて高貴の公達、上臈等、皆おくれじものと、之れに従ひ波に没す。

「昔は一天の王、萬乗の玉體、今は雲上の龍下つて、忽ちに海中の鱗となり給ふ、未だ十才にも満ち給はぬ御齡にて、波の底に入り給ひけん、哀と言ふも疎なり」
其他平家の大將等も、つぎく海に入る、臆病なる宗盛のみは、舷には立出でたれ共、餘り恐ろしくてか、唯茫然とあたりを見渡すのみ、侍共此様を見て、餘りに淺ま

しく、走り過る様にして、海へつと突き落す、併し沈みもやらず、間もなく源氏の兵に、引上げられ、生き恥をさらせしこそ、末代までも名折れなる。

平家隨一の勇將能登守教經は、今ぞ最後の花を咲かせんと、片手には白柄の大長刀、片手に大太刀を抜き持ち、源氏の船に乗り移り、乗移り、沖より磯、渚より沖へと、散々に薙ぎまはる、其勢の烈しさ、面に向ふ者もない。

「判官いづこそ、九郎何所ぞ」とたづね廻る、さすがの義経も、此勢には叶はじと、忽ち二丈ばかり、躍びこえた、このはや業には、教經及ばず、長蛇を逸して遺憾にたえず、源兵の大力、安藝の太郎、同じく弟次郎の二人を、兩脇にかいばさんで、海にぞ飛び入つた、續いて知盛も、一族郎等と共に海に入る。

日輪まさに西海の波に沈まんとする頃、一時は天下になびきし赤旗も、悉く海の藻屑となりはて、白旗のみぞ、今や時めく天下とはなつた。

榮枯盛衰は、時の運とはいひながら、權花一朝の夢、平家一族の末路こそ、げに一大

悲劇ではある。

壇の浦の海戦は、我が國史上、稀れに見る海上の決戦であつて、兩軍ともに策略をつくし、身命を賭した、海戦史上の華とも言ふべき戦であつた、たゞ爲めに玉體を波間に沈め奉りし事こそ、返へすくも恐懼惜く能はず、實に遺憾の極みである。

傾く運の果てとはいへ、田口成良の裏切りこそ、平家をして悉く西海の藻屑たらしめた、主因であらねばならない、げに人心の和、不和こそ、戦の勝敗を決する、鍵とも言ひ得べしである。

海に優勢を維持して居つた平家は、陸上に於ける數回の敗戦にも、猶よく其命脈を維ぎ得たのであつたが、海に負け、海上の勢力を失ふと同時に、平家は忽ち全滅し、内海の海權を制した源氏は、直ちに天下を平定し得たのであつた。

(五) 我國海事の消長

序に記す、神武天皇の御東征が、主として海路に依られしによつて知り得る如く、我國は古來海事に、十分の發達を示して居つたのである。神功皇后の三韓征伐、阿部比羅夫の蝦夷征討が、いづれも我國海事の發達してをつた證據である。

壇の浦の海戦、此の比類なき、海上の難所に於て、雌雄を決したる、實に大和民族の海戦手腕を示して餘りありと言ひ得べしである。然るに鎌倉武家時代以後、次第に海事を怠り、元寇の難あるや、之れを海上に破るの水軍なく、降つて秀吉の朝鮮征伐には、陸では破竹の勢を示しながら、海上は終始、朝鮮水軍に悩まされ、さすがの太閤をして、遂に其目的を達し得ざらしめたのも、水軍の不振に由るのである。

徳川時代鎖國の制は、愈々海事の不振を甚だしくし、沿岸に出没する黒船は、國民恐怖のまとなるに至つた、勿論其間、倭寇の支那海に横行するあり、御朱印船の南洋を始め、遠く太平洋を横断して、メキシコにまで往來せしこともあるが、間もなく其活躍は全く跡を断ち、後には海を恐怖そのものの如くに思ふに至つた。

幸にして明治維新以來、海事に就ても極めて急速の發達を遂げ、日清、日露の海戦、ともに偉大なる實力を發揮し得たことは、數百年間の失墜を恢弘して、我が海上勢力を樹立し得た次第である。

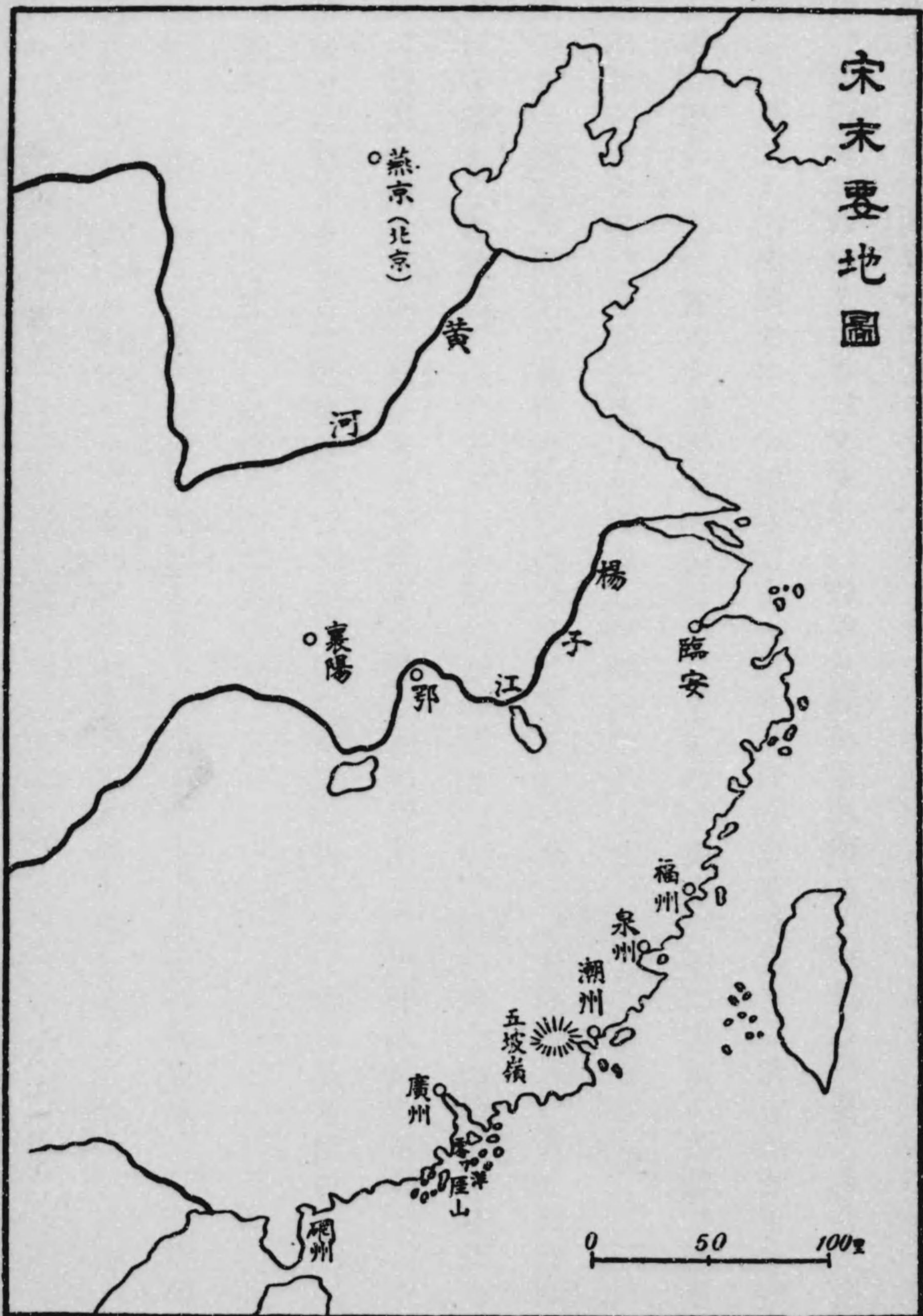
國民の海上に留意することの如何が、國家の消長に關することの極めて緊密なるものであることを、吾人は常に心得なければならぬのである。

匡山の戦 (西紀一二七九年)

(一) 宋と元

支那歴代中文弱と言ふ語の最よく當て嵌まるのは慥に宋朝である、元來支那人は餘り強い國民ではない様だ、其五千年に餘る長い歴史は、入れ更り、立ち代り、殆ど絶えず北方に現はれた、蠻族との闘争の記録であつて、而して其結果は、常に支那人、即ち漢族の敗北に終つてゐる。

支那人は元來武よりも文を尙ふ國民である、「柔よく剛を制す」といふが之れを言ひかへて、「文よく武を制す」といひ得るならば、漢族の歴史は正に其言に的中するのである、常に武に敗れて、遂に文を以て勝つた記事の連續が、漢族の歴史であると、言つても大した、間違ひはあるまい。



宋末要地圖

武力を以て中華を征服し、其主人公となつた蠻族は、幾何もなく、文化の前に兜を脱ぎ、其歎美崇拜者となり、主客その位置を代へるに至るのである。蒙古人の元朝にしても、滿洲人の清朝でも、皆然りである、文を代表する漢族と、武を代表する蠻族との争鬪史が、之れ實に支那歴史の根幹をなすものである。特に宋朝三百年の歴史は、此の文と武との、攻争を最よく代表した時代であらう。

宋の太祖趙匡胤が、五代の周に代つて、天下を一統し、宋朝の基を立てたのは、必ずしも嚇々たる武功、以て天下を平定したのではない、俄に將士の擁立する所となつて、後周の國を纂ひ、易々と天下の權を握つたのである、太祖は武力を以て、十分に全國を威壓することは出来なかつたが、併し文治に於ては、稀に見る偉材であつて、漢族をしてよく心服せしめ得たのであつた。

太祖の文治主義は、宋朝歴代の踏襲するところとなり、文化の發達は、所謂宋學の興起となつて、盛唐と相並んで、支那歴代中に、不朽の名譽を荷ふに至らしめた。

然しながら武の方面に於ては、之れに反して甚だ振はず、絶えず外患に苦しみ、悲憤慷慨するも、力及ばず、屈辱又屈辱、遼に破られ、西夏に侮られ、金に苦しめられ、國勢漸を逐ふて縮まるのみ、終に蒙古の興起によつて、全く滅亡するに至つた。文弱と言へば、實に文弱である、而し文弱必ずしも悉く排斥すべきものではあるまい、文武相並ぶことは、國家としての理想である、我れの武を、鍛へるは、我れの弱きに乗ずるの機會を、敵に與へざらんが爲である、文は尙ぶべし、武も等閑に附すべからず右文左武は、誠に國家の理想であるが、其完全なる實現は、中々容易ならぬ困難である、時には武力のみ特に卓越して、文事の之れに及ぶなく、防守の用たる武を濫用して侵略の具となし、以て世界的大帝國の建設を誇つた國も、史上に少なくない、而し之れを悠久の歴史に考へて、文の光輝を以て、名譽を不朽に垂ると、一時の武功を以て大帝國を建設するも、忽ち國亡んで、泡の消去る如く、何等史上に價値なきものとそれ何れをか採るべきであるか。

敗北と屈辱との外交を繰返した宋朝は、外難に苦みながらも、猶能く三百餘年の國運を保つたのは、支那歷朝中、決して短かい方ではない、のみならず其滅亡の歴史には、史上稀なる多數の忠臣義士を出し、其義烈を後世に垂るゝもの、恐らく宋朝に及ぶものなしであつて、吾人は決して其屈辱の事蹟を嘉する者ではないが、其文に徹底せしには多大の敬意を懷く者である。

偕て漠北不見罕山附近に興つた、蒙古部の酋長鐵木眞が、次第に外蒙古を征服し、斡難河源に於て、大汗の位に即き、蒙古の太祖、成吉思汗と號したのは、西紀一二〇六年で我國では鎌倉將軍の三代目、實朝の四年にあたり、西洋では第四十字軍が、同志討を演じて、東ローマ帝國を倒した頃であつた。

爾來モロコの勢力は疾風迅雷的に發展して、太宗、定宗、憲宗を経て、大元大可汗世祖に至る、僅々四代七八十年間に、その鋒の向ふ所、天下敵なく、其領土歐亞に跨り、古今に絶するの大帝國を建設した、その速きこと、その大なること、西洋に於け

る、サラセンの大帝國と比して、他に類例なき程である。○
宋の文弱に對して、蒙古の武斷、誠に兩極端の好對照である。

(二) 宋の敗亡

元の世祖忽必烈は、其大勢力を以て、當時支那の南部に、漸く餘喘を保つて居つた、南宋をも平らげて、支那全部を統一せんものと企圖し、伯顔、阿珠等の諸將に大軍を授けて、南征せしめた、世祖は同時に、東方には日本侵略を企て、南方ではインド支那半島の征服をも志しつゝあつた、其雄大なる企畫は、太閤秀吉の雄略と、相比すべきものがある。

伯顔等の元軍は、次第に宋軍を破り、數年間宋軍の能く守つた、樊城、襄陽も相次いで陥落し、元軍破竹の勢を以て、揚子江を渡り、南宋の都臨安(今の抗州)に迫つた。時に宋の度宗己に崩じ、僅かに四才の、恭帝立ち、謝太后制を稱して、天下に勤王

の兵を徵するや、張世傑、文天祥、李常等忠義の士、共に兵を率ゐて、入衛したが、既に傾き盡した、宋の勢、又如何ともすること能はなかつた、宋の大臣陳宜中、府庫を致して、降を請ひ、恭帝は太后と共に、拘へられて、元の都に送られ、爰に宋朝滅亡した、時に一二七六年、我が鎌倉執權時宗が、元使杜世忠等を龍の口に斬つた、其翌年である。

臨安陥り、恭帝等捕へられし時、帝の二弟、端宗昞、及び衛王昺は、近臣に補けられて、南に逃れ、温州に到つた、時に陸秀夫、蘇劉義等従ひ來り、陳宜中、張世傑等を召し、福州に府を興し、宋室の復興を計つて、諸路の義兵を招き、勢やゝ振起した、文天祥も亦兵を率ゐて參會し、既に亡んだ宋朝、猶此所に復興の氣勢を示したのである。

然しながら天、宋に幸せず、此の危急の秋に際しても、猶宋の痼疾である、文臣と武人との、黨争は絶えなかつた、宋朝滅亡の一原因は、慥かに此黨争の禍である、特に

文臣と、武人との抗争である、先に南宋の初、秦檜政を専にして、金國との和を謀るを主とするや、之れに反対して、戦を主張した忠勇の士、岳飛、張浚等を斥けたる又は南宋末期、理宗、度宗の世、賈似道政を執り、蒙古との和交を策したから、將士等不平措く能はず、爲めに呂文煥、范文虎等の名將が、蒙古軍に降服せし如き、其著しき例である。

文臣たる陳宜中は、己れ兵事に慣れざるの故を以て、初は諸事、陸秀夫の意見を徴したが、間もなく意見衝突、爲めに秀夫は湖州に謫居せしめられ、文天祥代つて用ひらんとしたが、彼れは諸事、陳宜中に決するを見て、任を受けず、まさに一縷の命脈を保つ宋朝、外には元兵四方より迫りつゝある、此危急に際して、猶内に相闘ぐとは、實に恐るべき強敵は、外にあらずして、寧ろ内に伏在したのである。

間もなく元將阿朮干等、大兵を率ゐて福州に迫るや、宋軍防ぐに由なく、陳宜中、張世傑等は、端宗を奉じて、舟に乘じ、南方潮州に走つた、恰も一の谷の合戦に、敗北

した平家の軍が、悉く舟に乘じて四國に走つたのとよく似てゐる。

大廈の將に倒れんとするや、一木のよく支へ得る所でない、忠直無比なる文天祥、孤軍を以て、屢々元軍と福建の各地に奮闘したが、頽勢を挽回する能はず、遂に五坡嶺の戦に、運つたなくして元軍の捕ふる所となつた。

今や宋軍、陸上に全く其根據地を失つて、漸く海上に其命脈を維持する状態となつた、潮州に逃れた、張世傑も、海上より泉州を攻めて、之れを回復したが、矢張り一時のこと、間もなく張弘範の率うる元の大軍南下するや、忽ち奪ひ還へされてしまつた。

此時先に陳宜中のため、謫居せしめられた、陸秀夫は、張世傑の斡旋によつて、潮州に來り、日ならずして滅亡せんとする、宋朝のために、猶身命を惜しまず、之れに反して陳宜中は、自ら先づ南方占城に到つて、帝蒙塵の、地を備へるためと稱して、軍を去り、遂に往く所を知らない、彼れは茲に至つて、宋の天子を見捨てしまつたのである。

時の元の至元十五年、端宗病を以て網州に殂す、僅かに十一才、陸秀夫は度宗の一子、尙存す、宋の命脈未だ盡さずとなし、其弟衛王○を奉じて、宋の社稷を存せんとした然し日に縮まる落日の運命、僅かに海上の一隅に、其旗を保つのみである。

忠臣張世傑等は、衛王を補けて宋の全軍を率ゐ、天險を恃んで南方厓山に移つた。

此所は廣府（今の廣東）の南方に近く散在する、大小の群島より成り、山岳と相對して自然の門戸を造り、潮汐極めて急で、防守に最も險なる場所であつた、恰も敗殘の平軍が、漸く海上に餘喘を保ち、壇の浦の天險を恃んだのと相似たるものである、宋の餘孽、剩す所今や二十萬、此の天險に其最後を托したのであつた。

（三）厓山海上の決戦

元將張弘範、彼れは宋の忠臣張世傑の一族である、世傑は弘範の父・張柔の從子である、張柔が元に從つた時、世傑は遁れて宋に仕へた、弘範は元の勇將として、其名天

下に高く、世祖の信任亦極めて厚く、其死するや淮陽王に封ぜられてゐる、世傑は又宋の忠臣として、最後まで變らず、社稷と運命を共にして、忠直の美名を後世に残した、こは兄信幸が家康に從つて忠勤を厲み、父祖の業たる上田の城を保つて家名を存じ、弟幸村は太閤の恩に報ぜんものと、大坂城に入つて秀頼を助け、兄弟敵味方と分れて、大坂に戦つた、眞田氏の事蹟と甚だ相似たるものがある。

彼れ張弘範は、世祖より蒙古漢軍都元帥に任ぜられ、寶劍を賜はつて、軍事を專決するの權を與へられ、自ら李恆を薦めて副將となし、揚州に進んで、水陸の軍二萬を選び、之れを率ゐ、宋の全滅を期して南下した。

あくれば翌至元十六年一月、張弘範の元軍、朝陽港にて乗船、舳艫相銜んで南下し、途に宋の斥候を捉らへ、よつて宋軍の悉く厓山に在ることを知り、一齊に厓山目掛けで、進撃した。

宋軍では各隊の將士、相集つて軍議を凝らした、元軍に海の口を塞がれざるに先んじ

て進撃し、勝たば幸若し不幸にして敗れたならば、猶再舉を期して西に走るべしとの意見もあつたが、張世傑は熟慮の後、之れに反対した、宋軍久しく海上に在り、爲めに士卒離反の徴がある、若し此際漫りに動けば、必ず散ずるの虞れがあるから、陣を厓山に堅くして、宋の運命を此の海戦に決すべしと主張し、直ちに防戦の計畫を立てた。

宋軍の船舶千餘艘、悉く艦を中にし、舳を外にして横列に連ね、大索を以て各船を縛り、且つ四周に樓を起して城堞を築き、以て海上に一大城廓の如き堅固なる防禦陣を備へ、決死の覺悟を以て、元軍の來襲を待つた。

攻手の元將張弘範は、如何なる計を以て、宋の防禦陣を破らんとするか、彼れの謀略如何と見るに、厓山は北方の海底、甚だ淺く、船を浮べることが出来ない、従つて此の方面からは、宋軍も逃走不可能である、故に元軍は東方より南方へと、舟師を伸ばし、宋軍を全く包圍する形勢をとり、且つ陸上には騎兵を縱つて、宋軍の糧道を斷ち

以て其自滅を待つの計を立て、尙時に燒討の攻撃を加へんものと準備した、茅茨を積んだ船に、油を注ぎ、風に乗じて火を縱ち、宋船目掛けて走らすのである。

支那では古來水戦に於て、燒討の計はよく行はれた様である、かの三國時代、江北を一統した曹操が、八十萬の大軍を率ゐて南下し、水軍を江に浮べて、一舉に吳を破らんとした時、一世の奇士諸葛亮の説により、吳の孫權は、漢の劉備と結んで之れを江に邀撃するに決し、名將周瑜をして水軍三萬を率ゐて、北軍を揚子江中流の赤壁に攻撃せしめた、時は紀元の二〇八年、周瑜の部將黃蓋、敵船燒討の計を立て、敵軍の油斷に乗じ、十艘の鬪船に、枯柴を満載し、油を灌ぎ、東南の疾風を利用して、敵船に近づく數町、忽ち火を放つや、炎々たる火船矢の如く、見る間に敵船悉く燒きつくされ、火光天を焦し、江水もために乾涸するかと疑はるゝばかり、曹操の大軍、忽ち敗北して、爲めに天下三分の形勢をなした、是れ有名なる赤壁の戦である。

西洋では海戦に火計を用ひたことは、餘り多くない様だ、只アラビヤの一角に起つた

サラセンが、破竹の勢を以て、四方に大征伐を企てた時、紀元八世紀の初、小アジアより西進し、東ローマ帝國の都コンスタンチノープルに薄つた、東ローマではカリニクスが發明したと云ふ「ギリシヤ火」を以て、サラセンの兵船多數を焼拂つて、勝利を占めたとのことであるが、之れは火薬の様な物を、箭の先に付け、敵船に放つて火を發せしめたものであらう。

さて張弘範の試みた、焼討の計は、赤壁のそれに真似たものである様だ、而し餘り効はなかつた、且つ宋軍でも、之れを防ぐために、船の周りに泥を塗つて、熱氣を受けない様にした、元軍焼討の計成らず、宋軍固く守つて動かず、張弘範も如何ともするなく、攻めるに苦んだ。

よつて張弘範は、宋將張世傑を招き降さんものと企て、偶々世傑の甥に當る、韓と言ふ者が軍中に居つたから、彼れに書を作らしめて、三度び世傑に降を勧めたが、彼れの心を動かすこと不可能であつた、世傑答書の一節に、吾降れば生を全ふし、且富貴

を得ることを知る、但し義は移すべからずと、古來忠臣の事蹟を數へて、従はなかつた。

張弘範は、世傑勸降の計を猶捨てず、先に五坡嶺の戦に捉へた、宋の忠臣文天祥が、此時元軍中に、捕へられて居つたので、弘範は彼れに命じて、世傑に降を勧むるの書を作らしめんとした、天祥の書を以てすれば、恐らくは世傑もそれに従ふならんと、惟つたのであらう、然るに文天祥が其書を作することに、どうしても應じない、我れ吾が父母の國土を守る能はず、如何ぞ父母に叛を教ふることを得んやと、しかし弘範固く迫る、よつて文天祥、先に過る所の零丁洋の詩を作つて、弘範に示す。

「辛苦遭逢起二一經、」

干戈落落四周星、

山河破碎水漂絮、

身世浮沈風打萍、

惶恐灘頭說二惶恐、

零丁洋裏歎二零丁、

人生自古誰無死、

留取丹心照二汗青、」

さすがの張弘範も、文天祥の義心に感じ、又一言もない。

次で弘範は、厓山の人民を唆かして、宋に叛かしめんと謀つた、しかし元來宋の國恩に感ずることの深い南方の人民は、一人も之れに應じない、手をかへ、品を更へ、宋軍を招降せんとして成らず、死を決した宋軍堅く守つて動かず、元軍やむを得ず、單に包圍を密にして、敵の糧道を斷ち、以て宋の自滅を待つより、他に手段なき状態であつた。

(四) 宋の全滅

籠城の苦痛は、飲水食料の補給が十分なるを得ない點にある、いかに難攻不落の金城も四方全く圍まれて、軍糧の途が完全に斷たれたならば、落城は單に時日の問題である、特に飲料水の缺乏は其最も苦痛とする所である。

宋軍人や厓山の海中に、全く敵軍に閉塞せられて恰も釜中の魚、水上に在つて最も苦

んだのは、矢張り清水の得難きことであつた、海水は飲むを得ず、水を眺めて渴するの苦痛は、糧食の缺乏よりも更らに耐へ難いことであつたらう、兵士等遂に海水を掬つて口に入れるや、忽ち嘔泄を催し、愈々苦しむのみ、故に宋軍一日も速く決戦するか、或は遁路を開かんことを切に望んだ、宋將張達の如きは決死の覺悟を定めて、夜襲を試み一方の血路を開かんとしたが、元軍よく戦ひ、撃退せられた、戦つて勝つ能はず、又逃路をも開き得ず、宋の運命愈々厓山に谷まつたのである。

宋軍の窮困を察した元將張弘範、時分はよしと、其軍を四分し、各々相去る數町、四方から一時に宋軍目掛けて突進した。

張弘範全軍に命を傳へて、「潮の正に滿つる頃、宋舟必ず東に逃れんとするに相違ない其時樂の響くを合圖に、急に之れを攻めて戦へ、一艘をも遁すなかれ、命に違ふ者は之れを斬に處すべし」と。

時に元の副將李恆、北方より退潮に乗じて、宋軍に薄つた、間もなく午時、海潮正に